

302.22
N 83



* 0000189000 *

2

0000189-000

302.22-N83ウ

十二月八日の上海

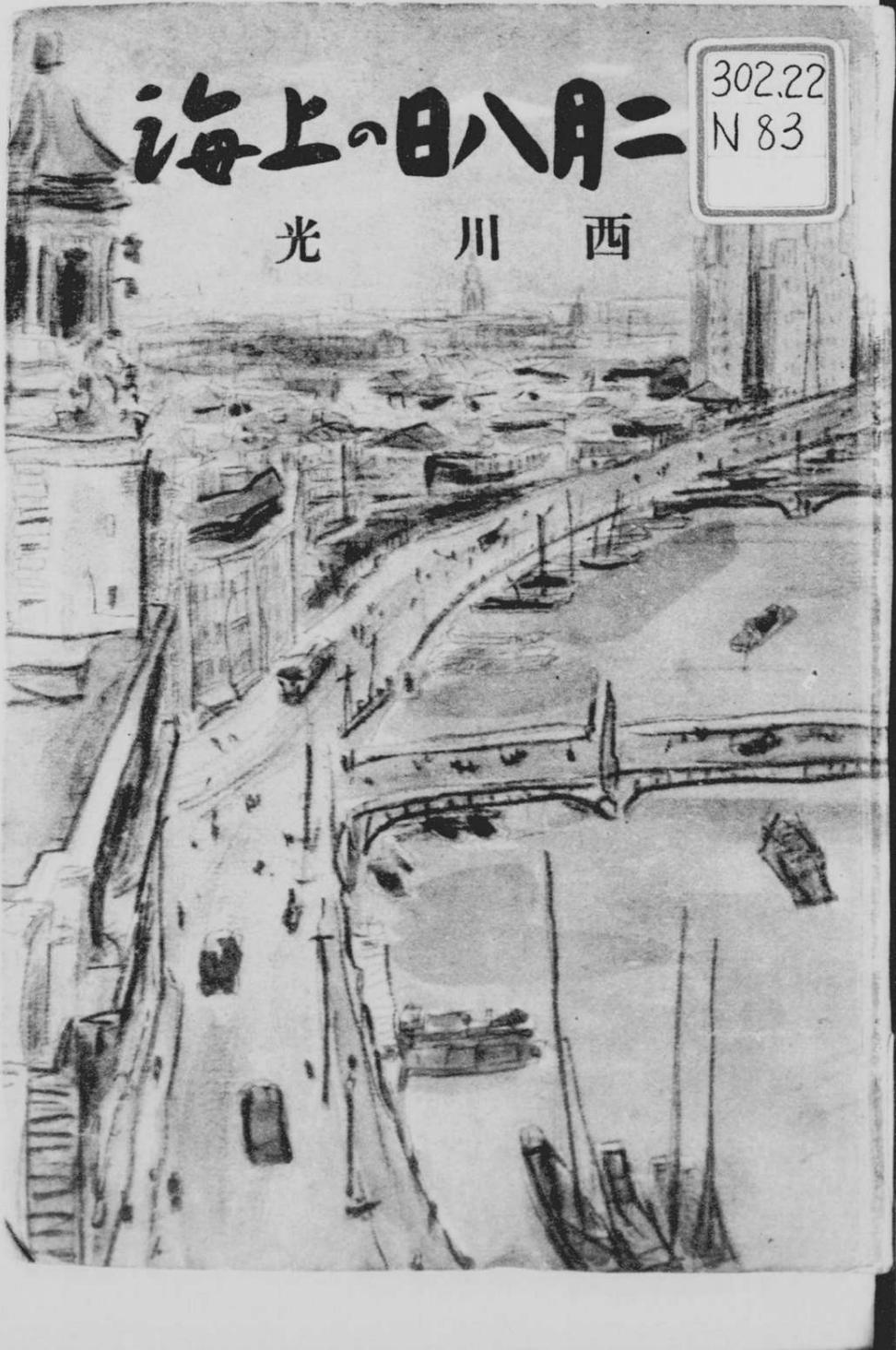
西川光・著

泰光堂

昭和18

AAB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けて文化庁長官の裁定を受け使用するもので



137



302.22
N 83

十二月八日の上海



964
159

序

西川君は文藝春秋社の特派員として、大陸に渡り、主として上海南京を中心にして、中支の報道陣に活躍してゐたが、時恰も記念すべき十二月八日を、上海で迎へることになつた。上海の租界が從來如何に米英的であつたか、僕も親しく見て驚いたのであるが、この租界も十二月八日を期として、ハツキリと新しく東亞本來の姿に還つたわけである。

その意味で十二月八日の上海といふものは、十二月八日の眞珠灣、比島、グアム、シンガボール等に劣らぬ意義を持つてゐると思ふ。

此の日に上海に居て、親しく此の日の歴史的變貌の諸相を見たといふことは、西川君にとつて眞に記者冥利といふべきだつたと思ふ。そして、よく足で動き、よく眼で見た結果を忠實に記録したのが本書である。なかなか才筆であるから、最後まで讀者を倦ましめないと思ふ。數多い大陸のルボルターデの中でも異彩があり、興味もあると思つて、茲に序文を書いた次第である。

菊 池 寛

目 次

序

菊 池 寛

揚子江の雨

三

輸送船にて

四

九江の碼頭

五

半壁山を過ぐ

一元

碼頭の時計台

四

兵隊の新聞

四二

江漢中學を見る

五二

黃鶴樓にて

六四

武漢大學にて

六六

南京の城壁

八九

揚子江の空から

九

光華門の壁

一〇四

奏淮河畔

二六

鶴鳴寺の鐘

三元

蘇州の秋

一翌

蘇州の宿

一翌

陸墓鎮にて

一天

上海の橋

一全

パーク・ホテルにて

一六

中華模範青年隊本部

一三

上海の橋

一全

西川光

十二月八日の上海

揚樹浦のユダヤ人	一一七
大光明戯院にて	一一〇
十一月八日の上海	一一三
世紀の砲撃	一三〇
租界進駐	一三一
變貌する租界	一三三
進駐の午後(八日)	一三四
歴史の轉期(九日)	一五二
あとがき	一五四
装幀 三輪孝	一五五



揚子江の雨

裝訂

三

輪

孝

輸送船にて

「氣を付け！ 敬禮ッ！」

狭い船室に、鋭い號令の聲が響き渡ると、兵士達の舉手注目を浴びて、H中尉が太い聲で命令を傳達する。

兵士達は、各自の忘備帳に鉛筆を走らせるのである。

船は揚子江の黃濁した奔流を、機關を力一杯に唸らせて、溯江をはじめたらしい。霧のやうな雨が、渦巻く濁流の上に、しとしと降つてゐる。

全長五千五百粍、この世界的な大河は、少し離れると、流れるでもなく、淀むでもなく悠洋としてゐるが、船の上から見ると、滔々たる水勢は、物凄まじく渦を巻き、音をたてて流れでゐるのである。

「凄い流れでせう」

命令の傳達を終へたH中尉は、船窓の方に歩みよりながら、私に言ふのである。

全く凄い河である。黃色い混濁した奔流は、底知れぬ無氣味な表情を湛へて、滔々と流れでゐる。しかも、江上に碇泊してゐる數千噸の汽船ですらが、決して大きくな見えないほどの、巨大な河幅をしてゐるのである。

「船中でも大變ですね」

「兵隊達ですか。いや、戰場ですかね」

この漢口へ向つて溯江する汽船は、逞しい兵隊達で充ち溢れてゐて、他に四、五人の引率の若い將校達が乗つてゐるが、便乗者は私一人だけらしい。

甲板を見ると、既に歩哨に立つた兵隊が、船の速度が加はるに従つて、横なぐりに吹きつける雨の中に、嚴然と立哨をしてゐる。H中尉の「軍隊ですかね」といふ言葉とともに、ここも戰場であるといふ實感が、烈しく私の心に迫つて來る。

船中の一隅には、衛兵所ができるて、既に數人の兵隊が詰めてゐる。

南京の碼頭も、浦口の街も、霧雨の中に消えてしまつて見えない。

「今頃の揚子江は減水期でして、兩岸の眺望は零ですが、増水期の時には、優に一萬噸級の船が、漢口まで溯江してゆくんですよ。兩岸の田畠にまで、濁流が氾濫して、もつと物凄い景色になります」

同乗の將校——K中尉が、兩岸を指示しながら語るのである。

減水期のために、揚子江の兩岸は、水に洗はれた幾層もの断層を見せて、地表が船の上有る場所もあれば、われわれの視野がやうやく地表とすれすれの場所を通る時もある。廣漠たる平原が際涯もなく廣がつてゐて、水牛に乗つた男の姿なども、ぽつんと見えたりなどするが、人家らしいものは、全く見當らないのである。

樹木らしい樹木もなく、耕地らしい耕地もない荒涼たる大地が、私の心に茫洋とした繙りのつかない感概を覚えさせるのである。

船は絶えず水深を測りながら溯江して行くのである。船首に立つた船員の一人が、長い紐の先に、重い分銅をつけ、赤、青、黄などの目印をつけたのを、濁流の中へ投げ込んでは、船橋の操縦室へ傳達してゐる。

蕪湖の市街が左手に現れて、直ぐに私達の視界から遠ざかつてしまつた。低い茶褐色の家々が、ぎつしりと一塊になつてゐた。

再び荒廢した荒野が、際涯もなく續きはじめて、どんよりとした雲が、低く垂れ下つて來た。

「今夜は、何處の邊りまで行きますか」

「安慶附近だと思ひますが、相當風が出て來ましたから……」

H中尉と船の事務長との話を、私は側で聞いてゐた。

窓から見る揚子江は、泥土の浪をたて、船橋では風が咆哮をはじめた。

「今夜は、安慶附近で碇泊することになるでせう。何しろ江岸から二軒も離れると、今だに残敵が出没するのですから、夜間航行はしないのです」

K中尉の話である。

大陸の際涯のない廣さが、地平線の彼方から、薄暮とともに、荒涼たる風をふくんで迫つて来る。ぼろぼろの帆を張つた戎克が、われわれの船の舷側をかすめたかと思ふと、瞬

時にして消えさせて行くのである。

朝辭白帝彩雲間 千里江陵一日還
兩岸猿聲啼不在 輕舟已過萬重山

李白のこの詩は、三峡の邊りを歌つたものであらうが、この奔流の流速から見ても、千里江陵一日にして還るであらうことが、充分に想像されるのである。

船窓から眺める揚子江の兩岸は、武漢攻略戦の北岸部隊、南岸部隊が、疾風迅雷の進撃をつづけた新戦場である。

「この附近で、我々も戦闘をやりましたが、あの苦しかつた戦闘も、今になつて見ると、懐しい思ひ出ですよ。船で揚子江を上下する度に、當時のことが思ひ出されましてね」

同船の將校達は、任官して内地から來たばかりの二人の若い少尉をのぞけば、何れも武漢攻略戦の勇士達ばかりだつた。

夕食を終つた頃に、船は機関を停止して、濁流の中に錨を投げ入れた。

（沿々として黄濁せる長江、安慶附近に碇泊す）——そんな文字を、燈火管制をした船室の、薄暗い電燈の下で、私は手帳の端に書きしるした。

淒まじい形相をした揚子江は、黄土の波濤を上げ、沿々として流域を浸蝕し、幾千年もの歲月を無視して流れてゐるのである。——私はその奔流の上に、今宵は一睡しようとしてゐるのである。私は南京の書店で購つて來た本の頁を操つて見た。

——揚子江の源流は金沙江であるといはれてゐるが、その金沙江も三つの源流が集まつたもので、本流は西藏の巴薩通拉木山の東麓から發してゐる木魯烏蘇であるといはれてゐる。木魯烏蘇は東南に流れて喀木の境に至り、更に巴塘の西境を經て四川の西境を横断し、雲南の西北境を貫いて蕃麗江府北境の雪山の北を經、この邊で金沙江の稱を得るが、その以前の喀木の邊りでは布賴楚といひ、巴塘の附近では巴楚といはれてゐる。

この一文を読んで、私は鞆の中から支那全土の地図を引きづり出して、熱々と揚子江の姿を鉛筆で辿りながら、一種の驚嘆をもつて見直したのである。

——金沙江は、それより東に流れて、四川、雲南の界に出で、雲南の諸水を集めて四川の叙州に至り、ここで岷江と合するのであるが、この兩江が合して、初めて大江、または長江の名がある。叙州からは四川の南境を横断して湖北に入り、それより湖南の東北境岳州に出て、ここで洞庭湖の水を集めて漢口に至り、更に東南に流れて江西の北境を劃し、東北に流れて安徽を横切り、東に流れて江蘇省を二分して、東海にそいでゐる。

流域の景観を述べるでもなく、その歴史を語るでもなく、たゞ揚子江の源流から下流までを記すだけに、これだけの長さの文章を必要とするのである。

揚子江の悠洋たる流れこそが、この支那大陸の永遠の支配者であるのであらう。この想

像を絶した大河は、河口では川幅が四十哩もあり、漢口附近でも三分の二哩はあるのである。しかも、夏季と冬季とでは、その水位が三十呎から四十呎の差を見せ、流速も四ノツトは充分にあるといふのである。

混濁した泥の流れ、二哩、三哩の間隔を置いて、曠野の中に、ぼつんと忘れられたやうな泥の家々の姿——この荒涼たる風景は、春と秋との相違こそあれ、私には杜牧の詩が嘘のやうに感じられるのである。

千里鶯啼綠映江 水村山郭酒旗風
南朝四百八十寺 多少樓臺烟雨中

それとも、揚子江沿岸の春の風景は、秋の蕭々たる風物とは、比較にならぬほどの醜惡たる景観を見せるのであらうか。鄭谷の詩にも、長江の春を詠じた詩がある。

揚子江頭楊柳春

揚花愁殺渡江人

數聲風笛離亭晚

君向浦湘我向秦

「唐詩撰」の中を詩を、薄暗い船室の電燈の下で、あちらこちらと拾ひ読みしてゐる私の耳に、歩哨に立つてゐる兵士のコツコツと甲板を歩む跡音が、船檣に吹き荒さぶ江上の風の音に混つて、終夜聞えてゐた。

「——ここは戦場ですよ」

H中尉の莞爾とした口調が、歩哨兵の跡音によつて、私の心に甦へるのである。

それから、何時間経つたであらうか、私の船室の扉の外で、急に物騒しい音がする。腕時計を見ると、午前二時だつた。

扉を開けて見ると、I少尉が熱に上づた瞳をして、ソファの上に横臥してゐる兵隊の側に膝をついて、同船のT軍醫の診察の様子を、凝つと見てゐる。

「……軽い盲腸らしい。安静にしてゐれば大丈夫だ」

「さうですか」

T軍醫の言葉に、I少尉はほツと安堵の色を、若々しい頬に浮べた。

「おい、確りしろ、大丈夫だ。ところで、寝臺の空いてゐる部屋はないかな、二ツ」

「はツ、自分が訊いて参ります」

病氣になつた兵隊の戦友の一人が、事務長の部屋へ駆け出して行つたが、二つ寝臺のある部屋は、一つも空いてゐないといふ返事をもつて歸つて來た。

「I少尉、僕の部屋は僕一人で、寝臺が一つ空いてゐるから、僕の部屋を使つて下さい」

「しかし……。では、貴方が自分の部屋へ来て下さい」

I少尉は、病氣の兵隊の側に附添つてゐてやらうといふのであらう。私達は、直ぐに部屋を變へた。

I少尉は、病氣の兵隊と一緒に、私のゐた船室に入り、私はI少尉のゐた船室へ、H中尉と同室することになつた。未だ童顔の、子供っぽいI少尉が、同年輩位の兵隊達を、

恰も自分の弟でもあるかのやうに、親身になつて世話をしてゐる様子が、私に強い感動を興へたのである。

——皇軍は、これだから強いのだ。

戦友の一人も居残つて、病氣の兵隊の看護をすると、I少尉に申出てゐる。

「よしつ、水を汲んで来て、冷してやれ」

「はツ、水を汲んで参ります」

そんな聲を聞きながら、私はいつしかまどろんだらしい。

今朝から降りつゝいてゐる雨は、まだ降つてゐる。

九江の碼頭

輸送船での食事は粗末なものだつた。

「これは大變な給與だ」

若い将校達は、口ではそんな事を言ひながらも、盛んに健啖ぶりを發揮してゐた。

「三度三度でも、粉味噌でない味噌汁が食へるだけでも文句はないさ」

「内地の米は酷いさうですね」

「冗談でせう。これに比較したら上等も上等、極上等ですよ」

「ほんたうですか——」

この米櫃の米は、内地の外米混りの米と比較しても、雪と墨ほどの差があつて、内地の米の方が、遙かに白く上等である。

輸送船に乗つた最初の日に、米櫃の内部を見て、私は全く度膽をぬかれてしまつて、ち

よつと手が出せなかつたのである。

「——それを聞いて安心しましたよ。こんな米を内地の人も食つてゐるのかと思つてゐたんですよ」

「それにしても、この米は酷い色をしてゐますね」

「支那は水が悪いですから堪りません」

水も悪いのであらう。だが、そんな事に些かの不平もなく、内地の事を心配してくれる若い將校達の美しい心が、私の心に強い感銘となつて響くのである。

食事を終つて、甲板に出てみると、昨日までの涯しない曠野は姿を消してしまひ、江岸の風物は、すつかり相貌を變へてゐる。突兀たる山塊が、揚子江の兩岸に迫る邊を、われわれの船は、喘ぎながら溯江してゐるのである。しかし、川幅は二分の一哩位は、優にあらると思はれる。

蜿蜒たる揚子江が、大きく急湍をなして曲折する邊に、吹き寄せられたやうな小さな部落が見えるかと思ふと、人煙も稀な江上の奇岩の上に、白壁の寺院の如き建物が、蕭々とすると思はれる。

風に吹かれてゐるのが見えたりする。

苔蒸した古塔が、秋空を背にして、濁水の揚子江に深い影を落してゐる姿が、支那の古い歴史を、われわれに囁きかける。

「あれは教會ぢやないんですか」

私は側のK中尉に、佗びしい村落の中に、尖つた屋根の洋風建築を發見して訊ねた。それは低い泥色のごたごたした村の家々とは、餘りにも懸け離れた異様な建物なのである。「教會堂でせう。いや、教會堂ですよ。この教會堂といふ奴が、この江岸ばかりでなく、どんな奥地へ行つても、屋上に十字架を光らして建つてゐるんです。全くこんな所に思ふやうな場所にまで在りますよ」

船の溯江するに従つて、その建物がはつきりと教會堂であることを、鮮明にして來た。

——東洋の到る處、數百を以て數へる村や町に、アメリカの商人は一人もゐないので、宣教師が住んでゐるのである。

——アメリカの開拓的宣教師が指導的な市民となり、凡ての地方的な事柄に對して、彼

の忠告が求められ、彼の希望が容れられるといふ町や村は、支那に於いて數百を以つて數へられる。

——彼等は學校を維持し、病院を經營し、施薬所を施け、慈善團體を組織してゐた。

私は滯支三十年といふアメリカ人の書いた本の中の、これらの文章を記憶してゐる。その一つの教會堂を、私は江岸の寒村の中に發見したに過ぎないのである。

「この教會堂といふのが、戰闘の度び毎に、如何にわれわれを悩したかは、ちよつと想像がつかないでせう。教會といふのは假面であつて、實は蔣介石軍の諜報機關だつたのですね。スペイなんかを追ひつめて、今一步といふと、奴等は教會の中に逃げ込むんです。それからは、如何に犯人の引渡しを交渉しても埒があかんのですよ。教會といふのが、凡て英國なり、アメリカなり、その他の歐米諸國の權益に擁護されてゐて、われわれとしても手がつけられないんです。教會の内部に隠れてゐて、敵に通謀するスペイが、宣教師であると、はつきり分つてゐても、どうにも出來ないですから、腹が立ちます」

北支でも、私はこれと同様の話を聞いた。

教會といふ美名の下で、開拓的宣教師どもは、日本軍の行動を、蔣介石軍に通謀するスペイの役割を努めてゐたのである。

「蘆山がそろそろ見えて來ましたが、九江にも大きな教會堂がありますよ。何にしろ英租界があつた所ですかね」

輸送船は、既に湖口の急湍を溯つて、蘆山を背にした九江の間近かに來てゐた。

「あれが蘆山ですが、今日は雲があつて頂上が見えません。あの山麓では、自分達も苦戦をやりました」

H中尉の蘆山を眺めてゐる横顔に、西陽が赫々と映えてゐる。

蘆山は山頂を雲につゝんで、巍峨たる山容の全貌を見せてはゐないが、峻険な岩山であると聞いてゐる。

九江の街に近くなる頃、江岸の左方には、白い石油タンクが並んでゐて、赤錆びた船腹を浮き上らせた汽船が一隻、舷側に米國旗を大きく描いて浮かんでゐるのが見えた。

船は九江の江岸に沿つて、泥土の浪を蹴つて溯江してゐる。江岸には四層、五層の外國

風の建物が、並木の間から姿を見せてゐる。

これが支那の街なのであらうか。

私の眼に寫つる江岸の風景の中に、古塔の姿がなかつたなら、私は、この街を九江の街だとは思はなかつたであらう。もちろん、江岸の街並の裏には、檐の低い支那街があるのであらうが、江上から見た風景は、全く西歐の街としか見えないのである。

「外國の街のやうな感じでせう」

「人影が見えなかつたら、廢墟のやうな氣がするでせうね」

蔣介石軍の無益な抗戦は、この繪の様な江岸の風景の中に、戰火に焚れた家々の、無惨にも破壊された壁面をのぞかせてゐる。

江岸に立つて、大きな日章旗を、船に向つて左右に打ちふつてゐる一人の兵隊の姿が、鮮やかに何時までも、何時までも、點のやうになるまで見えてゐた。

蘆山は大きく峻険な山容を、九江の沿岸を離れるに従つて、擴大して來るのである。雲はいつしか、僅かに山嶺の秀峰にのみかゝつて、巍峨たる山肌を、夕陽の中に紫紺色に染

めてゐた。

「白居易の琵琶亭が見える筈なんですがね」

K中尉は、双眼鏡でしきりに覗いてゐる。

「あれです。この見當ですよ」

私に双眼鏡を貸しながら、下流の方を指さすのである。指さされた方向に双眼鏡を向けると、荒廢した小高い丘の上に、それらしい小さな堂宇が、ぼつんと見えた。

「貴様、博學だなあ」

「ははは……。そのくらゐの事は知つてゐるさ。白樂天も、この九江にゐたことがあるんだぞ」

江上の風に吹き消されがちな聲を、懸命に張り上げてH中尉とK中尉とは、怒鳴るやうに話し合つてゐる。

私達は、食堂の一隅に陣を占めて、K中尉の持つてゐた「唐詩撰」の中から、この附近に關する詩を拾ひ出すことにした。

日照香爐生紫煙 遙看瀑布挂前川

飛流直下三千尺 疑是銀河落九天

先づ李白の香爐峰を詠じた詩が、私達に發見された。』

殘燈無焰影幢幢

此夕聞君謫九江

垂死病中驚坐起

暗風吹雨入寒窗

「なるほど、貴様のいふ通り白樂天は、九江に左遷せられて來たんだな」

H中尉は、その詩を二度も三度も、詠じてみるのである。

「どうだ。陶淵明のこの詩も、廬山附近を詠んだものだらう」

春水滿四澤

夏雲多奇峰

秋月揚明輝

冬嶺秀孤松

だよ」

一句一句吟誦するやうに読みながら、H中尉が斷定を下した。

「ははは……。多分さうだらう。だが、こんなことでも識つてみると、支那も面白くなつて来る」

「風流も是れ武人の嗜みだよ」

今朝から顔を見せなかつたI中尉が、充血した眼をして、何時の間にか顔を見せてゐた。

「どうです、病人は」

「大丈夫です。T軍醫、もう一度診てやつてくれませんか」

「よし、診よう。しかし、今朝方は餘程手術しようかと思つたが、もう大丈夫だらう」

I少尉は、T軍醫と一緒に船室の方へ引返して行つた。

「隊長となると大變ですね」

「大勢の兵隊ですから、色んなことがあります」

H中尉は、さう云ふと、席を立つて窓外を眺めてゐたが、

「この附近が武穴鎮、馬頭鎮ですよ」

と、私に呼びかけた。

蒼茫として暮れ行く江上の前面に、大きな山塊が立ち塞がつてゐるのが見える。

「あれが半壁山です」

半壁山の猛攻死闘——あれは、この山塊だつたのか。それにしても、既に當時から四年の歳月が過ぎ去つてゐる。

昭和十三年九月十七日、九江の陥落と前後して、武穴鎮、馬頭鎮の名が、私達の眼前に大きく浮び上つて來たのだが、その日まで、日本人の幾人が、この名を知つてゐたであら

うか。武漢防衛の第一線陣地として、鐵壁の要塞を築造し、この附近一帯の江上には、無數の機雷が沈められてゐたのである。

陸軍の精銳永井部隊に呼應して、海軍陸戦隊の土師部隊が馬頭鎮要塞の堅疊を突破するや、同じ陸戦隊の續木部隊が白襷を肩に、決死の猛攻を武穴鎮に加へて、僅か三日で攻略してしまつたのだ。

その日から猛攻二週日、折からの秋雨は豪雨となつて、將兵の戎衣を濡し、泥濘は膝を没したが、凡ゆる惡條件を突破して、敵が第二線陣地として死守する半壁山から、田家鎮攻略の惡戰苦闘がつづけられたのである。

「この附近を通る度に、今でも機雷が浮いてるやうな錯覚を起しますよ。海軍の決死の掃海には、全く頭が下りました。機雷原とはうまい表現だと思ひましたね」

九江で仰いだ廬山を境にして、それまで荒漠としてゐた曠野に、突如として巨大な山々が、揚子江の江岸へ姿を現はし始める。大別山系、廬山々系が、揚子江を挟んで屹々として迫つてゐるのである。

船は半壁山の下を、大きく曲つて溯江してゐる。甲板の歩哨は、身動きもせずに前面を凝視してゐる。夜が来るとともに、今夜も風が吹き出したらしい。

食事を終つて、雑談をしてゐる時に、K中尉が思ひ出したやうに、

「今日は夜になつてしまつて見えませんでしたが、半壁山の岩壁には、顏真卿が書いたといふ刻字が見えるんですよ」

と云ひながら、側の紙片に刻字の文句を書いてくれた。

鐵鎖沈江 東南半壁 楚江鎖鑰

「三國時代に、吳の總師周瑜が、兩岸の山上から鐵の鎖を連ねて舟路を遮断し、魏の武帝曹操を破つた古戰場なのですね、半壁山は——」

「貴様には敵はん」

「いや、まだあるよ。長髮賊の亂の時には、彭玉麟が周瑜の眞似をして、大いに賊軍を破

つたんだ。今事變では、鐵鎖の代りに機雷を敷設したんだが、これで見ても、古來から天然の要塞だつたことが分るよ」

H中尉の話が途切れたのを機會に、K中尉が腰を上げた。

「巡視して來るかな」

「今日は君だつたか」

「はツ、今夜の廿四時まで、自分であります」

軍装に身を固めたK中尉は、今までの態度を一變して、M中尉の前に立つのである。

「御苦勞」

K中尉は食堂を出ると、衛兵を一人つれて、船内の巡視へ出て行つた。

船内ではM中尉が輸送指揮官で、他の若い將校達が、それぞれ週番士官を交代で勤めてゐるのである。

先刻まで暢氣に冗談を言つてゐたのが、勤務となる禮儀正しく、巡視の報告をするのである。報告を受けるM中尉も、上衣の釦をきちんとかけて、姿勢を正すのであつた。

皇軍の軍紀の厳しさを、目前に見て、私は自然と襟を正させられたのであつた。若い將校達の兵隊達を見る態度といひ、命令に對する態度にしても、非人情の人情といふ言葉があるならば、正にそれなのである。

嚴然たる態度の底を流るゝ温かさ、温情の中の厳しさ——私は美しいものを、沁々と知つたのであつた。

コツ、コツ、コツ……甲板の上に歩哨に立つてゐる兵士の靴音が、今夜も私の枕元に響いて來るのである。

半壁山を過ぐ

川風が狂つたやうな音をたてて、船檣に咆哮をつづけてゐる。夜に入るとともに、凄まじい疾風となつたらしい。舷側を打つ波浪の音が、昨日までとは様子が違ふのである。

川風といへば、ほんの二ヶ月前に、哈爾濱から佳木斯へ向ふ滿洲國軍の砲艦に乗つて、松花江を下つた時にも、今夜のやうな川風が吹き募つてゐた。冬の早い北満では、十月といふのに、明けて見ると、雪さへ混えてゐた。今夜の風も、船室にまで寒氣を傳へて來るが、緯度の違ふ中支では、まだ雪には早やすぎる。

北満を貫流する松花江も、大陸的な風貌をした大河であつたが、揚子江のやうな底知れぬ表情ほしてゐなかつた。黄濁した奔流が、揚子江に無氣味な形相を與へてゐるのであらう。

僅か二ヶ月の間に、満洲から北支へ、北支から中支へ來て、今は揚子江の船中に在るの

かと思ふと、何か遙々と來たものだといふ一種の感慨に捕はれるのである。

川風と寒氣に寝られぬまゝに、私は起き直つて、大陸の地圖を擴げ、私の旅行して來た行程に従つて、鉛筆で線を引いて見た。だが、私の鉛筆の先きに辿られる地域は、廣大な大陸のほんの一部分に過ぎないことを發見させられて、私は呆然としてしまつた。

(廣いなあ、亞細亞大陸は――)

しかも、私の歩いて來た土地は、明治、大正、昭和を通じて、我が日本が、歐米の東亞侵略の奸策を擊破せんがために、敢然として銃砲火を交へ、われわれの先輩や同輩が、鐵血をもつて染め來たつた土地なのである。

この嚴肅な事實を、われわれは忘れてはならない。それを、僅かに一衣帶水の海を隔てた日本が、遙々と海を越へてまで、大陸進出を企圖しようといふ歐米諸國の野望を黙つて見てゐることの、到底出來ないのは、當然すぎるほど當然といへよう。

それを、昨日までの私などは、何か遠い所のやうに考へてゐたのであるが、事實、眼前に、歐米の野望を見せつけられて、日本の生命線の重要さを、今更ながら心から痛感せし

められたのである。——夜來の烈風は、夜明けとともに衰へて來たらしい。どんよりした雲は、まだ深く垂れ罩めてゐる。

輸送船は既に拔錨してゐて、製鋼所の煙の見える石灰窟を過ぎ、黃石港のあたりを進航してゐた。

「今朝は珍らしく朝寝をしましたね」

H中尉が、もう洗面を終つたらしい顔で、寢臺の上の私に話かける。

「川風の凄まじいのに、夢を破られましてね」

「さうでしたか。自分はちつとも知りませんでしたよ」

昨夜の健康さうなH中尉の寢顔を、美しく眺めたのを思ひ出した。
食堂では、もう食事が始まつてゐた。

「やあ、お先きに、今日の夕方には、漢口へ着けさうですよ」

「そりや有難いですなあ」

船の溯江するに従つて、綺麗な秋空が、どんよりと曇つた空の底に、青く澄んだ色を見

せ始めた。

「病人はどうです」

「はツ、もう大丈夫です」

I少尉も元氣な顔を見せて、今日は直ぐに部屋へは歸らずに、私達の話の仲間に加はつた。

明けても暮れても、滔々たる濁流と荒涼たる大陸の風物を、三日も眺めつゝけて來た私達には、もう漢口へ近づくまで、江上の風物を見物しようといふ欲望はなくなつて來た。

「半壁山の顏真卿の刻字で思ひ出したのですが、蘇東坡の赤壁の賦といふのも、岩にでも刻字してあるのですか」

私はH中尉に訊ねた。

「さア、そいつは自分も見てゐないんで知りませんが、赤壁といふのは、漢口から九十哩も上流にあるのださうですよ。だが、そこが果して赤壁であるかどうかは、大いに疑問な

時

のです。何しろ赤壁と稱する場所が、支那大陸には五ヶ所もあるんですからなあ」

「ふうん」

何かといふと、貴様は博覽強記だと、H中尉を冷かすK中尉も、今日は黙つて拜聴してゐる。

「勿論、自分の持つてゐる本に書いてあるんで、眞偽の程は分らんですが、漢陽にも、漢川にも、赤壁と稱する場所があるのです。それから、黃州、嘉魚、江夏といふのですが、かうなると支那人にも見當がつかんらしいですね」

「なんだ、雲を擱むやうな話だなア」

H中尉の言葉の調子が、如何にも雲を擱むやうな茫昧たる響をもつてゐたので、一同は思はず哄笑したのだった。

「いよいよ漢口ですが、僕の漢口に對する豫備知識といふと、昭和十三年十月二十七日、武漢三鎮攻略さるといふ程度なんですが、何か漢口の歴史といつた本を持つてをられまぜんか」

私は無理な要求だとは思つたが、M中尉に訊ねてみた。

「さア、そんな本は持つてゐませんが……。待つて下さいよ」

M中尉は、自分の船室へ行つて、暫くすると、小さな「武漢三鎮」といふ書簡圖繪を持つて來てくれた。

「こんな物が在りましたよ。これに簡単だが、武漢三鎮の沿革が書いてあります」

「さあ、船の寝臺とも、もうお別れだ。漢口へ着くまで、一つ悠々り寝るとするか」

K中尉は、もう上衣の釦を外しながら、笑ひながら起上つた。

「この寝臺でも、前線で薬の中に寝ることを想へば上等ですからね」

K中尉は、私にさういふと船室の方へ歸つて行つた。

「なるほど、そんなもんだなあ」

一同は笑ひながら、寝るしようといふので、各自の船室へ歸つて行つた。私も船室へ

歸つて、M中尉から借りた「武漢三鎮」繪圖の文章を讀むことにした。

ここに、その拔華を書いて置かう。

——上海から揚子江を溯つて六百哩。中支の大動脈揚子江と漢水の合するところに、互に水を挟んで漢口、漢陽、武昌の三都が鼎立してゐる。武漢三鎮は自然の地理によつて、中支大陸の心臓たるの大使命に生れ、既に四千五百年の昔に、太古の支那文化は、この地域に發祥したのであつた。爾來支那の歴史は、興亡極まりなき變轉の歴史であつたが、この地域こそは、中支の心臓部たる使命を持続し、中支支配権の衙門となつて來たのである。

漢口は太古禹の夏口の城で、吳の孫權が築いたと傳へられる。唐の時代から商業殷賑を極め、清の時代に至り北京條約の結果、開港場となつて、日、獨、英、佛、露の各國租界が設定されてからは、海外貿易の中樞港となつたのである。辛亥革命によつて漢口市の大半は、兵火に焼かれたのであつたが、再び今日以上の隆昌を見たのであつた。だが、國民革命軍の入城によつて、所謂武漢政府が置かれるや、誤れる容共政策によつて、漢口は極端な衰微に陥り、獨、英、露の租界は沒收となり、支那民衆の失業の激増といふ失政の結果

武漢政府は倒潰し、代つて國民黨南京政府が、漢口の再建に努力したのだが、蔣介石はこの地を抗日政策の本據とし、再び容共政策を施行して、遂ひに支那事變を招來したのである。

この繪圖を眺めてゐると、コツ、コツと扉を叩く音と共に、M中尉が入つて來た。

「これから、兵隊のゐる船室へ行きますが……」

先刻、私が兵隊のゐる船室を見に行つてもよいかと、輸送指揮官であるM中尉に許可を求めたのを、M中尉は自分が巡視出かける時に思ひ出してくれたのであらう。

「内地から來た時の輸送船と比較したら、この船なぞは暢んびりしたものです」

階段を下りながらM中尉は私に説明するのである。

「氣を付け！」

銳い號令の聲が響く。

「そのまゝでよろしい！」

M中尉は、廣い部屋の中央に立つて、漢口へ上陸するに際しての訓辭を與へてゐる。廣い船室だが、二段、三段にも、板張りの居住區を急造して、兵隊達がぎつしり詰つてゐるのである。背囊、鐵兜、銃などが、枕元に整然と置かれて、兵隊は外套を夜具の代りにしてゐる。

この兵隊達は、漢口から宜昌、長沙の方面へ行くらしい。

「……詳しい命令は、命令受領者に傳達する。命令受領者は、直ちに、本部へ集合する！終りツ」

訓辭を終つた中尉は、私を背がして、再び階段を上るのである。

「あの狭い所で、食事などは何うするのですか？」

「食事は大きな容器で運んで、各自の飯盒でするのですが、我々と同じ物を食つてゐるんですよ」

軍隊に關する知識のない私に、M中尉は細かい説明をしてくれるのである。

「漢口の沿革が分りましたか。もつとも、あれでは分らんでせうが」

「いや、有難うございました。おぼろげにでも知つてゐれば助りますよ」

「船が大きく汽笛を鳴した。

「いよいよ、漢口ですよ」

甲板の上には、既に身支度を整えたK中尉、H中尉などが、前方を眺めて立つてゐた。

「漢口が見えるんですか」

「いや、未だですよ。しかし、戎克や^{ジョンク}紓^{サンパン}の往來が繁くなりましたからね」

K中尉の微笑を浮べた顔が、私の方を向いてゐる。早く自分の兵隊達のある所へ歸りたいと、口癖のやうに言つてゐたK中尉には、漢口へ着くことが、前線へ一日も早く歸れるので嬉しいのであらう。

「よかつたら、自分達のところへ来ませんか」

「報道班へ行つて、都合を訊いてから、是非お邪魔に行きますよ」

「別に御馳走はありませんが、鐵砲彈の御馳走ならウントありますよ」

K中尉は、さう言つて微笑するのである。

M中尉の命令傳達が終つたのか、下甲板の方から、兵隊達の裝具をガチャつかせる音が驟然と響いて來た。

黄濁した揚子江の濁水を、搔き分けるスクリューの音も、心なしか靜かになつた。

「漢口ですよ。漢口が見えて來ました」

九江の碼頭に、驚きの眼を睜つた私の眼前に、九江のやうな荒廢した感じのしない、大きな西歐風の江岸の壯觀が、刻々として近づきつゝある。

人口八十萬を突破するといふ漢口は、流石に生き生きと動いてゐる感じを、船上にまで傳へて來るのである。

碼頭の時計臺

兵隊の新聞

江岸には、江上を渡つて来る冷たい風が吹いてゐる。南昌の街は、中流に碇泊してゐる汽船の帆檣の影になつてゐて、見えない。揚子江が大きくなつてゐる上流の漢陽の空は、數本の巨大な煙突の煙りで、どす黽く霞んでゐた。

江漢碼頭の時計臺の鐘の音が、江岸のプラタナスの街路樹の間をぬけて、二點、三點……静かな餘韻を響かせて行つた。

江岸に横附けにされた汽船の船腹には、英國旗か、米國旗が描かれてゐて、赤鑄びた醜い船腹を見せてゐるのが、うらぶれた感じであつた。

昨日、私達の乗つた輸送船が、漢口へ近づいて來た時に、先づ最初に私の注意をひいたのは、この米英の旗印を船腹に表示した船だつた。

「あの旗を見ると、私達は猛烈な腹立しさを感じるですね。中支の戰線は、殆んど歩い

て來ましたが、到るところで、我々はあの旗のために、戰鬪の防害をされたんですからね」

横濱にゐたことがあるといふH中尉は、この船を見ながら語るのである。

「支那軍と戰争をしてゐながら、我々の眼には、この國旗がいつも眼前にチラついて、憤懣のやり場所に困りました。蔣介石が重慶へ逃げようと何うしようと、米英の援助を得て、容共政策をとつてゐる限りは、重慶へでも何處へでも、とことんまで追撃しなきや、我々の氣持としては、どうにも承知できませんよ。さうだらう」

H中尉は、最後の言葉を、同僚のS中尉に向けた。S中尉は、大きく肯づいて見せる。「とにかく、この英國だの、アメリカなんて野郎を、支那全土から追つ拂らつてしまはにや、己れには承知できん」

「ですが、この頃ちや、揚子江を航行する米英の船の姿が見られなくなつただけでも、私共まで氣持がすうとしますよ」

船の事務長が横から口を入れる。

漢口へ着いて、舊英租界あたりを歩いて見ると、いまだに街角の煉瓦塀などに、英國旗のマークが、ベンキの色こそ褪せてはゐるが、麗々しく書かれてゐるのが見られる。

——手を觸るゝ可からず——

米英の旗は、そんな言葉を、無言で表現して、冷然と我々を見下ろしてゐる、としか考へられないものである。

日本租界が、蔣介石軍によつて無惨にも爆破され、慘憺たる破壊の名残りを、今だに見せてゐるのに、英租界や佛蘭西租界は、昔のまゝの姿で、破壊の跡も見られない。日本軍の砲彈は、作戦上の不便を忍んで、これらの租界を避けて飛んだのであらう。

廢墟の如くに破壊された日本租界も、今では次第に復興の緒についてゐる。静かな街を歩いてゐて、行きづりに日本の子供達に出逢ふと、ふと漢口にゐることを忘れてしまふやうな感じがする。

外國租界——佛蘭西租界だけ残して、他の英、露、獨の租界は撤廃されたとは云ふものの、私などには、なんか懸け離れた世界のやうに感じられるのである。支那街の雑踏も、

たゞ物珍しいだけである。

そんな租界や支那街を歩いて來て、閑靜な日本租界の籬に沿つた道を歩いてゐる時に、何處からか幼い小供達の、日本語で話をしてゐる聲が聞えて來ると、故もなく心にはのぼのとした和やかさが感じられるのである。

江岸の風景は穏やかで、私は長江の流れを見ながら、今通つて來た日本租界のことを、思ふともなく頭に浮べてゐた。

「支那は何處へ行つても第一線ですよ」

昨日、漢口へ上陸したばかりの夜、急に街の交通が禁止されてしまつたので、同宿の○〇部隊の軍囂の方に訊くと、事もなげに笑はれたのである。それを思ふと、今、かうしてほんやり長江の流れを見てゐられるのが、不思議なことのやうに、私には思はれるのである。

昨夜の交通禁止は、テロ事件が起きたらしいといふのだが、今朝はもう何事もなかつたかのやうに、街は雜踏してゐる。

朝起きると直ぐに、私は軍報道班へ出かけて行つた。

報道班のA少佐に、

「前線へ行きたいのですが、何んとかなりませんか」

と、頼んだのだが、

「そりや前線へ行かれるのもいいが、何しろ作戦が一段落したところですから……」
といふ返事なのである。

北支で少し愚圖ついてゐたので、南京へ來た時には、長沙作戦に従軍してゐた棟田博君の一一行は、棟田君だけ残して、もう内地へ還つてしまつてゐたところであるから、私一人だけで前線へ行かうといふのも、無理な依頼だつたかも知れない。

「今のところ一寸機會がありませんが、暫く漢口で遊んでゐたら何うです」

私はA少佐の言葉に従つて、機會が來るまで、漢口でぶらぶらしてゐようと決心したのだつた。何か割り切れないやうな氣持だつたが、さう決心を定めると、急に私は漢口で見て置くべきものをと考へ出したのである。

「それだつたら、武漢報へ行つてみませう」

A少佐は、気軽に私を武漢報社へ案内のためにと、席を立たれるのだつた。

「恐縮ですが、お願ひします」

地理不案内なので、私は遠慮をせずに、A少佐の後に従つた。

江漢路の一帯は、蔣介石軍の抵抗の激しかつたところで、所々に瓦礫が飛散し、焼け落ちた、家屋の跡が残つてゐた。

A少佐に紹介された社長の大串國夫氏は、私の亡父の知人だつたので、奇遇に驚いたのである。

「まあ、ゆっくり漢口を見てゆかれるんですね」

とも勧められるし、編輯長の莊泗川君も、流暢な日本語で、

「是非、武漢の文化運動を視察してゆかれたらよろしいでせう。この武漢三鎮は、支那の文化の發祥地のやうなところだけに、面白いですよ。中日文化協会の支部もありますし、岸さんに御電話しときます」

總軍報道部の石川君から、岸富造君への紹介状を私は持つてゐた。

今朝からの周囲の情勢から判断して、私はいよいよ漢口に腰を落着けてみやうかなと考へ出したのである。

私は大串社長の御好意で、武漢報の自動車を自由に乘廻ることになつたので、今も漢口の市街を、ぐるりと廻つて、最後に江岸の風景を見物に來たのだつた。

——しかし、もう一度、前線へ行けるやうに、A少佐にお願ひしてみようか。

私の心の底には、前線へといふ希望が、消えやらぬ餘燼のやうに燐つてゐて、たしかに落着を失つてゐる。報道班へ歸つて來ると、

「どうです、漢口は？」

A少佐は、笑ひながら、私を迎へるのである。

「いや……」

「これは、この報道班で出してゐる新聞ですがね。もちろん、兵隊ばかりで作つてゐるんですよ」

「いや……」

A少佐は一枚の新聞を擴げて、私に渡される。

「總前衛」——新聞の標題である。四頁の新聞なのだが、これが兵隊ばかりの手によつて製作された新聞とは思はれないほど、細かく氣の配られた新聞だつた。

内地の報道は勿論のこと、海外のニュースまで集録してあり、文藝欄まであつて、前線の將兵達の短文や詩や短歌までが、記載されてゐるのである。

「これは大變な仕事ですね」

「この新聞が發刊されてから、もう一千號を突破してゐるのですよ」

内地からの新聞などは、遠い漢口までは幾日かかるか分らない。漢口から未だ奥の前線にゐる兵隊達には、この新聞がどれだけ大きな楽しみを與へてゐるか、われわれには想像もつかないのである。

古い新聞を擴げてゐると、宜昌作戦に從軍された大佛次郎、竹田敏彦、火野葦平、棟田博氏等の寄稿もあるし、今度の長沙作戦に從軍した久生十蘭、攝津茂和氏達の原稿も載せられてゐた。

「編輯が大變でせうね」

「現地のことですから満足なことは出来ません。たゞ、この新聞に、もつと内地からの寄稿があると、兵隊達も喜ぶんですがね」

編輯の兵隊達は、さう語るのだつた。

「なにしろ、内地の通信といふと、内地新聞の切り抜きばかりですから、もつと内容のある寄稿が欲しいのですよ」

——前線への慰問文に手紙が入つてゐなかつたら、どんなに兵士達を失望させるか分らないのと同様に、この新聞に、内地からの内容のある通信が載つてゐたら、どんなに兵隊達を慰めるか分らない。

と、編輯をしてゐる若い上等兵の人が、私に語るのである。

「總前衛」——自分達の新聞として、前線の將兵は、壕の中で、露營の灯の下で、どんな氣持で、この新聞を読んでゐることであらう。

宿舎へ歸ると、同宿の軍囑の方は、荷造りの最中だつた。

「やあ、明日の朝、前線へ歸りますのでね。ちよつと、失禮します」

「もう、お歸りですか」

「何しろ仕事が待つてゐますから……」

私の心には、又しても前線へ出でみたいといふ欲望が、頭を擡げて来る。

「それは……。私も前線へ出てみたいと思つてるんですが、その時は何卒よろしく」

「是非どうぞ。しかし、今のところ前線は作戦をやつてゐませんから、割に暇なんですよ」

私は、やはり前線へ出る機会が、この兩三日中に訪れて來ると考へることは、どうやら諦めなければならぬらしい。

翌朝、「總前衛」の大きな包を、前線への土産にして、軍囑の方は出發して行かれた。
速くに、碼頭の時計臺の鐘が、八時を報じてゐる。

江漢中學を見る

秋晴れの漢口の江岸を、佛蘭西租界から日本租界を通りぬけると、漢口の街は、鐵道線路を境にして、急に郊外らしい姿を見せてくる。

蔬菜畑には、水々しい青菜が勢ひよく育つてゐて、狐色に枯れた雜草が、秋色の深さを想はせてゐた。泥壁の農家が點々と散在する中央を、大きな鋪裝道路が貫いてゐる。人影の斑らな耕地の風景は、日本の田舎の様子と全く同様である。たゞ、支那風の農家が、ここが日本でないことを物語つてゐるのである。

自動車が、鋪裝道路からそれで、白いコンクリートの埠沿ひに、江岸の方へ走つて行くと、間もなく江漢中學の門内へ滑り込んで行つた。

赤い煉瓦の校舎が、湖北の秋の陽を受けて、美しく映えて見える。

「漢口には、大正十一年から、日本語を教へてゐる中學校がありますよ」

「大正十一年といふと、二十年も前からですね」

「漢口では有力な中學で、省政府主席の何佩容氏も關係者ですし、武昌市長も江漢中學の出身者だといふ話です」

莊泗川氏の話に興味をもつた私は、その江漢中學訪問を思ひ立つたのである。

明るい清潔な玄關に立つて案内を乞ふと、黒の詰襟に金鉢の少年が、私の前に立つた。
「校長さんにお目にかかりたいのですが」

「しばらく、お待ち下さい」

明瞭な日本語の應答なのである。私の名刺を持つて立ち去つたが、間もなく、
「こちらへ」

と、少年は先に立つて、私を董事室と書いた扉へと案内するのだ。少年と入れ換りに、

若い先生が扉を排しながら、私の前に立たれた。

「失禮しました。丁度授業が始まりかけてゐたものですから、小松といひます」

小松などと書くと、李小松とか、崔小松とか感じられるが、この先生は日本人で、小松員雄と云はれるのである。

「まだ突然ですが、大正十一年から、日本語を教へてゐる中學があると聞いたものですか
ら、是非拜観させて頂きたいと思ひまして……」

「それはどうも……。相憎と齋藤總務長が東京へ行かれてるまして……」

「東京へ」

東京といへば、遠く遙かな距離感を感じるべきはずなのに、その時の私は、小松先生の素朴な口調のせいか、東京が非常に近々と感じられたのだつた。
「この學校が再開校されましたのが、この九月なので、未だ設備も不充分ですし、これと云つて御覽を願ふところもありません」

だが、小松先生は、この學校で教へてゐられる日本語の教科書を、わざわざ別室から持つて来て説明されるのである。

「相當に程度の高い教科書ですが、生徒達は讀めるのですか」

「生徒の日本語に対する熱意とでも云ひますか、非常に進歩が早いやうです」

この學校では、一週間に八時間の日本語の時間が課せられてゐる。高等科になると、數學や日本歴史などが、日本語で教へられてゐる。

日本語の教科書は、もちろん、特別に編纂されたものが使用されてゐる。

「先程の案内の少年は、日本人でせうか」

その明瞭な日本語が、私にそんな質問をさせたのである。

「あれは、やはり支那の子供です。御案内しませう」

小松先生は、私の質問に笑ひながら、席を起された。

廊下は綺麗に清掃されてゐて、靴で歩くのが惜しいやうである。

教室の方は、授業時間中らしく、物音もせず静かである。

「ここが、私の受持の教室です」

この教室の外庭に面した廊下は、コンクリートになつてゐて、廣い校庭が見渡せた。

「氣を付けツ！」

明晰な日本語の號令である。

「禮イ！」

この聲を聞いてみると、日本の學校と少しも變つてゐない。服裝なども、日本の中學生と少しも違つてゐない。二十人ばかりの生徒の中の一人か二人が、藍色の支那服を着てゐるので、支那の中學生だと分るくらいである。

「日本からお客様が見えたから、先生は御案内をして来る。皆さんは、先生の歸つて來るまで、靜かに自習をする」

小松先生が教壇から、生徒達に悠つくりした日本語で云ひ聞かせると、「ハーラー」と、低學年の生徒らしい少年達は、元氣な返事をするのである。

明るい激刺たる聲が、教室中に響き渡る。

「御授業中を申譯ありません」

「いや、構はないんです。生徒達はあゝして置いても、よく勉強しますから」

物理科學教室、博物教室から圖書室などを、私は案内されるまゝに、見學して歩いた。そして、その間に、この學校の歴史を聞く機會をもつたのだつた。

この江漢中學は、東亞同文會の設立經營する中學で、大正九年十月に東亞同文會の柏原文太郎氏が、創立委員として漢口を訪れ、大正十年三月に校舎の建築にかかり、翌年の三月に、現在の湖北省政府主席何佩瑢氏を名譽院長として、最初は漢口同文書院の校名で開かれたのである。

その後、昭和十六年八月に、揚子江の大氾濫で浸水して、校舎の大損害から一年間の休校をしたのだが、その後、生徒數が増加したので、數次の増築が行はれてゐる。

昭和十二年七月、支那事變が勃發するや、八月七日に漢口在留邦人に引揚げ命令が下つたので、江漢中學の日本人教師三名も引揚げて行つたのであるが、昭和十三年六月まで何佩瑢氏が主となつて開校を續行して來てゐる。

昭和十三年十月二十七日、武漢三鎮が日本軍に攻略されてから、昭和十六年八月の開校までの間は、日本軍の軍事施設として利用されてゐたのである。

「開校して、まだ三ヶ月しか経つてゐませんから、設備などもこれからです」

だが、三ヶ月にしては、よく整つてゐると、私には思はれた。この學校の生徒達の大部分は、寄宿生だとのことだつた。

運動場も廣く、蹴球や籠球の設備が整つてゐた。

「中國の學生達は、全般的に球戯が好きらしく、盛んに蹴球や籠球をやつてゐますよ」

運動場には、置き忘れられたらしいボールが轉つてゐた。

「ですが、同じ球戯でも野球の方には餘り興味を持つてゐない様子で、野球をやつてゐるのを見たことがありません」

運動場を圍んでゐる壁は、防壘にでもなつてゐたらしく、煉瓦が堆く積んであつた。
「武漢攻略直後は、この周囲にも殘敵が出没してゐたらしく、あの壁は、その時の名残りなのです」

壁の附近には、ボプラの樹が黄色にそまつた葉を、さわざわと風に靡かせてゐた。この
静かな郊外も、三年前には第一線陣地だつたのであらう。

「寄宿舎の方へ行つて見ませう」

私達は鍾をめぐらして、小使室らしい部屋を通り抜けて、別棟の廊下へ出た。支那人の
小使が、陽だまりで薪を割つてゐた。

「これが寄宿舎です」

片側は前庭に面し、一列に並んだ幾室かの部屋の中央には、机が對ひ合つてゐて、兩側
の壁に沿つて並んだ寝臺は、眞白なシーツに蔽はれてゐる。整然としてて、軍隊のやう
な感じである。

部屋をのぞくと、誰か寝てゐるらしい寝臺があつた。小松先生は、その寝臺に近よると
優しく問ひかけられる。

「病氣かね」

寝臺の上の生徒が、無理に起き上らうとしてゐるらしい。

「いいよ、いいよ。そのまゝ寝てゐるんだ。診察してもらつたかね」

生徒は無言のまゝ、こつくりと肯づいてゐる。

前庭は南向きになつてゐて、陽射しが明るく樹々の梢でゆれてゐる。

「これが風呂場なのです」

兩側の壁に沿つて、日本の學校の便所などで見かける低い板仕切りが、幾つも並んでゐて、下の漆喰塗りの流し場には、洗濯盆が行儀よく立てかけてある。

小松先生ほ風呂場だと云はれるが、浴槽らしきものは、全然見當らない。

「浴槽はないんですか」

私は、さう質問せざるを得なかつた。

「支那の習慣なのでせうね。生徒達はこの鹽の中に湯を汲み入れて、身體を拭くだけなのです。日本のやうに悠々と、お湯につかるなどといふことは、支那の習慣にはないらしいですね」

「なるほど……」

とは言つたものの、私には納得のゆかない不思議な氣持である。

習慣といふものは、容易に變へられるものではないらしい。支那人は顔を洗ふのに、手

の方を動かさずに、顔の方を動かすと聞いてゐたが、本當にさうなのを見て、私はぼんやり見物してゐたことがある。

習慣といへば、支那には不思議な習慣がある。もつとも、中流以下の家庭なのであらうが、往來を見物しながら食事をしてゐる風景を、私は屢々見かけた。往來へ茶碗と箸を持つて出てゐる子供などは、何處ででも見ることができる。便所らしいもののないのも、不思議な習慣の一つであらう。だが、この中學には、立派な便所があつた。

「お仕事中をお邪魔して、大變にありがとうございました」

私は小松先生に、お禮を述べて校門を出たのだつた。

この學校を知つたことが、何か私には沙漠の中に綠地を發見したやうな感慨を感じさせる。

現在の漢口の殷賑は、戰前の人口八十萬を突破して、八十五萬に及び、武昌、漢陽を合併すると、百十數萬といふのでも察しられよう。日本語學校も數多く出來てゐるらしい。だが、この學校のやうに、二十年の昔から、永續的に日本語を教へてゐる學校のあること

は、何か心強いものを、私達に感じさせる。言葉の分らないといふことは、如何なる場合でも、相互の意志の理解に、大なる障害となつて來るのである。

支那大陸の都市は勿論のこと、如何なる奥地にでも、歐米各國の宣教師達が、教會を建築し、支那の民衆に接觸して來た結果、相互の意志を理解し合ふ機會を作つたばかりでなく、どんな利益を得て來たかは計り知れない。

歐米の文化の恩恵を、支那の民衆に與へるといふ美名の下に、如何に多くの英語を喋べる支那人を作つたかは、今日の支那の知識階級と稱される人達で、英語を解しないものが殆んどないと云ふ事實を見ても分かるであらう。

歐米の宣教師達は、教會堂を建設して、支那の民衆を疑惑せんとする本國政府の、宣撫機關的役割を果してゐるのである。このことが、日本と支那との意志の疏通を、如何に阻害してきたかは、全く計りしれないものがあるに違ひない。

大東亜建設の大業に、日支兩國が眞實に提携して進むためには、言葉の理解が最も緊急な問題だらうと、私は考へる。そのためには、大陸の各地に日本系の學校を、積極的に、

計畫的に、開設すべく押し進めなければならぬのはなからうか。もちろん、われわれにしても、支那語を學ぶことに吝であつてはならないことは、言ふまでもない。

江漢中學の歸途、私は自動車にゆられながら、そんな事を考へてゐた。

黃鶴樓にて

川風が冷たく吹き過ぎる。武昌への渡船は、揚子江を横切つて、武昌側の沿岸を喘ぎ喘ぎ溯江してゐる。

減水期を迎へ、江上の水位が低くなつてゐるので、泥色の城壁のみが、高く聳ゆるやうに見えてゐて、武昌の街は壁の底に沈んでしまつてゐる。たゞ、城壁の上に、小さな圓塔のやうなもののが頭が揺れてゐる。

渡船は、軍人と湖北省政府の人達で溢れてゐた。

朝陽がきらきらと江上に映へて、長江の濁流も、今日はあまり氣にならない。

「あの右手の小高い所が、黃鶴樓の跡なのです。あれと對岸の漢陽の晴川閣——」

私は湖北省政府の倉林さんに従つて、漢陽の街の見える方へ歩を移した。

「あの晴川閣と對峙して、江上の美觀を添へてゐるのださうですが、今日は朝霧ではつき

りと見えませんが……」

江上には薄い朝靄が流れてゐて、漢陽の街はおぼろにしか見えない。晴川閣がどれであるかは、模糊としてゐて定かでない。

黃鶴樓といふのは、詩聖李白が楊州へ下る猛浩然を送つて、この樓で詠じたといふ詩によつて有名なのである。

故人西辭黃鶴樓 烟花三月下楊州
孤帆遠影碧空盡 惟見長江天際流

船はゆつくりと、武昌の棧橋に着いたらしく、軌みながらゴツンと、船側を打ちつける衝動が傳はつて來た。

「さあ、降りませう」

私は省政府の人達と一緒に、船から降りると、水際の棧橋から高い石段を、武昌の街の

一角へと上つて行つた。

そこから直ぐ右手に、小高い丘があつて、丘を上つた所に、白い石の寶塔が立つてゐた。船の上から見えた圓塔は、これだつたのである。

丘の上からの眺望は、潤然とひらけてゐて、江を隔てて漢口や漢陽の街が、朝靄の中に見下ろせるのである。

「ここが黃鶴樓の跡なのですが、樓はもうありません。しかし、眺望は素敵でせう」

漢陽の街の背後には、龜山が聳えてゐて、漢水の流を境にして、漢口の街の臺の朝靄の中に沈んでゐるのが、繪のやうな美しさである。

二艘、三艘、四艘……大きな汽船が、揚子江の中流に、赤い船腹を見せて碇泊してゐる。點景の如き戎克や、サンパンの往来が、駕蕩たる長江の風景を描き出してゐるのである。

白塔は朝靄の中で、靜謐な表情を湛えて、江上を見下してゐる。白塔の側に、古色蒼然たる一門の樓が、朱の色も褪せた姿を見せて建つてゐる。臺に生えた蓬草が、樓門の時代を物語づてゐるが、黃鶴樓でないことは、先程の倉林さんの説明で分つてゐた。

黃鶴樓は、李白の詩で、私に一種の親しさを感じさせてゐたのだが、その名稱の由縁に關しては、全く知るところがなかつた。

「さあ、詳しいことは知りませんが、こんな傳説があるのですよ」

私の畏れ氣もない質問に、同行の年輩の方が、親切に「述異記」といふ本に載つてゐるのですが、と断つて語られる。

——いつの頃か、荀環といふ男が、樓で憩んでゐると、西南の雲のあたりから、黃色い鶴に乗つた仙人が降りて來たので、荀環は非常に喜び、歡談に時の移るのも忘れてゐた。やがて、仙人は彼に別れを告げると、再び鶴に乘つて、遙かな雲の中へ、その姿を消して行つたのである。——この傳説から、黃鶴樓と名づけられたといふのである。

この小高い丘からの風景には、なにか詩情豊かなものゝ感じられて、そんな傳説の生れるのも不思議ではないといふ氣がするのである。

「唐の詩人の崔顥の詞に、ここを詠じたのがあります」

私は、その詩を聞いて、手帳に筆記して置いた。

昔人已乘黃鶴去

此地空餘黃鶴樓

黃鶴一去不復返

白雲千載空悠悠

晴川歷歷漢陽樹

芳草萋萋鸚鵡洲

日暮鄉關何處是

煙波江上使人愁

「漢詩の味といふものは、大陸へ来て始めて實感となつて來ますね」

この詩を語りながら、その人（私はどうしたものか、遂ににその方の名を聞かなかつたのである）は、私にさう語られるのだ。

それは確かにさうなのであらう。私なども輸送船の上で、急に漢詩が讀みたくなつたのも、大陸の風物が、そんな氣持を起させるのではないかと思はれる。

白塔の所から、なだらかな甃石路を上つて行くと、小さな亭が建つてゐた。

「この亭なども、禹の時代の建築ださうですよ。今では禹亭と稱してゐますが、黃鶴樓に

しても、記録を見ますと、幾度か兵火に焚かれてゐるのですから、これなども修理に修理を加へてゐるだらうと思はれますがね——」

亭は小さく、古色を帶び、内部は裝飾といふ裝飾もなく、幾つかの額が掲げられてゐるばかりで、その中に、古代象形文字の如き字で「禹亭」と書かれた額が、もつとも豊かな時代色を見せてゐた。

丘の上は、朝早いためか人影もなく、閑寂な佇を見せてゐた。この丘は、黃鶴山といふのである。

武昌の街は、丘の上から見ると、戰火の跡も餘り感じられず、小じんまりとした平和な街の姿である。

「この街で、戰争があつたなどとは思はれませんね」

「あれから、もう四年の歲月が経つてゐますからね。ですが、この山にも、こんな物が構築してあつたのですよ」

枯草の蓬々と茂つた邊りに、防壘の跡が虚しい殘骸をとゞめ、堅牢な防空壕が、空虚な

洞窟のやうな姿をのぞかせてゐる。

「風寒し古戰場ですね。——御紹介するのを忘れてゐましたか、武昌市の市長さんです。日本の陸軍士官學校を卒業されてゐますから、日本語はお上手ですよ」

私達は軽く目禮を交はした。靜かな微笑が頬に流れる。

船を上つた時から、黙つて私達と行を共にしてゐたこの人物に、私は最初から少なからず好奇心を抱いてゐたのだつた。——長身に相應しい瀟洒な薄鼠色の洋服が、若々しい白皙な額に似合ひ、どこか育ちの良さを見せてゐる。

武昌市長——昨日、江漢中學で、この人も江漢中學の出身者であると聞いてゐた。日本の陸軍士官學校を卒業してから、武漢攻略戰直前まで、この人は、蔣介石軍の參謀をしてゐたといふ話だつた。

年齢も、まだ四十歳にはならないらしい若々しさが、體軀に溢れてゐる。

——蔣介石軍の參謀まで勤めた人が、どうして武昌の市長になつてゐるのであらう——私は直ぐに、そんな風に物を考へる自分に苦笑した。

われわれには、敢然として誤れる過去を振り切り、新中國建設のために、自己の苦惱を意志の力で克服して來た人々に對して、徒らにその人の過去を問題にする必要はない。大陸を歩いてみると、我々は幾度かさうした人々に出逢ふのである。

漢口の中日文化協會の岸富造氏や、莊泗川氏から紹介された漢口の江漢報の社長、謝希平氏も、その一人といへるであらう。

謝希平氏は、蔣政權時代に武漢地區の宣傳部長だつたのである。作家でもある彼は、若い支那の青年達の苦惱と激動を「暴風の前」といふ長篇の中に、必死になつて書き綴つてゐる。彼はその小説の中で、今事變を通じて、中國人の偽りなき苦惱を描くとともに、その苦悶の底から、彼等が新中國のために生き抜かうとしてゐる事實を、正直に物語つてゐるのである。われわれは、この嚴肅な苦悶に對して、愚劣な質問は避けるべきだらう。だが、私はこんな事實に接する度びに、日本人である喜びを沁々と知り、日本人である光榮に深い感動を覺えるのである。

私達は武昌の市街へ降りて行つた。廣い鋪裝道路の兩側には、支那人の商店と廂を並べ

て、日本の商店も姿を見せてゐる。

その時、私は異様な行列を見た。數十人の支那の兵隊が、二人ばかりの日本兵に引率されて、ぞろぞろ私達の方へやつて來るのである。

捕虜の一隊だつた。——まだ、やうやく十七八歳にしかならない少年兵があるかと思へば、逞しい面魂の壯年の顔も見えるし、乾からびた様な老兵まで發見されるのである。腰に鍋だの、湯呑みだの、袋だのをぶら下げてゐる。

——これが支那軍なのか。捕虜になるなどといふことは、われわれにとつては堪え難き屈辱であるが、彼等の顔には、そんな色もなく、支那人特有の無表情さを見せてゐるに過ぎない。

私の視線は、その瞬間、無意識に武昌市長の方に走つてゐた。そして、私は周章てて視線をそらしたのだつた。だが、私の眼は、その瞬間の動作で、何氣なく側の商店の飾窓を覗き込んでゐる市長の、後姿の肩の邊りに、明るい太陽の射してゐるのを、捉へてゐた。

捕虜は私達の前を、驕然として通り過ぎて行つた。

「この鋪装道路の下は、全部防空壕になつてゐるのですよ」

倉林さんは、靴の踵でトントンと鋪道を踏んで見せる。通りの幅は、三間か四間程であるが、それにしても、この鋪装道路の下が、全部防空壕になつてゐるとは、私などには想像もつかない事だつた。この施設から見ても、蔣介石軍が、如何に我が荒鷺の果敢な空襲を怖れてゐたかが想像できるのである。

「蛇山公園の方から行きませう」

私達は、街角で武昌市長と別れてから、蛇山公園の丘を越へて、省政府への近道へ出たのだつた。だらだら坂の中腹に、檐も廂も歪んだ古い建物が立つてゐて、周圍にべたべたと貼られた何かの貼紙が、寒風に吹かれて音をたててゐた。

「これでも芝居小屋なんですよ。芝居があると、こんな寂しいところでも、相當に見物が集つて来るから不思議ですね」

支那人は老若男女を問はず芝居好きらしい。私は支那の街を歩いてゐて、彼等がいつも口誦んでゐる歌が、いづれも支那芝居獨特の、甲高い旋律を表はしてゐるのを、屢々聞か

された。

私達は「湖北省政府」と大きく書かれた門をくぐつた。黒く塗られた門扉には、立派な金具が附いてゐて、太い門柱は朱色で塗られてゐる。色の対照としては不調和とも考へられるが、不思議にその不調和な色がしつくりしてゐた。

門内は何かの行事でもあるのか、中央の會議室らしい廣間には、萬國旗などが張りめぐらしてあつて、大勢の人達が遽しく出入してゐた。

「今日は巡警の學校の卒業式があるのでですよ」

倉林さんは、廣間を横に見て、階上へ私を導かれる。

「何主席に會はれますか」

「さあ、どうも……」

要人に會見しようなどとは、全く考へてゐなかつたので、私は躊躇した。

「お忙しいでせうから、御遠慮しませう」

私は省政府の顧問室で、湖北省一帯の話をいろいろと伺つてゐる裡に、その昔、北の李

鴻章に對して、南に張之洞在りと云はれた偉大な政治家が、武漢の總督をしてゐて、文化の開發に、軍備、工業、貿易の各方面に優れた治績を示したのは、日本國民の協力が、その蔭に大きな力となつてゐたといふ話に、強い興味を感じさせられたのだつた。

辛亥革命に於ける日本の志士の活躍とともに、張之洞との提携は、古くから武漢と日本とが、密接な關係の下にあつたことを物語つてゐる。

張之洞は、明治二十七八年の日清戰爭後から、北清事變に及ぶ清朝末期の名臣で、宣統元年に七十三歳で沒してゐる。

「どうして、なかなか大した人物だつたらしいですよ。今でも土地の古老などは、張之洞といふと、神様のやうに尊敬してゐますからね」

そして、側の省政府の中中國人の役人に、何か張之洞のことに關して話ををしてゐられるらしく、その支那人は言葉の一つ一つに、強い肯定を與へてゐる。

私は、その話の途切れるのを待つて訊いてみた。

「その人の遺跡といふやうなものが、今でも残つてゐるのでせうか」

「ええ、残つてゐます。出かけられますか」

私はその言葉に甘へて、省政府の自動車で、倉林さんと張之洞の總督衛門の跡を見に行くことにした。

省政市の前庭にも、廊下にも、大輪の菊が咲きそろつてゐた。支那でも、日本と同じやうに菊を鑑賞するらしい。この氣品のある清楚な花は、東洋人の心に共通するものがあるのであらう。

蛇山南麓の張之洞の總督衛門だつたといふ頃園を訪れて、私は湖北の偉大な政治家の住居の質素さに眼を瞠らされた。總督衛門などといふと、支那では豪華絢爛、堂宇宏壯といふのが常識だ、と思つてゐたのに、これは又、なんといふ清楚な構であらうか。しかも、この寒素な場所が、今日でも支那の人々に、その名を慕はれてゐる張之洞の總督衛門だつたのである。

廣い街道から、細い甃石路を小高い丘へ上ると、何の裝飾もない質素な二棟ばかりの建

物と、番人でも住んでゐるらしい陋屋があるだけで、今は訪れる人も餘りない様子である。

閉寂な庭には、菊の株が澤山に植えられてゐて、清楚な花を、枝もたわゝに咲かしてゐるのが、清々しく眼にうつるばかりであつた。

室内には、何の裝飾もなく、たゞ一枚の扁額が掲げられてゐるばかりで、張之洞の面影を偲ぶよすがない。

この小高い丘から眺めると、武昌の街は、ひつそりと靜かで、漢口のやうな殷賑さは見られず、落着いた城下町の如き感じである。

頃園の前の廣い道路は、郊外へ通じてゐて、風がさあと砂埃りを巻き上げてゐる。崩れた土堆、壊れた籬が、私に凄じかつた武漢攻略戦の光景を、僅かに偲ばせるのである。

この街道を、わが皇軍の南岸部隊が、武昌を目指し、漢口へ、漢口へと、軍靴の音を響かせて、猛進撃をつづけた街道なのである。——それにしても、この街道は、何といふ荒涼たる面影を残してゐるのであらうか。

武漢大學にて

（本文）

自動車が坂を上り切つて、大きくカーブをすると、豁然として前面の眺望が闊け、明るい紺碧の水を湛えた湖水を背景に、樹木のこんもりと茂つた丘が、幾重にもつらなり、濃い秋色を見せた樹木を通して、白亞の建物が點々と、秋の陽射しの中に光つてゐた。

緑色の蔓、白亞の建物、それに紺青に光る湖水の景觀は、索莫たる中支の曠野の中に、西洋の風景畫に見る南歐の如き風景を現出してゐた。
武昌の街から、自動車で二十分近くも、一軒の家もないやうな荒涼たる田舎道を、砂塵を巻き上げながら駛つたと思ふと、いきなり、額縁にはめた油繪の様な風景が、眼前に現れるのである。

「武漢大學ですよ」

省政府の倉林さんが、前方を指しながら教へられる。自動車は、谿谷のやうな丘を上下

して、白亞の大きな建物の一角に滑り込んだ。

私は、舊武漢大學に駐屯してゐるA部隊の、S中尉を訪ねて來たのだつた。

自動車を降り、丘の上にある部隊本部に刺を通じて、衛兵所から、S中尉の部屋へ導かれて行つた。

舊武漢大學は、廣大な地域を占めてゐて、校舎は點々と綠の樹木の間に散在してゐる。部隊本部になつてゐる丘の上からは、満々たる碧水を浮べた湖水が、目近に迫つて見える。

「やあ、遠い所をよく」

血色のよい童顔に、髭をたくはへたS中尉は、私の社の同僚池島君の知人だが、同年輩とも見えぬ若々しさである。

「こんな所にあると、内地の人の訪問は殆んどありませんよ。いや、よく来てくればました」

「どうです。素晴らしい景色でせう。こんな景勝の地を占めた大學は、ちよいと日本にも

ありませんでせう。しかし……」

大學の構内を、一望の下に俯瞰できるドーム風の、四層樓の階段を上りつめて、露臺に
出ながら、S中尉は言葉を區切つて、私を振り返つた。

「……この大學の建築は、如何にも壯麗に見えますが、建築されてから五年しか経たない
といふのに、もう雨漏りがしてゐるんですよ。アメリカ人の技師が、設計して建てたとい
ふのですが、とにかく、どこまでもアメリカ式ですね」

綠青色の蔓、白亞の建物は、瀟洒たる外觀を見せてゐるが、例へてみれば篠^{ショート・グリード}菓^{カイ}子の脆^{クセイ}さを感じさせるのである。だが、秋空の下に見る武漢大學の景觀は、風光明媚といふ言葉
が、もつとも適切な表現をもつてゐると言へるであらう。

「どの建物にしても、一應は快適に出来てゐますが、建築としての深味がないんですね」
この校舎から他の校舎へ行かうとするには、自動車でも行かなければならぬほどの距
離なのである。アメリカ人の技師は、何を想像して、こんな設計をしたのだらうか。おそ
らくは、湖水を背景にした丘陵地帶を見て、カリフオルニヤあたりの別荘地帯を、彼はここ

に再現しようとでも考へたのであらう。

「全く大學といふ感じではありませんね」

「あの湖水の畔に建つてゐるのが、女學生達の寄宿舍だつたんですよ」

ボブラーの樹に圍まれた瀟洒たる建物は、別莊風のチヨコレート・ケーキである。

屋上からの視野は、背後の湖にのみ濶けてゐて、三方は起伏する丘陵に遮ぎられてゐる
のである。

「大學をここに建てたことは、ある意味から云ふと、蔣介石の慧眼だつたと云へますね」

「この天然の要害の地といふと變んだが、外界からの思想を遮断して、アメリカナイズさ
れた形式の下で、抗日意識を若い學生達の、柔かい頭に注入するには、これほど都合のい
い場所はなかつたでせう」

この大學の學生達が、蔣介石の奥地逃走に従つて、今だに奥地から奥地へと、逃避行を
つづけてゐる事實は、誤れる抗日意識の妄想に引きづられてゐるからである。

秋色豊かな碧空の下に、ひとつと丘上に建つてゐる白亞の校舎に重なつて、一人の中

國の女性の姿が、思ひがけなく私の脳裡に浮び上つて來た。

淑——紺色の質素な支那服を着た小柄な彼女は、細面の、睫毛の長い聰明な瞳を、いつも伏せるやうにしてゐて、薄い唇が彼女の顔に、一脈の憂愁の翳を見せてゐた。

「脱走者！ いいえ、脱落者よ」

流暢な英語で、囁んで吐き出すやうに、昂然と瞳を上げて云つたかと思ふと、彼女はくるりと背を見せてしまつたが、細い肩のあたりに漂ふ悲痛な翳を、私は見逃さなかつた。——私は小説を書いてゐるのではなく、事實の報告を書いてゐるのである。小説を書いてゐるのだから、私は彼女の姓だけを書かずに、立派な名前をつけるだらう。事實、私は彼女の姓だけしか知らない。

武漢大學の學生だつた彼女は、皇軍の武漢三鎮攻略以前に、多くの學生達と共に、重慶へ逃れたのだつた。その逃れて行つた重慶から、どういふ理由からかは知らないが、故郷の漢口へ、佛印、廣東、上海を経て歸つて來たといふのである。

そして、現在では日本系の會社のタイピストとなつてゐるのである。私は、その會社へ友人を訪ねて行つて、彼女を知つたのだ。

友人の机の背後で、タイプライターを叩いてゐた女が、突然、私達の方を向いて、

「脱走者！ いいえ、脱落者よ！」

と、冷たく言ふと、くるりと背後を見せたのだつた。

それが彼女だつたのである。

「もちろん、日本語は分らないさ。しかし、重慶といふ言葉ぐらゐは、僕達がいつも話してゐるので分るのだらう。いや、氣をつけなきやいかん」

友人は、外へ出てから、私に彼女の経歴を話してくれたのである。

「漢口へ歸つて、僕達の會社に勤めてゐても、彼女達の心の底には、徹底的に叩き込まれた抗日意識といふものが、蟲のやうにこびりついてゐて、容易に脱け切れないのだらう」彼女の複雑な表情を透して、私は若い支那の無數の苦惱に充ちた表情を感じる。

支那の青年層の心に喰ひ入つた抗日意識といふ寄生蟲は、簡単には殲滅できないと、わ

れわれは覺悟しなければならないだらう。

我々の責任は重い。我々の同胞は、この抗日意識を、支那大陸から絶滅して、新しい東亞を築くために、大陸の地に尊い血を流してゐる。

しかも、戦ひは續いてゐるのである。

抗日意識——何がための抗日意識なのか。支那の青年層には、この裏に隠くされてゐる米英の東亞侵略の野望が、どうして理解されないのでらうか。この大學にしても、アメリカの技師が設計し、建築してゐる。設計や建築は、アメリカの野望の間接的な表現でしかない。われわれは支那大陸の各地に、米英の巧妙な陰謀——文化の美名にかくれた病院を、學校を、教會を發見する。

「部隊長がお會ひすると言つて居られましたから、階下へ行きませう」

私達は、S中尉の後に従つた。

二階の一室に通された時に、部屋の中央の机の上に、白布に包まれた英靈の遺骨箱が二

基、肅然と安置されてあるのが、強く私達の眼を射た。

身體を固くして、黙禱を捧げる。

鉢植の白菊が、眼にしみるやうに香つてゐた。

私は大陸の旅で、幾たび白布の英靈に遭遇したか分らない。

北滿の佳木斯では、遙々日本から迎へに來られた遺族の方達に護られて、歸還される英靈を、吹き荒ぶ吹雪の中で、襟を正して送つた。

北支でも、中支でも、そして、又ここでも――。

A部隊長の鬚髮には、白いものが見えてゐた。

「久米正雄氏の漢口攻略戰從軍記には、この武漢大學へ一番乗りされることを書いてをられますね」

「武漢大學一番乗り、ベン部隊、久米正雄と黒板へ書かれたといふ話でした」

A部隊長も、S中尉も、なかなか話好きらしい。

「この大學が占領された時に、調べて見ると、圖書館には目ぼしい書籍は、殆んど見當ら

なかつたさうですよ。何萬冊といふ本を、まさか重慶まで持つて行きはしないだらうと、

長い間探してゐたんですが、最近になつて、やはり漢口で發見されましてね」

窓の外の晚秋の陽が、樹木の影を長くひいてゐた。私は、話の面白さに牽かれて、長座してしまつたらしい。

「時間もありませんから、これで失禮します」

「どうです。今夜はここに一泊してゆきませんか」

「静かでせうね」

「いや、少々静か過ぎますよ」

S中尉は、明るく笑ふのである。

部屋を出て、玄關まで送つて來ながら、S中尉は、もう一度、私に泊つて行くやうにと勧めるのだった。

「今夜は月夜ですが、こここの月夜の素晴しさは格別ですよ」

想像しただけでも、なだらかな丘、銀色に光る湖水、夢のやうに浮ぶ白亜の殿堂は、確

かに素晴らしい景觀であらう。

漢口での先約がなかつたら、私はここに一泊してみたかつた。

「残念ですが、漢口に先約がありますから……」

「二度とない機會ですよ。しかし、先約があるので、無理には勧めませんがね。歸へりには、こつちの湖畔の道を通られると、趣が變つてゐます。私達の宿舎も見えますが、いい場所でしてね」

私達は、S中尉に別れると、數へられた湖畔の道を、自動車の窓から眺めながら通つた。

小高い丘の中腹に、戰前は大學の教授達の官舎でもあつたらしい瀟洒な、様々な建築様式の——山小屋風の、別荘風の——家々が、赤や黄の蔓を見せて、玩具のやうに、點々として建つてゐた。

それらの様子からしても、この武漢大學の附近一帯は、支那の土地ではなく、アメリカの植民地であるかの如き感を見せてゐるのである。

南京の城壁

支那の知識階級の教養が歐米化し、風光明媚な土地が、植民地の如き觀を呈してゐる事實を、われわれは忽せに見過すことは出來ない。

武漢大學の姿は、既に丘陵に遮られて、自動車の窓からは見えなくなつてゐた。

揚子江の空から

空から見る揚子江の濁流は、凄まじい景觀だつた。蜿蜒たる水流は、遠く水平線の彼方にまで、際涯もなく連なつてゐる。漢口へと溯江する六七千噸級の汽船が、洋々たる大河の中では、扁舟のやうにしか見えないのである。

二週間ばかり前には、私の乗つた船も、あのやうに喘ぎ喘ぎ揚子江を溯江してゐたのかと思ふと、何か嘘のやうな氣がしてくるのである。廣漠たる支那大陸の、平坦な大地の間を、揚子江は悠々として、太い帶のやうに貫き流れてゐる。

日本内地の河は、空から見ると、細い銀線のやうな、清冽な印象を受けるが、揚子江の際涯もない雄勁な大河は、大地の永遠の支配者の如き、強烈な印象を、私の脳裡に刻みつける。

空から見る揚子江には、渦巻く奔流もなく、滔々たる急湍も見られないが、それでも、

この大河は凄まじい姿をもつて、私の心に迫つて來るのである。

揚子江は、空から見た場合に、最もその身體的な特徴を、われわれの前に示すのではなかろうか。この大河の兩岸が、異様な形相をもつて、私の眼に映じてくる。漢口・南京間の揚子江の兩岸は、溯江する汽船の上から見たのでは、徒らに際涯もなく茫漠たる平地であつたが、空から見る兩岸は、夥しい湖と沼とクリークが、陸地よりも遙かに多くの面積を浸蝕してゐるかのやうに見えるのである。

私は急いで膝の上で地圖を広げて見る。だが、地圖は夥しい湖沼地帶よりも、陸地の方が遙かに優越してゐることを示してゐるのである。奇怪なものを見るやうに、私は防風窓を透して、地上を再び眺めた。

満々たる水を湛えた湖や沼は、大地の上に銀貨を嵌め込んだやうに、鈍く光つてゐる。森林は、鮮苔類のやうに擦すれば、脆くも剥がれさうにしか見えない。山や丘陵は、小さな蟻塚としか思はれない。だが、揚子江は蜿蜒として、大地を貫き、耕地や都市を黙殺して、滔々と流れてゐる。揚子江は揚子江として獨自の性格を示してゐる。——過去幾世紀

もの間、流れ來たつたこの大河は、又幾世紀もの間、同じ表情を浮べて流れ行くことであらう。

湖、沼、クリーク……。飛行機の上から見る揚子江の兩岸は、視野のかぎり際涯もなく大地を遮断し、耕地を挟み、湖と沼とクリークとが、人間の行路を阻んで、冷たく光つてゐる。

武漢攻略戦に猛進撃を開始した皇軍は、如何にして、この湖を、泥沼を、クリークを突破して、疾風迅雷の如き進撃をつゞけて行つたのであらうか。頑敵を殲滅するよりも、この難路を突破することの方が、如何に困難であつたらうかと思はせるやうな、凄まじい大地の形相なのである。

白い霧が、翼に裂かれて、非常な速さで流て行く。綿雲がむくむくと、純白の頭をもたげて、地上の景観を瞬時にして搔き消してしまつた。上空には一點の雲もなく、紺碧の空が燃々とき太陽の光に輝、鏡のやうに反射してゐる。

私は、この視野の限りに擴がつてゐる雲の上を、ふと歩いてみたい欲望に驅られる。エ

ンチソの規則正しい響が睡魔を誘つてくる。

こんな大空を、たつた一人で飛んでゐたら、一種の寂寥感に捉はれてしまはないだらうか——そんな考へが、私の頭の中をかすめる。雲が切れたのか、大地の姿が流れるやうに視野の中に現れたと思ふと、飛行機は、又しても雲の中へ突込んでしまつた。

「君、あれが安慶だよ」

私はいつか睡つてゐたらしい。○○兵團のY參謀の聲に、驚いて地上を見る。小さな街である。箱庭の塔のやうなものが、小さな影を落してゐる。

あれが安慶なのであらうか——溯江する船の上から見た安慶とは、全く違つた印象を、私に與へる。

揚子江の流域は、際涯もない廣漠たる平野がつゞいてゐて、沿岸の町や村などは、奔流に翻弄されて、流れよつた塵芥としか見えないし、割然と闊けた清潔さはなく、支那の街と同様にごみごみした印象を與へるのである。土地は一寸の隙間もなく耕されて、狭い區割の稻田が、河と直角になつて並んでゐるだけで、森林などといふものは、久しい昔からこ

の大陸では見たこともなかつたに違ひない。水に囲まれた村落が、ぽつんと置き忘れられたやうに、土の壁を見せてゐる。——飛行機の速度から考へて、それは五里に一つ、十里に一つと言つた状態なのではあるまいかと思はれる。

又しても、漠々たる綿雲が、急激に飛行機をつゝんでしまふ。加減辨を開いたやうな唸りを上げて、ぽつかりと雲の上に出る。すると、今まで頭上に蔽ひかぶさつてゐた雲が眼下になつて、燐々たる太陽が湯のやうに、身體へ降り注いでくる。

「蘆山が見えて來たよ」

團々たる綿雲の彼方に、巍峨たる山嶺が天を摩するやうに、雲の上に、屹然たる姿を見せてゐる。

「あれですか」

私は、窓に額をくつつけて、刻一刻と近づく蘆山の姿を喰ひ入るやうに凝視した。

蘆山とは、こんな山であつたのか！ 磊々たる岩の堆積する山嶺が、揚子江岸の平野の中に、突然大地を突き破つて、群がり立つたやうな峻嶮さを見せてゐる。溯江の時の船の

●

中からは、この屹然たる山嶺は雲にとさされてゐて、窺ひ知るべくもなかつたゞけに、私は想ひも新しく、その山塊を見つめてゐた。

「凄い山だなあ——」

この山麓は、故飯塚部隊長奮戦の地であり、奇巖巒峰の屹然と群立する山嶺のいづこには、友人牧野英二中尉が武名を轟かした金輪峰の峻嶮が聳えてゐるのである。飛行機が大きく旋回して下降し始めたらしく、前面にあつた蘆山が、左方から後部へと姿を消し、九江の街がぐツぐツと眼前に近づいて來た。江上から臨んだ古塔が、視野の中に飛び込んでくる。

寂寞とした丘の上に、蕭然とした塔が、明るい太陽を側面にうけて、物寂びた姿を見せてゐる。

それは美しい塔である。花瓣に似た苔むした蔓を、上にそらせて傾斜してゐる屋根の、壁の色も褪せた圓塔の上に支えられてゐる姿が、支那の古い歴史を物語つてゐる。いや、物寂た古塔の姿が、蘆山の物寂しい戰闘を物語つてゐるかのやうにも見えるのである。

飛行機は、九江の對岸の上で大きく旋回すると、再び蘆山を正面に見て、九江の市街の上空を飛んでゐる。街の背後に、小さな湖水が光つて見える。地圖で見ると、南門湖と記してある。

江上から見た江岸のタンクには、大きな米國旗がベンキで描いてあるのが、はつきりと見える。

あれが、琵琶亭だな——瞬間、雨氣を含んだ暗褐色の狹霧が、蘆山の上から逆巻くやうに吹き下ろして來て、悠忽として、街も、揚子江も、私たちの視野の中から消えさつた。

蘆山の巍峨たる山肌が、湧き上の暗雲の中に、幻の如くに消えては浮ぶ。

飛行機は、暗雲を裂いて、地上五〇〇メートル附近まで下降し、地物を目標にして飛んで行くのである。落着きはらつた飛行振りである。この程度の雲などは、問題外なのであらう。

一本の鐵路が、蘆山山麓に沿つて走つてゐるのが、地上の一筋の傷痕のやうにしか見えない。

高度を保持してゐた時には、飛行機の速度には、少しも氣付かなかつたが、低空飛行に

なると、地物がはつきり見えるためか、物凄い速度であることが、奔流のやうに地上の一切のものが、後へ後へと疾走して行くことによつて、感知される。

蘆山附近の悪氣流を衝いて、斷雲を突破したと思つたら、飛行機は基地の上空に滑り込んでゐた。くるりと大きく旋廻をすると、巧みな操縦で、飛行機は滑るやうに接地した。私は素早く地上へ飛び降りたが、轟々たる爆音が耳底に残つてゐて、しばらくは話聲もなにも聞えない。鼻をつまんで、くんくんと耳に力を入れてみる。

少しは樂に聞えるやうな氣がする。私は飛行場の草の上に、暢々と脚をのばした。

飛行場の風景ほど魅力のあるものは、他に類がないのではないか——ひろびろとした滑走路が、遙かに遠く霞んでゐて、銀色の鵬翼が音もなく、地上に輕快な姿體を想はせてゐる。近代兵器のみのもつ銳さが、ひろびろとした原始的な大地と融け合つて見えるのは、飛行場の大きな特徴にちがひない。

パンパン……機銃の點検をしてゐるらしく、銳く乾いた連射音が響いてくる。

私は先刻から、雑草の上に胡坐を組んで、一人の若い兵長と話をしてゐる。彼は整備兵である。

「自分達の整備した飛行機には、絶対に故障なんかありませんよ。自分は事變以來、ずっと大陸にゐますが、一度も事故を起したこと�이ありません。飛行機の性能も優秀になります」

若い兵長は鬪志満々としてゐて、整備に對する自信にかけては、強い信念をもつてゐる。だが、自分達の整備には絶対の自信をもつてゐます」

H隊長の眼は、飛行場の一隅で、盛んにキャッチ・ボールをやつてゐる一群に向かれてゐる。

「おい、I兵長」

H隊長が、いつか私達の雑談の仲間入りをする。起立しようとするI兵長を制して、

「お前、今日はやらんのか」

H隊長の眼は、飛行場の一隅で、盛んにキャッチ・ボールをやつてゐる一群に向かれてゐる。

「はツ、今日は自分達のチームではありません」

「さうか。どうです、航空部隊といふのは。こんな曇天の日には、よく野球をやるんですよ。なにしろ、街へ出るのは遠いし、處置なしですからね」

紫煙の輪が、ぶかりと流れる。航空部隊は渡り鳥である。今日この基地にゐたかと思ふと、明日は別の基地に降り立つてゐる。娯楽などといふものとは、全く縁が遠い。簡単な運動として、野球が隊員の無聊をなぐさめるのである。手製のバットとスポンジボールさへあれば、飛行場は何處でも良きグランドを提供してくれるといふのである。

この飛行場は、武漢攻略戦の頃には、まだ敵の飛行隊が踏踞してゐて、我が海軍航空隊のために、猛烈な爆撃を蒙つたらしく、司令部の二階などは、三分の二以上は完全にふつ飛んでしまつてゐるし、鐵筋コンクリートの壁には、無数の彈痕が、當時の模様を物語つてゐる。格納庫にも、凄まじい爆撃の跡が残つてゐるのである。

「……我々の役目は地味でしてね。戦闘だの、爆撃だの連中の勇ましい話を聞くと、全く脾肉の嘆に堪へません。しかし、我々がやらなかつたら——といふ自信はありますよ。

編隊で飛んで行く時には、別になんとも思ひませんが、單機で敵地區の上空を飛ぶ時などは、距離があんまり長いと、正直なところ、ふつと寂しいといふのかなんといふのか、變な氣持になることがありますよ。獲物を發見した時は、なんともないんですがね。手ぶらで歸る時は、閉口しますな」

若いH隊長は、偵察隊の苦心を、ぱつりぱつりと話してくれる。

私は、強い意志を頬のあたりに見せた童顔の隊長の顔を見ながら、何處までも何處まで敷き詰めた様な綿雲の上を、たゞ一點の黒影を、雲に映して飛んでゐる飛行機の姿を、心に描いた。たつた二時間たらずの雲上飛行でさへ、私などは一種の寂寥感に襲はれたのに、それを、二時間どころか、五時間も六時間も飛んでゐたら、果してどんな氣持がするだらう。

今日も一機出かけてゐるのだ。耳を澄ますと、どんより曇つた空の彼方に、爆音が聞えて来るやうな氣がする。

「まだ歸つて来ませんよ」

私の様子に氣がついたのか、H隊長はちよつと腕時計をのぞいて言ふと、起ち上つた。
「野球でも見物しますか」
元氣の良い若々しい聲が、野ツ原一ぱいに響き渡つてゐる。試合が開始されたらしい。飛行服に飛行靴の待機のまゝの姿で、若い航空兵や整備兵達が、廣い野原の飛行場を、狹しとばかりに駆け廻つてゐる。
O部隊長も、その様子を腕組みをしたまゝ、黙然と見てゐる。戦闘帽の庇の下の眼は、微笑を含んでゐる。

「あツ、歸つて來たぞう」

野球をやつてゐた一人が、大きな聲で叫んだ。

「自分の整備してゐる飛行機だと、どんな微かな音でも直ぐに分るんですね」

一人の整備兵が、勢ひよく、飛行機の着陸する地點の方へと駆け出して行く。續いて二人、三人と、その後を追ふ。

野球は中斷される。タイムといふところであらう。整備の仕事に追はれて、タイムが翌

日に持ち越されることなどは、往々にしてあるさうだ。

「もう歸へるんですか。しかし、ここでは退屈ですからな。自分達も何時まで此所にゐるか分りません」

私は、今日この基地を出發することになつてゐるのである。歸へる時間が切迫してゐる。私の便乗する飛行機は、發動機の點検を盛んにやつてゐる。青白い焰が。パツパツと慣いてゐる。

「ここは空は曇つてゐるが、幡陽湖の上あたりからは、いい天氣ですよ。ちや、御機嫌よう」

私は操縦席の背後にもぐり込む。

始動が開始されて、飛行機は物凄い唸り聲を立てる。間もなく、物凄い速力で、地上が流れ去ると、もう浮力のついた飛行機は、見る見る地上に訣別して、大空の大氣の中へ上昇して行く。

司令所が、格納庫が小さく見える。I兵長らしい姿が帽子を振つてゐる。

(幡陽湖のあたりからは上天氣だ)といふH隊長の豫言通りに、快晴の空を寫した幡陽湖の碧水が、周囲の明るい黃褐色の岸邊と對照されて美しい。今日も、長江の黃濁した流れが、太い帶のやうに際涯もなくつゞいてゐるのが、大きく前面に現れて來た。軽快な速力を誇る飛行機は、間もなく、南京の街が見えて來る前に、なだらかな稜線をもつた紫金山の姿を見せてくれるだらう。紫金山の中腹にある中山陵の大理石の建物は、夕陽をうけて冷めたく光つてゐるであらう。

細い帶のやうな城壁が、今日はどんな美しさをもつて、私を迎へてくれるであらうか。

光華門の壁

逸仙橋を渡ると、街並みは消えて、突如として郊外らしい風景に變つて来る。遙かに中山門が、一直線の鋪装道路の彼方に見えてゐて、どの位の距離があるものか、城壁が霞んで見える。

支那の都邑は、城壁で周囲を繞らしてゐるのが、大きな特徴の一つといへるだらう。

南京の城壁は、内部に近代的な市街と田園的風景とを圍繞した膨大な姿を見せてゐる。飛行機から見ると、近代的な建築物の背後に田畠が横はり、丘が盛り上り、ひろびろとした飛行場があり、泥小屋が廂を傾けてゐて、未完成都市の姿をまさまさと見せてゐる。

そして城壁は、この未完成な都市の周囲を、暗灰色の一筋の繩で、締めくくつてゐるやうに見えるのである。

城壁で圍繞された都市といふものは、城門をくぐつて入つて來る者には、一種の威嚴を

具へてゐるやうに思はれる。銃眼のある城壁を、外郭から見上げると、何か壯重な感じを與へられる。

私達の自動車の窓の左手に、舊中央軍管學校や、蔣介石の住宅の在つた勵志社の建物が見え、右側の廣々とした野原、は鋪装道路の兩側に沿つて、城壁の下まで續いてゐる。

同行の吉田千秋君——吉田貫三郎畫伯の令弟で報道部の寫眞班で活躍してゐる——が、右手の野原を示して、

「これが中山飛行場なんですよ」と、説明してくれる。

「これが——」

これが颶風を衝き、東支那海の怒濤を眼下に、劃期的な渡洋爆撃を決行した海鷺の、爆撃目標だつた南京飛行場だのたのか。——私は車窓から飛行場を見まもつた。

冬空は一片の雲もなく、紺青の空の下で、飛行場の蓬草が、麗かな陽を浴びてゐる。近くの畑では、支那の農夫がのどかに鍬を揮つてゐる。

この碧空のいづこで、凄壯な空中戦闘が行はれ、熾烈な防空砲火が炸烈したのであらうか。空は悠久の青さを澄まして、岑寂と音もない。

自動車は、大きくカーブして、光華門の方へ曲がつて行く。鋪装道路は坦々としてつき、道路の兩側には、蔣介石が近代都市を建設しようとしたコンクリートの基礎工事の残骸が、今は勤勉な農夫の畑の境界線となつてゐる。

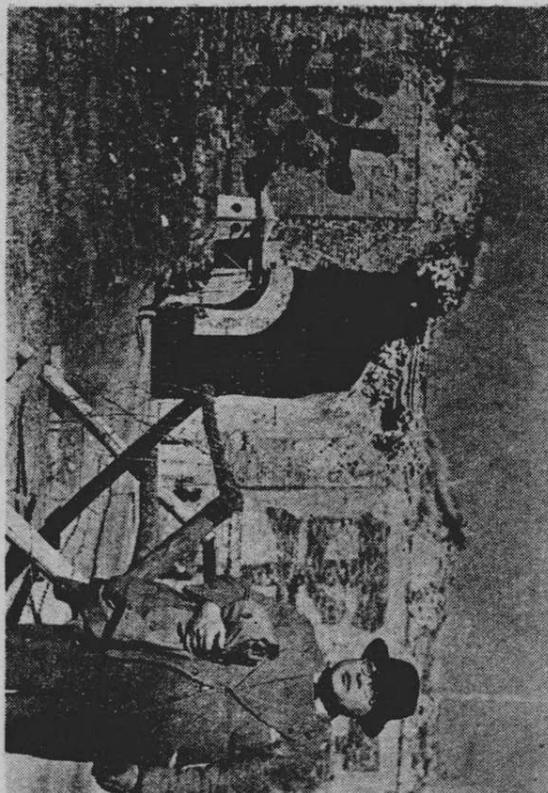
吉田君が、今朝、光華門外の中華軍官學校へ撮影に行くといふので、私はのこのこと吉田君について來たのである。

「光華門は歸りに案内しますよ」

自動車は、光華門内の歩哨所に断はつて、城壁の外へ出ると、黃褐色の田舎道を、城壁外のクリークに沿つて駛る。城壁の外は、日本の田舎と少しも違はず風景である。

軍官學校と思つて訪ねたのは、下士官學校らしいのだが、日本語の分る者が一人もゐないので、結局「不明白」といふことになつて、吉田君は空しく歸らざるを得なくなつた。

「没办法ですよ。さあ、光華門へ行きませう」



おひでむ止を幾度に渡城か、晴明の跡を坂跡・壁の川翠光の京房

又、田舎道を引返して、私達は光華門外で自動車を降りた。支那の農民が驢馬を引つば

つて、柳の小枝で尻を追ひながら、城門から出て来る。

私は城壁の下に立つて、瓦礫が雪崩の如く、青みどろの水草を浮べたクリークに落ち込

んでゐる個所を見た。

その上の城壁の一ヶ所に「突撃路開設之跡」と書かれた棒杭が立つてゐる。城門の一角は、砲弾に破裂れて、崩れ落ちてゐる。城壁には、今では「和平救國」の大文字が一字五

間四方もある大きさで、筆太に書いてある。

「城壁へ上つてみませう」

城門は中央に大きな穴を見せて、前後約六、七間もの厚さの練瓦で、築き上げられてゐる。この頑丈さに加ふるに、疊々たる土嚢を積み重ねたのでは、如何なる砲弾でも、容易には破壊できなかつたであらう。

城門の内側からは、石段で城壁の上に出られるのである。城壁の上には、風が音をたてて吹いてゐた。

伊藤部隊長を始め戦没將士の墓標が、蕭々と風に吹かれて立つてゐる。私たちは、墓標の前に額づいた。この城壁の瓦礫の一つ一つに、皇軍勇士の尊い血潮が、沁み込んでゐるに相違ない。

城内も、城外も、明るい陽の下に、長閑な初冬の姿を見せてゐるが、ここばかりは肌寒い風が吹き過ぎて行くと感じられるのも、私達の感慨からばかりでもないらしい。

城壁の上は、私などの想像してゐたより以上の幅員をもつてゐる。七米から十三米の幅員のある城壁が、約十三里の延長をもつて南京市街を圍繞してゐるのである。城壁の高さは、十米から二十四五米もあるといふ。

光華門の上も、十三米近くの幅員をもつてゐた。十三米もあれば、自動車なぞは、二臺でも、三臺でも、並んで走れるだらう。

南京城は明の太祖が構築したもので、これは内城の城壁だつたといふのだから、外城はどんなに宏大なものであつたぢらうか。たしかに、われわれの想像を絶してゐる。五百年の歲月を経た城壁だけに、一つ一つの煉瓦にも、昔の夢がたゆたふてゐる感じである。

南京に着いて、社の同僚の石川信雄君（報道部勤務）に案内されて、レストランの屋上から、初めて見た城壁の色の鮮やかさに魅惑された私は、南京に滞在してゐる間、城門を出入する度に、この城壁に興味をもつやうになつてゐた。

朝の城壁は暗灰色で、推積された煉瓦の一枚一枚が冷たい表情を作り、晝は青緑色のクリークの水の上に、明るい影を落して暢びやかに昔の夢を語つてゐるかに見えるが、夕方になると、夕映えの反射をうけて、煉瓦の割れ目に生えた蓬草や蔓草と、ひそやかな耳語を交はすかに見えるのである。

城壁は、四季によつて景觀を變へ、時間によつて、表情を異にするのでもあらう。

しかし、今日、この光華門の城壁は、私に淒惨な戰闘狀況を物語るばかりである。私はこの城壁の一隅に立つて、城内へ通づる中山、太平、玄武、把江、定淮、清涼、漢西、河西、利平、鐘阜、金川、興中、中華、武定、通濟の各門を遠望しながら、猛烈する銃砲聲の殷々たる響を聞くのである。

—昭和十二年十二月九日、江南の戰野を、疾風の如く席捲した脇坂部隊の將兵は、南

京城を指呼の間に臨み、岸隊の山際少尉の一隊は、光華門前百米の近距離に迫つて、城内突入の時機をうかゞつてゐた。

私はここで、私の拙い舞文曲筆を弄するよりは、山際少尉の簡潔にして、烈々たる鬪魂に燃えた日記の一節を抜萃させて頂く。

十二月九日

午後一時頃、三〇〇の敵に遭遇直ちに之を攻撃撃退す。敵は我が軍の急進を知らず到る所の村落に露營し居り、我が部隊を支那軍の退却と見違へドンドン家屋より出て合併せし爲、途次多數の敵を刺殺す。道路は戦車壕及拒馬を設置しあり。午前四時半頃南京城近しの聲を聞き、勇氣百倍駆足を以つて敵中を突破し、一路南京へ、南京へと驥進す。

午前五時曉雲高く聳ゆる南京城を仰ぎ、思はず萬歳を叫ぶ。之を知りし敵は街燈を一齊に點じ、城壁上より物凄き射撃を浴す。直ちに匍匐前進を以て城門に内迫約一〇〇米前に於て壕を構築す。城内にサイレン鳴り響き、首都の斷末魔を思はしむ。射撃により電

球を全部破壊して突撃の機を窺ひしも、電流鐵條網を横たへ城内は堅く閉されあり、一氣の攻撃を許さず、弾丸も食糧も心細し。而し最後の一兵になるとも必ず城頭高く日章旗を翻へすべく一同の意氣は軒昂たり。

午後十一時半、壕中にて手記す。

十二月十日

昨夜は種々思ひを廻らし一睡もせず。他部隊に撃退せられし敗残兵の大部隊が逆襲し來り、應戦に暇なし。今日は母の命日だ。冥福を祈る。煙草が喫ひたくとも無し、愈々午後五時突撃の命下る。山砲の掩護のもとに肉弾の突撃を決行する。敵は城壁上より物凄き射撃を浴す。途中多數の戦友を失ひしも死を決せし我々は例へ一兵たりとも目的を達成すべく不退轉の氣力を以て、突撃又突撃、漸く城門下に達す。門は山砲の集中射撃により富士山形に破壊されあり、土礫煉瓦の山を四つ匍ひにて匍ひ上り、輝く最初の日章旗を腕も折れよとばかり打振り 天皇陛下萬歳 岸中隊一番乘萬歳と咽喉も裂けよと叫

びたり。

門内に進入を察知せし敵は城門上より物凄く手榴弾を投擲し、其の音響城門内に反響して凄絶云わん方なし。

日没と共に戦死傷者相次ぎ無念やる方なし。弾は愈々缺乏し人員は減少せしも一同協力一致よく大和魂の精華を發揮し互ひに勵まし合ひ敵の出撃を防ぎ居れり。片手を失ひし兵も足を取られし兵も射撃を續行し、鬼神も泣くが如く奮戦をなしたり。暫時の後第三中隊及伊藤部隊長相次いで城門内に突入され、我々の士氣一段と揚る。午後九時五分慈父と仰ぎし部隊長殿も壯絶極まりなき最後を遂げられ一同心中に深く復讐を決意す。敵弾は益々物凄く飛來し愈々死を決意す、日記もこれを以て終りとならん。

十二月十三日

惡戰苦闘三日目の夜は明く、昨夜來銃聲の減少を覺ゆ。

午前七時、部隊主力は光輝ある〇〇を捧じ光華門上に前進し来る。一同東天を遙拜し、

祖國に響けよとばかり萬歳を高唱す。

城内を眼下に見只涙あるのみ。三日間の惡戰苦闘を省み、多數の戦友が地下に眠りし光華門を仰ぎ見るとき誰か泣かざるものやあらん。此處に謹んで哀悼の意を表し、その冥福を祈るものなり。

我々は尊き犠牲に對し、その英靈に報ゆるために今後の奮闘を誓ふ。

山際中尉の率ゐる岸隊は、僅かに八名となつてゐたといふ。

風は蕭條として、今は古戦場となつた城壁の上を吹きすぎて行く。紫金山の中腹にある中山陵が、午後の陽を受けて、白く光つて見える。

城壁の下は、風もなく暖い冬の午後である。ふり仰ぐ城壁は、無数の弾痕をとどめてゐて、激戦の光景を物語つてゐるのである。
二基、三基……城門を離れて行く、自動車の窓から、いつまでも、いつまでも細い墓標の立つてゐる城壁が見えてゐた。

奏淮河畔

城壁の下を圍繞して、開鑿したものであらうか、その名も護城河といふのが、十三里に及んで碧水を湛え、その間に、玄武湖、莫愁湖などの湖が、雲の影を宿して、靜謐な姿を見せてゐる。

城内にも無數の沼澤が點在してゐて、縱横に、無秩序に、流れるともなく濱んでゐる。整然たる街路は、南京市街の東西南北を十文字に駛つてゐるが、一步横にそれると、ごみごみした険路がつゞき、沼澤が姿を現はし、ごろた石を敷きつめた路に沿ひ、泥壁の堤を見せてゐる。

近代的都市の外觀の裏側に、青菜の烟のつゞいてゐるのが南京の姿である。——銀座通りの裏が、直ぐに練馬の大根烟になつてゐる感じである。凡てが未完成都市を物語るものばかりだけに、この都會は、私達の心に通ふものがあるのか、直ぐに舊知のやうな感じを見せてゐる。

與へるのであらう。いや、私の場合は、南京へ着くと、社の同僚の石川信雄君が報道部にゐたばかりでなく、文化奉公會（歸還兵の文化團體）から、報道部へ派遣されて來てゐる棟田博君、瀬戸口寅雄君、三輪孝君などがあつたので、東京が南京へつゞいてゐたやうな感じがしたのであつた。

「奏淮河といふのは、たしか南京にあるんだね」

「さうだよ。今夜案内するよ」

「夜——河を見る」

「夜——河を見る」

そんな冗談が出るほど、私は心の緊張から解きほぐされてゐた。

「まあ、夜になるまで休んでゐろよ」

福田館の一室で、私はしばらく寢臺の上に身體を憩めてゐた。この旅館は、日本内地のどこの旅館よりも、心のけない親切ない旅館だつた。

奏淮といへば、牡牧の詩にまで詠じられてゐて、私などもその詩を暗んじてゐる。

煙籠寒水月籠沙

夜泊奏淮近酒家

商女不知亡國恨

隔江獨唱後庭花

奏淮——奏の始皇帝が占者の言を用ひて、開鑿したといふので、奏淮の名稱あり。清朝の乾隆帝も、奏淮に畫舫を浮べ、風流韻詩に日を送りし地なり。附近に桃葉渡、利涉橋の名所ありて、往昔は畫舫集りて遊人酒を置き美女を招き歡を盡す……。

私は旅館にあつた南京の名所案内を、寢臺に寝たまま、豫備知識として読み耽けつてゐたのである。

「煙寒水を籠め月沙を籠む、夜奏淮に泊し酒家に近し、商女は知らず亡國の恨……いや、

商女亡國の恨を知らず——かな」

「そんなことは、いづれにてもよし。さあ、出かけよう」

私達の乗つた洋車は、中正路の廣い鋪裝道路を、裸足でびたびたと走つてゐる。明るい

街から、暗い岑閑とした道をぬけると、いきなり電飾の眩ゆい賑やかな街へ出て來た。

人通りも多く、支那音樂のレコードが甲高い音を響かせてゐる。洋車は、狭い横町へまがる。雜踏は繁く、車夫は鋭い懸聲をかけながら、群衆を搔き分けて行くのである。

自動車が鋭い警笛を響かせて、雜踏する群衆の姿を、前燈(ワドライト)に浮び上らせる。藍一色の支那服の群は、見馴れない私などには、譯の分らない異様な感じを與へる。

茶館からは胡弓の音にのつて、甲高い聲が洩れて來る。銅鑼の音が、物凄い響をたててゐる。料亭には人が溢れ、路傍の屋臺店の焜爐からは、濛々たる湯氣が立ちのぼつて、鍋の中では、何かが煮えてゐるのだが、薄暗い燈の下ではさだかには分らない。

「奏淮河畔といふのは、ここなのだよ」

洋車を降りると、瀬戸口君は雜踏の中に立つて言ふのである。だが、河らしきものの姿は見えない。

「冗談だらう」

「奏淮河は悠つくり案内するが、夜奏淮に泊す酒家に近しだよ。商女もあるる」

私は夫子廟の雜踏の中を歩かせられてゐたのである。

「南京の淺草といふところだらう」

映畫館、舞踏場、芝居小屋、茶館、飲食店などが、ごろた石を敷きつめた路の兩側に、雜然と廂を擦り合せてゐる。

私は物珍らしく、一軒一軒を覗いて見た。飲食店の窓には、血の滴る桃色の肉の一盤が鉤けられ、名稱の分らぬ乾魚が、皿の上で眼を剥いてゐる。雜貨店の飾窓は、豊富な品物で溢れてゐる。

緑色の毛織の支那服を着た姑娘が、舞踏場の前で洋車から降りた。ハイヒールのすんなりとした脚が、勢ひよく裾を蹴つて、廂の奥へ滑り込んで行く。

私達は舞踏場の内部を見るに、衆議一決した。煙草の紫煙と人いきれの中で、リズムの抑揚のとれないジャズが、がんがん響いてゐる。だが、支那服のダンサーの姿は美しい。原色の絢爛たる支那服に、漆黒のバーマネットの髪が、しつくりと調和してゐる。舞踏場を囲んだ卓子の上で、ビールのコップが琥珀色に光つてゐるのも美しい。

夜氣が冷たく頬を撫ぜる。甃石道は水を流したやうに濡れ輝いてゐる。——舞踏場を出で、私達は歩きつゝける。

夫子廟——孔子を祭つた廟なのだが、今は灰燼に歸して、大成殿、明倫堂、尊經閣などの、名稱のみそれらしい堂宇が、僅かに残つてゐるに過ぎないのでさうである。さういへば、朱塗のけけばしい建物が、夜目にもしるくあつたようでもある。

「これが有名な秦淮河だよ」
小さな橋の中央に立つて、河だか溝だか分らぬものを指して、瀬戸口君はさう言ふのである。半信半疑で棟田君の顔を見る。

「これなんです。奏淮は」

暗闇の中に、どろりと濁つた汚水が、流れるでもなく濁んでゐるに過ぎない。

煙籠寒水月籠沙——風景などは薬にしたくも見られない。たゞ、酒家に近いことだけは確かである。

「この橋が文徳橋といつて、この向ふ側は、東晉の王謝が住んでゐた烏衣巷だよ」

東晋の王謝とは如何なる人物であつたのか、私は淺學にして知らなかつたが、秦淮の餘りにも薄汚いのには驚いて、しばし言葉もなかつたのである。

「それにしても、これではねえ」

「だが、この濁水でも、夏ともなれば畫舫を浮べて遊ぶんだよ」

兵隊として南京に駐屯してゐたことのある瀬戸口君が説明するのだから間違ひはない。
「どこかで、飯でも食はうか」

「いや、遠慮するよ」

飲食店や料亭が、軒並に店を開いてゐるが、さあとなると、なにか躊躇されるのである。

「だが、ここで南京人と卓を並べなくちや、ほんたうのものは食べられないよ」

事實さうかも知れないが、この喧噪と雜踏の中では、食物の味などを、悠々娯しんでゐる氣にはなれないのである。

秦淮の夫子廟附近は、煌々たる電飾に輝いてゐるが、烏衣巷一帯は漆黒の暗闇につゝまれてゐて、電燈の光もなく、蠟燭の灯のやうな乏しい燈火が、閉ざされた戸の隙間から洩

てゐる有様が、不思議な印象となつて、私の心に残つた。

私は、もう一度明るい陽の下で、秦淮を見たいと思つたが、漢口へ行つて歸つて來るまで、遂ひに一度も、その機會がなかつた。

漢口から歸つて、明日、南京に別れて上海へ行くといふ日に、私は三輪君を誘つて、秦淮へ出かけて行つた。瀬戸口君は蘇州の方へ行つてゐて居なかつたし、棟田君はもう内地へ歸つてしまつてゐた。

「畫間の秦淮を見たら、きっと失望しますよ。もつとも、夫子廟の方は、畫の方が面白いですがね」

「白鷺洲といふのも、あの近所ぢやないんですか」

「——だといふ話ですが、僕もまだ行つてゐないんですよ。都合で出かけませうか」

私の支那の名所に對する知識といふのは、漢詩から得た知識なのだから心細い次第だ。

白鷺洲といふのも、李白の『三山半落青山外。二水中分白鷺洲』といふのを、ぼんやり記

憶してゐたのである。

夫子廟への隘路は、晝間でも群衆で雜踏してゐた。隘路といふよりも陋路と云つた方が適當かも知れない。小さな映畫館——私はこれまでに、こんな小さな映畫館は見たこともなかつた。入口などは毒々しい色彩の繪看板でぎつしり貼られてゐて、何處に入口があるのか分らない程である。廟を重ねてゐる家々も、時代を経た古さで、既に傾きかけてゐるやうなものもある。

路傍の飲食店は、日本の屋臺のおでん屋を汚なくしたやうなもので、鍋の中で煮えたぎつてゐる食物は、私たちには見當もつかないもので、異様な喰氣が漾つてゐる。

明るい陽の下で見た秦淮は、夜目にもどろりとした污水だつた。底からぶくぶくと水泡をふき出しあうな、濁つた不潔な污水が、無氣味にぬらりと勧んでゐた。

「こいつは酷い——」

三輪君は、後悔したぢらう、といふ微笑を見せてゐる。

それでも、雨露にうたれ、風霜に傷んだ畫舫が二三艘、橋桁のあたりに繋いであつた。

「あの畫舫では、後庭の花を唱する氣にもなれませんね」

私達は夫子廟が建つてゐたといふ廣場へ入つて行つた。廟が建つてゐたと覺しい地點には、土臺石ばかりが見えてゐて、周囲には瓦礫が散亂してゐるばかりだつたが、この廣場は、ぎつしりと群衆で埋められてゐる。

人垣の間からのぞくと、大道手品師が器用な手つきで、盛んに人を笑はせてゐる。銅羅を力まかせに響かせてゐる人ごみでは、上半身裸體の壯漢が、紅い房のついた鋒や鉢や青龍刀をぶり廻して、武技を演じてゐる。

静かな人だかりを見ると、盲目の姑娘が胡弓を膝にして、物悲しい聲で唄つてゐるのである。嫋々たる唄聲に、人々は耳を傾けてゐる——哀歌なのでもあらうか。

賣占者が、薄汚れた笠竹をならべてゐる見臺に、冬の陽がしらじらと射してゐる。辻講釋師とでもいふのであらうか、群衆を相手に盛んに一席辯じてゐるものもある。物語は「水滸傳」でもあるのだと、口角泡を飛ばしてゐる。……露店風景は、日本も支那も、同様であつて、別に異つた特色も見られない。違つてゐるとすれば、人々の服裝だけである。

芝居、操人形、板血(いたち)式のインチキ見世物までが、この廣場から溢れ出て、路傍にまで進出してゐる。

支那の街を歩くと、寫眞館の多いのに驚くが、この夫子廟界隈も十軒に二軒、五軒に一軒の比率で、寫眞屋が店を開いてゐる。飾窓を見ると、拙劣な着色寫眞が、麗々しく貼り出してある。

「どうです。あれを買ひませんか」

私は雑貨店の節窓を見ながら、三軒君に抱きしめられた。うしろで「いいえ、買ひませう」と

一どれですか、あれですか、おお、買ひます、」

簡窓の中には、薄紫の絨と白いカーテンが、ころが、これは氷嚢ではなかつた。支那では、これに湯タンボの代用をつとめさせてゐるのだから面白い。

私はこのゴムの氷製の効用を舞踏場で發見したのである。ソーサー達が、一人残らずと言つてもいいくらいに、膝の上に、綺麗な手巾で包んだ小さな

つくらとしたものを持つてゐるのである。私は好奇心を起して、その手巾のなかのものに注意してみると、それがこの小さなゴム製の氷嚢——ではなくて、湯タンボだつたのである。なるほど、これは素晴らしい利用法である——と、私は感服した。これで手を温めてゐれば、手が寒さに凍えることもなからう。一つ試みに買つて置かうと思つてゐた品物を、この篠窓の中に發見したのだつた。

私達は、その小さなゴム製の湯タンボの包をぶら下げて、木枯のやうな風の吹き出しが太平路を、洋車にゆられながら歸つて來た。

ところが、半分は冗談から買つたゴム製の湯タンポだつたが、漢口の宿舎で、計らず同室したM中尉に、珍らしいものでせうと進呈して來たのだが、その後の便りに、この湯タンボが活躍してゐるのだから、あながち無駄な買物ではなかつたと、私は思つてゐる。

て赤ん坊の肌を知りませんが、その後、このゴム製の湯タンボは、大變な人氣になつて、あつちこつちと轉々とし、赤ん坊から成長して、乙女の肌のやうだなどと珍重されてゐました。もつとも、貴君の話によれば、南京のダンサー達が持つてゐるのだから、さう思ふのも當然でせう。しかし、この湯タンボが前線で活躍したと聞いたら、貴君も驚かれると思ひます。今度の作戦で、迫撃砲が炸裂して、私の水筒が身代りになつてくれましたが、どうにも代りがないので、ふと思ひ出して、あの小さな湯タンボを水筒代りに使用したのでした。腰に紐でくゝつて歩いてゐたのですが、兵隊達は冗談に、隊長、大丈夫ですか、大切にして下さいよ、などと云つて居りました。今は、もう湯タンボの時節でもありませんが、宿舎の壁に大切にぶら下げてあります。だが、あの薄桃色も大分に色褪せたので南京へ出張してゐる同僚に、代り品を買つて來るやうに頼んであります。

私も別に一箇買つて、内地へ持つて歸つて來たが、私の奏淮の想ひ出を新にしてくれるのは、このゴム製の湯タンボだけなのである。

鶴鳴寺の鐘

—故酒井直次將軍を偲びて—

城壁の表情の美しさは、北京とは異つた意味で、私を魅了してしまつた。南京は郊外的都市といふ言葉があるならば、もつとも相應しい表現だと思はれる。

野と丘、沼澤と運河、泥小屋と近代建築、靜謐と雜踏、統一と無秩序が、大きな城壁に圍繞されてゐて、それらのものを、城壁は冷然と眺めてゐる。

金陵と稱し、江寧となり、南京と呼ぶに至る幾つかの時代を見て來た城壁は、そのまゝ支那の歴史でもあらう。幾つかの戰争が、城壁の上で戦はれ、最後の南京攻略戦では、近代兵器の洗禮までうけたのである。

「鶴鳴寺といふのは、この邊ぢやないんですか」

「玄武門の右の方に丘陵が見えるでせう。あの近所なのだが……」

走る乗合自動車の中から、私は延び上つて見たが、大きな建物と、青々とした野菜畑との間から、丘の姿は見えなかつた。

「君は鶴鳴寺の鐘を聞いたことがある?」

「さあ、少しも気がつかないが」

瀬戸口君も聞いてゐないらしい。さういへば、日本の街などでも、この頃では鐘の音などといふものは、街の噪音に消されてしまふのか、全く聞かれなくなつてゐる。

鶴鳴寺の鐘も、南京の街の噪音に消されて聞えないものであらう。南京の街の名所といふものの歴史を調べて見ると、齊、陳、隨などのといふ我々とは縁の遠い時代名が出て来る。

鶴鳴寺も齊の時代に、既に現存してゐたのだから、相當に古いものなのであらう。

「明日、漢口へ行くんだが、僕はこのまゝ南京にゐたくなつた」

「だが、ちよつと、漢口へは簡単に行かれないので、行つてをいた方がいいよ」

總軍司令部前で乗合自動車を降りて、私達は酒井部隊本部を探しながら、中山路シャーランを下關

の方へと歩いてゐた。廣い鋪装道路の上を、冷たい晚秋の風が、砂埃りを卷いて吹いて來る。

酒井部隊本部は、道路の右側に、以前は何に使用されてゐたものなのか、豪壯な支那風とも、歐風ともつかぬ赤煉瓦の建物の中にあつた。

衛兵所で名刺を渡して案内を乞ふたのだが、例へ紹介状を持つてゐるにしても、酒井閣下にお目にかかるとは思つてゐなかつた。たゞ、折角の紹介状を、黙つて持つて歸る非禮がしたくなかつたので、明日は漢口へ出發することになつてゐたから、副官の方にお訪ねした旨を傳へ、紹介状をお渡しして歸へらうと思つて、お訪ねしたのだつた。

衛兵司令は、私と瀬戸口君の名刺を見ると、直ぐに副官の許へ案内するやうにと、當番の兵隊に命じた。

私達は兵隊の後に従つて、大きな石の階段を、極彩色をした大きな圓柱や、朱色の天井などを眺めながら導かれて行つた。二階の大きな廊下に、菊の鉢植が置いてあつて、見事な大輪の花を咲かしてゐるのが、鮮やかで心よい感じであつた。

「お待たせしました。閣下は只今御面談中ですが、暫く御待ち下さい」

副官の方が、直ぐに出て来られて、丁寧な挨拶である。

「實は内地から御紹介状を頂いて來ましたので、一寸御挨拶だけ申上ようと思つて伺つたのですが、御多忙中の御様子ですから、名刺だけ置いて失禮します」

「さうですか。しかし、一寸お待ち下さい」

「いいえ、もうこれで失禮しますから……」

「しかし、それでは……」

と、私達が歸らうとするのを、押し止めた副官は、奥の部隊長室に、私達の名刺と紹介状を持つて行つて、閣下の御都合を伺つて來ると言はれるのである。

私達は副官室に通されて、待たざるを得なくなつた。副官室の窓から見える後庭の樹々は、秋色を帶びてゐた美しかつた。

「鶴鳴寺のある丘は見えないかな」

「さあ、何うだか。よほど、鶴鳴寺が気になるね」

瀬戸口君は、私が鶴鳴寺のことばかり言ふのが不思議であるらしい。私としても、別に鶴鳴寺を問題にする理由もないのだが、どういふ聯想からか、鶴鳴寺の名が口に出てくるのだつた。

「是非お目にかかると言はれてゐますから、暫く御待ち下さい」

私達は思ひがけない閣下からの返事に、全く恐縮してしまつたのである。

「あちらの應接間でお待ち下さい」

私達は廣い廊下を横切つて、部隊長室の隣の應接間に通されたのである。

「入ります」

扉口で、明瞭な聲で斷はると、一人兵士がお茶も持つて来て、私達の前に置いて出て行くのである。

軍隊の経験のある瀬戸口君は、かういふ事に馴れてゐるので、別に驚きもしないが、私のやうに軍隊の経験のない人間には、軍隊の禮儀正しいキビキビした一舉一動は、物珍らしく驚異であるとともに、潔よい美しさを感じるのである。

部隊長室との間の扉を掛して、酒井閣下が氣軽く、姿を見せられた。

「まあ、掛け給へ。立つてゐては話も出来ないからね。さア、掛け給へ」

格服の堂々たる閣下は、眼鏡の奥に穏やかな微笑を浮べて、固くなつて立ち上つた私達に、椅子を勧められるのである。そして、自然に心のほぐれる様な態度で、閣下と向ひ合つて腰を下ろすやうな雰囲氣を、私達にもたせられるのである。

「いや、よく来てくださいました。君の家は片瀬ですね。彼處は私にも懐しい土地でしてね。乃木將軍が學習院の院長をして居られた時代に、私なども夏になると水泳に連れて行かれたものです。今はすいぶん變つたでせうなあ」

「はあ。乃木將軍が水泳に見えられた場所には、立派な銅像が建つて居ります」

——私は、今、その時のことと想ひ出して書いてゐるのだが、初対面の私達に對して、自然に寬いだ氣持を與へられた酒井閣下の溫容を、到底ここに書き現せられないのを、私は心から遺憾に思ふのである。

私達は、多忙な閣下の時間を、相當に割いたやうである。

「大變にお邪魔をいたしました」

私達は席を起つた。

「まだいいだらう。話をして行き給へ。君は暫く南京に滯在しますか」

「實は、前線へ出て見たいと思ひまして……」

「それなら、明日、金壇の方へ視察に行くのだが……」

私は思はず「失敗つた」と、口に出してしまつて、周章て頭を搔いたのだつた。

「失禮いたしました。實は明日、漢口へ行くことに決つたばかりなので……」

閣下は、私の慌てた様子に、微笑しながら、

「それは是非行つておいでなさい。私も行つたことがあります、漢口はいい街ですよ」

——今にして想へば、私はなんといふ迂闊な男だつたのだらう。

酒井閣下は、武漢攻略戦では、大別山々脈の峻嶮を突破され、功三級の金鵄勳章を賜られた榮譽ある將軍だつたのである。閣下の穏やかな溫容は、私に閣下が、さうした猛將軍であるといふ印象を與へなかつたのである。

酒井閣下は、私達が辭し去らうとすると、わざわざ階段の所まで送つて來られた。

「漢口から歸りましたら、又お邪魔に伺ひます」

「遠慮なく來て下さい」

私達は、お禮を述べて、酒井部隊本部を出たのだが、瀬戸口君も私も、

「恐縮したよ。春風駘蕩とした氣持だね」

「なんか親父に逢つたやうな氣がするよ」

と、異口同音に語り合つたのだつた。

——酒井閣下にお目にかゝつた最初の日のことが、私には強い印象となつて、今でもはつきりと想ひ出せるのである。

私は一枚の新聞を、机の前に擴げてゐる。

「酒井兵團長戰死」の活字が、大きく焼きつくやうに紙面をにじませてゐる。

——雨期を迎へた江南の戰野に展開された浙贛作戰の、主力部隊として出動した酒井部

隊は、五月十六日行動を開始するや、敵第三戰區の顧祝同麾下の重慶軍を猛進撃破して、廿七日には早くも蘭谿北方地區に進撃、蘭谿周邊の敵六十三師の掃蕩戰が開始されるや、酒井兵團長は陣頭に騎を進めて、蘭谿北方の三叉路を通過されんとした瞬間、兵團長の乗馬が、敵が退却にあたつて埋設した地雷に觸れ、轟然たる爆音とともに横倒しとなり、右前肢、頭部及腹部を粉碎して即死してしまつたのである。

馬上の兵團長の長靴はひき裂れ、鮮血は淋漓として兩脚を染め、軍刀はくの字形にへし曲つて、三十米も側方に飛んだ。幕僚や軍醫は直ちに駆け寄る。

「參謀長は兵團長代理！ 部隊は直ちに前進！」

豪毅な酒井兵團長は、重傷の中から元氣な聲で命令をされる。自分の手當よりも、部隊の行動に明確な措置を與へたのである。左脚脛部と右足前部に重傷を負つてゐられる。

軍醫は手早く治療に努め、急造の擔架で、蘭谿北方八〇〇米の二軒家へ運び込み、再び手當を加へる。

軍醫は衰弱して行かれる兵團長の身を案じて、輸血の必要を認め、兵團長に血液型を尋

ねたが、

「俺は大切な部下の血を貰はうとは思はぬ」

と、断乎として、輸血を拒絶されたのである。

一刻一刻と迫る死期を悟られたものか、當番兵に「長い間有難う」と禮の言葉を述べ、軍醫が、手當や注射を終る度びに「有難う、有難う」と、幾度となく禮を述べられるのであつた。

私は眼前に、酒井將軍の温容をさまざまと想ひ浮べて、新聞から眼が離せないのである。側近に在つた幕僚や、軍醫や、當番兵の心が、私にも尋々と強く感じられる。それにしてもなんといふ謙虚な將軍の心であらう。死に臨んでもまで部下に禮を述べられるとは――。

――酒井兵團長の日常生活は、素朴と眞面目の二字に盡きてゐる。そして、その素朴さは人柄の良さから来る街ひのないもので、その眞面目さには少しの固苦しさもなかつた。

人に對しては、實に物優しく鄭重で、部下の誰とでも親しく談笑し、在任中たゞの一度も過失を聲を荒げて叱つたことがなかつた。

人觸りのよい、物腰の低い將軍だつたが、派手な交際は一切避けてゐられたらしく、「俺は自分の仕事をしてゐればいいのだ。俺が出なくとも宴會は潰れはしないだらう」と、在任中宴會などには顔を出さなかつた。

新聞の追憶の記事は、私に新しく將軍の風格を偲ばせるのである。

「酒井閣下は乃木將軍を欽慕してゐられました。閣下の言行の節々に、そのことが窺はれました」

將軍が、陸軍通信學校 校長をしてゐられた時代の部下だつたN中佐が、私に語るのである。

「酒井閣下は、陸軍部内切つての暗號通信の權威でした。『暗號の神様』と言つても過言ではないでせう」

將軍は優れた頭脳を所持してゐられたのである。南京では、副官を相手に鳥獣を戦はせたり、宿舎の庭に、軍務の餘暇には自ら跣足になつて、茄子や胡瓜の栽培をして楽しんでゐられたが、その書齋には、讀破された數百冊の、各方面に及ぶ書籍が、堆たかく積まれてあつて、將軍の並々ならぬ勉強家であつたことを物語つてゐたさうである。

將軍は、徐州殲滅戦には開封に進撃し、敵の退路を遮断する偉勳を立て、武漢攻略戦では、大別山々系突破の勇猛を謳はれ、漢水作戦に臨むや、その疾風迅雷の猛進撃は『酒井追撃隊』の名で、敵をして畏怖せしめ、軍司令官から感謝を受けられてゐるのである。

將軍の閱歴を知つた今日でも、酒井閣下が歴戦の猛將軍であつたとは、想像がつかないほど、物柔かな印象を、私に與へられたのである。

さういへば、將軍をお訪ねした際に示された副官の方の鄭重な態度にも、衛兵所の兵隊達の動作にも、將軍の床しい人格が、大きく浸透してゐたことが、今にして推察されるのである。

——家庭の父として子供のことには細かい氣を配り、厳格に子供を躾つけた反面、子供

の病氣の時などは繪本を買つて與へるなど、優しい一面もあり、戰線から子供達への便りは、いつも教訓につぐ教訓でした。趣味といへば讀書と押花でした。

と、遺族の方のお話が、新聞に記載されてゐる。

漸釐の戰場でも、數多くの押花の蒐集が残されてゐたといふ。

押花——とは、まことに床しい武人の風懷である。砲煙彈雨の陣頭に駒を進めながら、野に咲く花に眼をとどめる。

私には古の武將の面影が偲ばれるのである。

ここに一葉の寫真がある。

夏草茂る中支の戰野を、泥濘を衝き、猛暑を冒して猛進撃をつゞけて來たのであらう。

戰陣鬚は延び、戎衣は汗と泥濘に汚れてはゐるが、逞しい鬪志が、どの頬にも鋭く充ち溢れてゐる一隊が、小高い丘の上に休止してゐるのである。

一隊の中央に、鐵兜の軍裝も凜々しく、眞白な遺骨箱を、しつかと胸にいだいてゐる將

校の姿がある。戦塵に汚れた横顔の、堅く引き緊つた頬のあたりに、言ひやうのない悲痛な翳がうかゞはれるのである。

昭和十七年五月二十八日

故酒井兵团長の遺骸は、蘭谿城内に移つし、火葬にふされたが、護國の英靈となつた兵团長は、副官の胸に抱かれて、衢州、玉山、上饒と『無言の指揮』をとりつゝ、頑敵を猛進猛追、浙贛線打通作戦に赫々たる武勳を樹てた。

新聞は壯烈な戦闘の報道を打電してゐる。この寫眞は、その進撃の途上の報道寫眞なものである。地圖を擴げて見るまでもなく、杭州と南昌とを繼ぐ浙贛線は、重慶の第三戰區であり、又アメリカ空軍の對日空襲の根據地と化してゐただけに、この打通作戦の輝しき戰果は、重大な意義をもつてゐるのである。

しかも、この作戦の途上に、畏慕する酒井直次中將閣下が戦死をされたのである。私の

拙き一文は、殘念ながら將軍の面影の片鱗すらも寫し得ない。たゞ、將軍への、私の追慕の念が、敢えてこの一文を草さしめたのである。
謹んで酒井將軍の英靈に、心からの黙禱を捧げるのみである。

蘇
州
の
秋

蘇州の宿

蘇州へ行かうとは、私の計画の中にはなかつた。南京の總軍報道部で、棟田博君に逢つたら、

「蘇州へ行かなくちや。蘇州はいゝよ」

と、私が名所舊蹟などに興味がないと主張しても、彼は口を極めて、私に蘇州行きを勧めるのである。

それに、私の目的地である漢口へは、急には便船もなく、飛行機の都合もつかなかつたし、徒らに荏苒と南京で日を送つてゐても仕方がなかたので、私は何の成算もなく、蘇州行の汽車に乗つたのだが、蘇州車站を出て、驛前の埃りつぼい索漠とした風景を見た時は、暫くの間、呆然とさせられたのだつた。

蘇州といふと、私には直ぐに寒山寺、虎邱の名とともに、張繼の石刷の詩が想ひ出され

るのだつた。

月落烏啼霜滿天 江楓漁火對愁眼
姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船

この詩からも、又地圖を見ても、蘇州が水の都であることは、充分に理解されるし、水都蘇州の名は、餘りにも有名なのだが、この停車場前の風景には、水都蘇州の面影すらも見えないのである。日本の田舎なぞの、田圃の中にぽつんと建つてゐる停車場そのまゝで何處に人口三十萬からの都會があるのか、一人旅の私には見當もつかなかつた。

心細い話である。私は驛前の埃りつぼい廣場を歩きながら、南京へこのまゝ引き返さうか、それとも上海へ行つてみようかなどと考へてゐるところへ、一臺の乗合自動車が濛々と砂埃りをたてて走つて來たので、文字板に蘇州市内行とあるのを確め、心を決して乗り込んだのだつた。

満員の乗合自動車なので、窓から外を窺ふことも出来ないし、僅かに人の肩越しに、城内らしき所を走つてゐるとしか分らなかつた。

「觀前街、觀前街」

女車掌の支那語が、私の手帳に振假名つきで書いてある觀前街の名を呼んでゐるのを聞いて、乗合自動車から降りたのだが、私は文字通りに放り出されたといふ感じがしたのである。

觀前街は、乗合自動車が一臺通れば、完全に街を埋めてしまふやうな狭い街だつた。街路にはごろた石が敷きつめられてゐて、支那人が右往左往してゐた。——後になつて知つたのだが、この狭い街路といひ、どきつい裝飾の旗や幟の並んでゐる光景は、京都の新京極に時代をつけたやうな歡樂街だつたのである。

(なるほど、觀前街だ)

私は勇を鼓して、雜踏する街を、支那人達と肩をならべて、報道部の河田君の書いてくれた手製の地圖を便りに、大丸百貨店——日本の大丸の支店——を探したのだつた。

大丸百貨店は、蘇州の歡樂街の中央に、白亞の四階建築の姿を見せてゐて、大きな圓形の中に大の字の商標が、私にほツとした感じを與へてくれた。私の訪ねようとする放送局の事務所も、この建物の中にある。河田君の地圖に明記してあるのだから間違ひはない。だが、訪ねる放送局の岩井氏は病氣缺勤だつたので、私は放送局の人々に、特務機關への案内を頼んだのだつた。

特務機關長の公館へ行く途中、洋車は甃石の敷かれて陥路をぬけると、今までの雜踏とは、全く懸け離れた岑寂とした通りに出た。支那家屋の厚い土壁が、幾重にも重なり合つて喧噪を遮切り、雜音を防いでゐるのであらう。まだ、左程遠くは來てゐないのであつて、不思議な氣がして來るのだつた。

公館は厚い石壁に囲まれて、芝生の色の美しい洋館で、ボーチに並べられてゐる菊の花が鮮やかである。

蘇州へ行かう——と決心したのは、棟田君の勧誘からだつたが、それでも私は寒山寺を見やうとも、虎邱眺めやうとも思つてはゐなかつた。蘇州へ來た私の唯一の目的は、や

うやく第一期工作の終つた清郷工作の片鱗でも見られれば、といふことだつた。

清郷工作といふのは、一定の地を區割して、周囲に竹矢來を組み、鐵條網を張りめぐらし、その區域内から凡ゆる敵性を驅逐し、和平清郷地區を建設する。そして、一區づゝの大きな隣組地區を作つて行かうといふのである。

例へて言ふならば、一地區を中心に圓を描き、その圓と他の圓とが、次第に圓を拡大して行つて、終局には廣大なる清郷地區が建設されるのである。

特務機關長から清郷工作の現況を拜聽して、特務機關に勤務する宇佐美練昌氏に連れられて、再び放送局へ歸つて來た。

「大丸の賣子には、蘇州美人が集つてゐるんですよ」

さういふ話だつたが、私はまだ店内を見てゐなかつたから、分らない。

「ところで、今夜は何處に泊ります」

「明日の朝は早いのだから、この近所のホテルへ泊りませう」

「ホテルといつても、支那のホテルばかりですが、まあ話の種になりますから、泊つてご

らんなさい」

明朝、私は宇佐美君の案内で、蘇州城外の清郷地區を、見學に行くことになつてゐたので、遠い日本租界の日本旅館へ行くのも、いさか億劫だつたから、支那人の經營するホテルに泊る決心をしたのだつた。

支那の旅館は、吳宮飯店、樂鄉飯店、皇后飯店などと、いづれも金殿玉樓を偲ばせる堂堂たる名稱をもつてゐる。これらの飯店が觀前街の大丸を中心に櫛比してゐるのである。

「あれが吳宮で、こつち側のが樂鄉ですよ」

屋上から見た飯店の、黃色い壁をした建物や、白亞の建物は、如何にも堂々たる輪奐を見せてゐる。

飯店の前へ行くと、中國の巡警が嚴めしい様子で、拳銃などを下げて立つてゐた。

私は樂鄉飯店といふのに一泊することになつた。日本流に暢氣に、寢衣などは貸してくれるものと考へてゐたが、これは大きな間違ひだつた。

部屋は支那式の大きな寢臺と、圓卓子に椅子が三脚ばかり、その他に西洋式の化粧鏡の

ついた臺が一つだけで、裝飾といふものは全く見當らなかつた。食堂などといふものは、いくら探してもなささうである。だが、何よりも先に、寝衣の心配をしなければならないので、私は大丸へ行つて、パジヤマでも探さうと思つて、ぶらりと飯店を出たのだつた。大丸は、周囲の古びて雑然とした支那の建築の中では、なほさら清潔な感じがするのである。宇佐美君の話の通りに、綺麗な賣子がそろつてゐるらしい。だが、私などには蘇州美人の賣子などよりは、支那人の間にまじつて、凜々しく立働いてゐる日本の女店員の姿が強く印象された。

それは日本女性であるといふ自覺が、彼女達の顔に、精神の馴い美しさを現はしてゐるのであらう。

私はパジヤマを買ふと、包装紙にくるんだのを抱へて、賑やかに雜踏する街の中へ出了た。

觀前街の賑やかさは、一直線の斂石路の一町の間だけで、そこから一步外は、薄暗い陋屋が並んでゐるに過ぎない。それだけに、この通りの賑やかさは、他の通りに比較する

ことも出来ないほどの繁華さなのである。街全體からいふと、日本の銀座や京極や道頓堀とは、明るさや賑やかさから云つても、全く問題にはならないのだが、この通り以外は暗いので、此所が一層明るく見えるのであらう。

私は人混みに揉まれながら、明るい場所を撰んで歩いてゐるうちに、賑やかな場所の一角所だけが、奇妙に静かな場所へ出た。既に陽は落ちてしまつて、闇が街をつゝんでゐたが、星明りとでもいふべき微かな明るさの中に、大きな伽藍が、街の上に蔽ひかぶさるやうに見えてゐるのである。

門を仰ぐと、玄妙觀と書かれた扁額の文字が微かに讀まれた。山門の裡の境内には、大ききな銅の燈籠の如きものが見られて、人影が蠢めいてゐる。

「あの玄妙觀といふのは、お寺なんですかね」

翌朝、私は宇佐美君に訊いたのだつた。

「あれは蘇州名所の一つになつてゐるのですよ。道教の本山で、さし當り淺草の觀音様と

いふところでせう。觀前街は六區といふことになりますね」

淺草ツ兒の宇佐美君には、直ぐに淺草が頭に浮んでくるのであらう。さうした説明が、私にも、最も鮮明に心に響いて來るのである。

さういへば、觀前街には、茶館や活動館や芝居小屋が軒をつらねてゐて、銅羅の音や妖し氣な歌聲などが、小屋の内部から聞えてゐた。この賑やかな通りから外へは、流石の私も踏み出せなかつた。明朝までは、訪ねるべき人もなく、訪ねるべき場所もないので、まだ時間は早やかつたが、飯店へ歸つて寝るより仕方がなかつた。

飯店は外觀の立派さに比較して、内部のがさつさには言葉もなかつた。これは全く安普請の急造アパートなのである。ホテルの禮儀などといふものは、支那の旅館では通用をしないらしい。給仕人は板張りの廊下を、鼻唄まじりで飛んで歩くし、一種の奇妙なさわめきが終夜つゞいてゐるのである。

部屋の扉には、いくら探しても鍵は見當らないし、何の用があるのか、給仕人が無遠慮に、断りもなく幾度も扉を開けては闖入して來るのである。私はこの時ほど、言葉の分ら

ないのに業を煮やしたことはない。

私は遂ひに一策を案じて、椅子を扉に押しつけて、無禮な給仕人の闖入を防止することに成功した。給仕人は、それでも二三度もやつて来て、扉をごとごと言はせてゐたが、終ひには諦めたのか、扉を押すこともなくなつた。しかし、それでも私は曉方まで一睡もできなかつたのである。

何故なら、この飯店の客は、徹宵起きてゐるのか、周囲の部屋で、麻雀をしてゐるらしい牌の音が、夜の更けるに従つて耳に響き、艶かしい嬌聲が傳はつてくるし、胡弓の音までがして來るのである。それに、支那式寢臺には、薄い掛蒲團が一枚あるだけなので、寒くて寝られなかつたのである。

それでも、南京虫の襲撃を受けなかつただけが、幸運だつたのかもしれない。

「どうです、昨夜は寝られましたか」

翌朝、宇佐美君に逢ふと、早速にやにや笑ひながら訊くのである。

「支那ホテルには驚きましたよ」

遂一報告をすると、宇佐美君は笑ひながら説明してくれた。

「支那のホテルといふのは、料理屋兼待合なのですよ。支那人はホテルに陣取つて、料理を取り寄せ、藝者を呼んで、麻雀をやつたり、歌を唄つたりして遊ぶんですね。何もいい経験だと思つて、君が支那のホテルに泊るのを止めなかつたんですが、扉を椅子で押へたのは傑作ですよ。給仕人は君に姑娘の注文を訊きに訪れたんですよ」

「姑娘……」

言語不通といふことは、全く不便なものである。その結果、僕は蘇州美人の本場を訪れて、美人にめぐり逢へなかつたのである。

北京の前門街の傾斜の巷で、支那藝者の郷里を訊くと、南方系の女は、異口同音に蘇州か揚州と答へるが、蘇州と楊州とは、支那の美人の產地なのださうである。

私の泊つた樂鄉飯店などは、それでも幾分歐風を加味してゐると思はれるが、純粹の支那の旅館といふのは、果してどんな設備がしてあるのだらう。朝になると、阿媽が洗面器に湯を入れて持つて來た。顔を洗ふのも、含嗽をするのも、この一杯のお湯だけなのであ

る。含嗽をした水は、化粧棚の下に置いてある銅製の啖壺にするものらしい。

「便所には閉口してしまつて、ここへ來るまで我慢をしてゐました」

「阿媽か給仕人に、馬桶^{*}といへばいいのですよ。丸い桶のやうな漆塗りの綺麗なもので、支那人は用を足すと、洗つて置くのですね。黒い漆塗りの馬桶に、綺麗な花模様を描いた物を、日本人が間違へて持つて歸つて、花瓶の代りにしたなぞといふ話がありますよ」
いづれにしても、支那式の飯店は、その夜一晩で、私は完全に辟易てしまひ、翌晩は宇佐美君の宿舎へ闖入して、やうやく昨夜の不眠を補ぎなつた仕末だつた。私なぞは、いくら大言壯語してみても、結局は日本式でなければ承知できないのであらう。
支那家屋に疊を敷いて暮してゐる日本人を、大陸の隨所で發見したが、日本人と疊とは永久に離れられないものらしい。

蘇州での第一夜は、私にとつては寝られぬ一夜だつたのである。

「夜半鐘聲客船に到るではなく、夜半驛音客室に到つた譯ですよ」

私は睡氣をふり拂ふやうに、そんな冗談を言つて笑つたのだつた。

陸墓鎮にて

自動車は蘇州城外への鋪石路を、狭い通りに警笛を響かせて駆つてゐる。街路は、どんな小さな露路にでも、凳が敷きつめられてゐて、古色蒼然たる家々の檐の傾いてゐる様子などにも、古都らしい面影が見られるのである。

自動車の前窓に、苔むした葛かづらの枯葉に蔽はれた古塔が、青い空の中へ融けこんでゐるのが見えた。蘇州の街の城壁は、南京の城壁ほどの雄勁さを持つてゐないが、城壁の表情は、矢張り數千年の歴史を物語る一種のさびを見せてゐる。

「今朝になつて、始めて蘇州らしい感じがして來ましたよ」

「さうでせう。なにしろ春秋時代の吳の國都ですからね。先刻通つた公園のやうな所なんかも、往時には王宮があつた所なのですよ。蘇州も、黃巾の亂だとか、長髮賊の亂などの時に、都市の大部分を焼失してゐますから、現在の蘇州にあるものは、古色蒼然たる姿を

してゐても、年代的には新しいものなのでせう」

春秋時代といふと、越王勾踐と吳王夫差とが、その頃、姑蘇と稱したこの蘇州で、雌雄を決した所である。越王勾踐といへば、直ぐに范蠡の名を思ひ出すほど、私達には歴史からばかりではなく、なにか近しいものを感ずるのである。

日本の文化と支那の文化とは、さうした意味からも、もつと親近感があつてもいいのではあるまい。それを行々も、又支那人も忘れてしまつてゐるらしい。正直にいふと、私も大陸の土を踏むまでは、すつかり忘れてしまつてゐたのである。

城門をぬけると、碧い水を滿々と湛えた水路が縦横に流れてゐて、水郷蘇州が、始めて私の前に水都らしい姿を見せて來たのである。水路は地平線の彼方までつゞく、廣々とした江南の平野を貫き、深々たる音をたて、時には漫々たる姿で、流れるともなく、濶むともなく岸を洗つてゐる。

寂然たる古塔が水に影を宿し、水路を往く戎克の帆が、蒼空を流れる雲のやうな趣を見せてゐて、收穫を終へた沃野には、冬菜の水々しい青さが際立つてゐた。

自動車は長閑かな田園の中を、太く貫いてゐるバス道路に沿つて進んで行くのである。

「ここらは、もう清郷地区なのです」

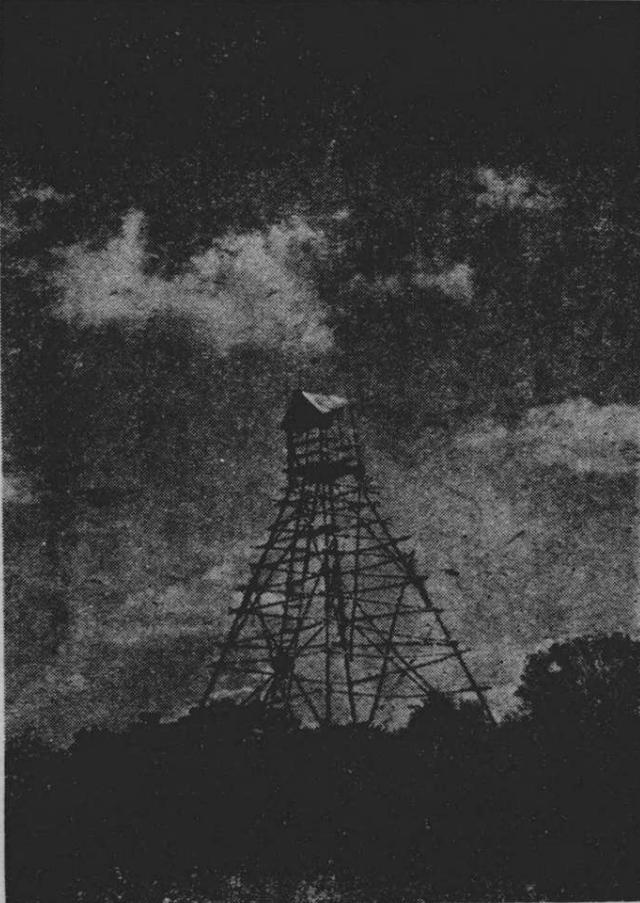
蘇州の城内を出ると、直ぐ視野の彼方に、問題の竹矢來が見えてゐたが、竹矢來は廣い耕地のつゞく限り、蜿蜒と長蛇の如くに續いてゐた。

竹矢來の一角には、柵が組んであつて、その上に監視所が出来てゐる。

特務機關で、清郷工作に對する豫備知識を受けられてゐたのだが、その實況を見るまでは、竹矢來がどういふ風に利用されてゐるのか、何うしても肯づけなかつた。

竹矢來は、簡単に書くと、一部落、一部落を大きな圓で囲んで、部落内の便衣隊や匪賊なぞの、敵性分子を武力をもつて掃蕩すると共に、部落の治安を確保するためのものなものである。

北支に於ける治安強化運動が、線によつて表現され、鐵道線に沿つた左右の地區の治安を順次に擴大して、帶狀となし、最後に數本の太い帶と帶を接觸させる方法であるとすれば、中支の清郷工作は、水に投じられた數個の石が、幾つかの小さな波紋を描いて、最後



清郷地作工の監視柵

自動車は長閑かな田圃の中を、太く貫いてゐるバス道路に沿つて進んで行くのである。

「ここらは、もう清郷地区なのです」

蘇州の城内を出ると、直ぐ視野の彼方に、問題の竹矢來が見えてゐたが、竹矢來は廣い

耕地のつゞく限り、蜿蜒と長蛇の如くに續いてゐた。

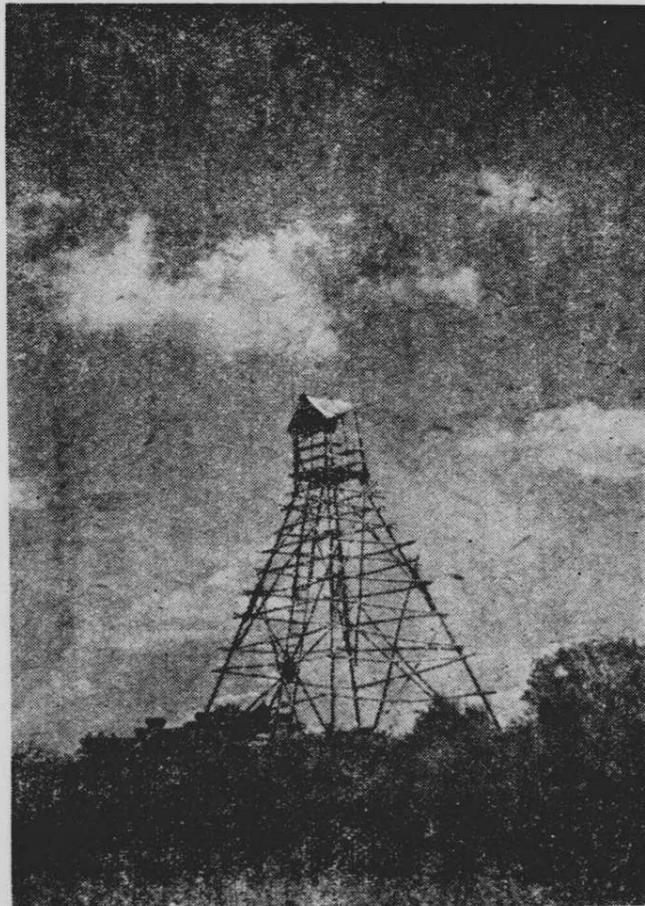
竹矢來の一角には、櫓が組んであつて、その上に監視所が出来てゐる。

特務機關で、清郷工作に對する豫備知識を授けられてゐたのだが、その實況を見るまで

は、竹矢來がどういふ風に利用されてゐるのか、何うしても肯づけなかつた。

竹矢來は、簡単に書くと、一部落、一部落を大きな圓で囲んで、部落内の便衣隊や匪賊などの、敵性分子を武力をもつて掃蕩すると共に、部落の治安を確保するためのものなものである。

北支に於ける治安強化運動が、線によつて表現され、鐵道線に沿つた左右の地區の治安を順次に擴大して、帶状となし、最後に數本の太い帶と帶を接觸させる方法であるとすれば、中支の清郷工作は、水に投じられた數個の石が、幾つかの小さな波紋を描いて、最後



櫓 観監の區地作工郷清

には大きく融け合ふ如き方法であるといへるだらう。

——しかし、この廣大な江南の沃野に、何處まで竹矢來を組んで行かうといふのであらうか。こんな方法で、果して清郷工作が出来るのか。

われわれは直ぐに、そんな風な疑問をいだきやすい。だが、これは強力な實行力をもつた意志の力の前には、脆弱な頭の中ばかりの妄想に過ぎないことを、事實は嚴然と見せてゐるのである。

——竹矢來などと笑ふかも知れないが、この竹矢來の中が清郷地區で、この中に住む民衆は爾後和平戰士として責任があると同時に、和平戰士としての資格を持つてゐるので、といふ意識を、この竹矢來が民衆の心に植えつけてゐる。このことが、如何に大きな效果を上げてゐるかは、竹矢來を單なる封鎖線だと考へてゐると間違つて来る。

——清郷工作が終つて、日本軍が引き揚げたら、再び共產軍が歸つて来て、民衆を虐待しはしないかと考へるかもしまんが、清郷工作は日支合作に據るもので、民衆に自衛の觀念を保持させ、新中國建設といふ理念を徹底させて行くのだ。

第一線の戦闘部隊とは異なる地味な仕事に、東亞の將來を目指して邁進してゐる現地の軍人達の言葉は、われわれに大きな教訓を與へる。

清鄉工作は、蘇州、常熟、昆山、太倉の第一期工作が完了したばかりだつたが、昨日まで共産系の新四軍（國民革命軍新編第四軍）が暗躍してゐた江南の沃野は、既に和平色を漲らしてゐて、乗合自動車が、これらの各地間を疾駆してゐるのである。

それまでの新四軍の活躍は凄まじかつたらしい。清鄉工作が開始されると、全村共產化したやうな村では、村民が一人残らず逃げ出してしまつた個所もある。だが、工作後一ヶ月位したら民心も安定し、清鄉工作の何たるかを理解して來たらしく、最近では共產匪の所在を道報して來る者もあるといふ話だつた。

新四軍は、今事變が勃發後に編成されたもので、日本軍が上海、南京、漢口を占領し、重慶軍が奥地へ遁走するや、得意の宣傳力と組織力を發揮して、江南一帯に根強い勢力を扶植してゐたのである。

その後、蔣介石は新四軍の勢力の擴大を怖れて解散を命じたのだが、新四軍は命令を無

視して再建新四軍を編成し、依然として猛烈な暗躍をつゞけてゐたのである。だが、再建新四軍の暗躍も、日本軍と新中國の清鄉部隊合作の清鄉工作が開始されるとともに、次第に驅逐されて、彼等の暗躍の餘地は、もう殆んど無くなりかゝつてゐる状況だつた。

今後も清鄉工作は二期、三期とつゞけられて行くのである。従つて、この工作の擴大強化こそが、新中國の基礎を強固にするといへる。それだけに、中國側も秘書長李士群を江蘇省政府主席に任命して、清鄉工作の第一線に立たせてゐるのである。

「檢問所へ來ましたよ」

アンペラ葺の番小屋のやうな檢問所には、日本軍の兵士と中國側の軍警とが、鋭い監視の眼を光らしてゐた。

檢問所は封鎖地区が外部との交通口を開いてゐるところで、通行人は住民證、旅行證、身分證明書などの取調べを受けなければならない。檢問所の下のクリークにも、^{ジョンソン} 戎克や船が、幾艘も檢問を受けるために繋がれてゐる。通行人の檢問は、新四軍のスペイの潜入を防ぐとともに、清鄉地區から敵地區への物資の流動を、嚴重に監視してゐるのである。

検問所の前に並んでゐる農民達は、もうすつかり馴れてゐるらしく、順序よく順番を待つてゐる。

私達も自動車を降りて、警備兵に断つて通つた。

検問所を通り抜けると、江南の沃野は、さらに廣々とした眺望を見せてゐた。自動車は沃野を貫いて、常熟へ向ふバスの道路を走りつゝける。

右手に、一郭をなした村落が見えて來た。

「あれが陸墓鎮です」

私達は、自動車を降りて、バスの道路から細い田圃路を陸墓鎮へと歩いて行つた。

陸墓鎮は、村の中央を、河底の礫まで見える清冽な小川が、淙々と音をたててゐるのを挟んで、ひつそりと厚い泥壁に囲まれた農家が並んでゐる村落だつた。

「ここには、中國側の清鄉工作に對する諸機關があるのです」

だが、活潑な清鄉工作の本部があるとも見えない静かな村落である。
どこかで、長閑かな牛の鳴聲がする。狭い村の路にも、凳が敷かれてゐる。

私はアンペラで囲まれた一軒の小屋、と云つた方が適當な家へ案内された。薄暗い部屋には、二三脚の卓子と椅子が土間に置かれてゐるだけで、裝飾といへば、この地區一帯の地圖が、アンペラの壁に貼りつけられてゐて、部屋の様子を引き緊めてゐた。

「Kです」

血色のよい、穏やかな面持ちの一人の中尉が、机の前に立つて、自ら名乗つた。K中尉の名刺を見ると、清鄉地區特務機關、吳縣連絡官と二行に刷られてゐた。

部屋の裏側を、小川が流れてゐるらしく、水音がする。

「K中尉は支那語の達人でしてね。支那人がびっくりするんですよ。自分達よりも上手だと言つてね」

「いや、そんなことはありませんよ」

宇佐美君の氣輕な紹介に、この温厚な中尉は苦笑を洩すのである。だが、話が清鄉工作のことになると、穏やかな瞳に、燃ゆるやうな光りがきらめいて、若々しい情熱が、その頬のあたりに浮んで來るのである。

K中尉の話を聞いてみると、清郷工作が如何に地味で、苦しい仕事であるかが察せられる。竹矢來と鐵條網で囲繞された村落の内部だけでも、從來、新四軍の巧妙な宣傳によつて、悪化してゐた住民の心を、如何に把握しなければならぬかといふ苦心は、目に見えないだけに、並大抵のものではなささうである。

「村の様子を見て頂きませう。中國側の諸機關へも御案内します」

K中尉の案内で、私は陸墓鎮の部落を歩き廻つた。晚秋ではあるが、暖い日和の日で、麗かな陽が野面に降りそゝいでゐる。

部落の中の路は狭く、三尺幅もないほどで、農民の日常品を賣つてゐる店なども見られる。檐の傾いた古い家ばかりが建つてゐるのも、日本の農村と別に違つたところも感じられない。日本の農村と違つてゐるところといへば、どの家も、一軒だけ飛び離れたのはなく、びつしきりと庇を擦りよせるやうに、部落全體が一團となつてゐることであらう。

昔から戦火に追はれ、匪賊に襲はれつゝけて來た農民達は、團結の力で、彼等自身の生命財産を護る手段を、自然に學んで來たのではなからうか。

住民達は烟へでも出てゐるのか、部落の中は閑散としてゐた、時折り通りかゝる農民達は、K中尉に鄭重な、親愛の籠つた眼さしで、挨拶をして行く。可愛らしい小孩が、ぴよこりと頭を下げるのも微笑ましい。

K中尉の穏やかな物腰は、村民達になんらの隔意をも抱かせないのであらう。村民の信頼を得るといふことが、清郷工作に如何に大きな影響を與へるかは、計り知れないものがあるであらう。

私はふと南京で聞いた話を思ひ起した。

南京の對岸、津浦線の終點浦口から、鐵道の沿線を遠く離れた、小さな名もなき村落がある。周圍は、ぐるりと敵地區に取囲まれてゐるのだが、この村落ばかりは、流石の敵も一指もつけることが出来ないのだ。しかも、日本人が、この村落を訪れるとき、村民達は土下座をせんばかりにして迎へるので、誰でも茫然とさせられるといふのである。

敵地區に圍繞された部落で、日本人がこんな態度で迎へられるといふことは、確かに奇怪なことだが、この部落に單身乗り込んで、幾度かマラリヤに冒されながら、醫療宣撫に

挺身するS女史を發見して、始めてその謎の原因を理解するのである。

又、S女史が病に倒れると、部落民達は女史の住む獨立小屋に詰めかけて、熱心に看護につとめ、神に平癒を祈るといふ光景は、民族といふ墻を越え、涙を催させられるといふ。すべては、S女史の献身的な村民への愛情が、この成果を結んだのである。

S女史は、九州医科大学の看護婦だつたが、支那事變勃發後、この敵地區の中に、單身自ら進んで、醫療宣撫を行つてゐるのだ。その献身的な態度が、素朴な支那の農民の心を強く搏つたのである。

私はK中尉と村民との間に、親愛の情の流れでゐるのを見て、S女史のことを思ひ出したのである。

村端れの小川の畔に、大きな茶種の製油所がある。數頭の大きな水牛が、入口の牛舎に繋がれて、温順さうな、細い濡れたやうな目をしてゐた。

黒く油光りのした原始的な轆轤が、機械といふには、あまり相應しくない格恰で据えられてゐた。

「あの牛が、この轆轤をひつぱつて油を搾るんですよ」

太い柱も、梁も、真黒に煤けてゐて、窓から見える奥庭が、明るい陽を受けて、眩しく反射し、庭一面が、眞白く雪でも降つたやうにキラキラと光つてゐる。裏口から庭へ出て見ると、土壁に囲まれた廣い庭には、隙間もなく芝が敷きつめられ、純白な大粒の米が、白瑪瑙のやうな艶を帶びて光つてゐるのだつた。

「良い米ですね」

手にして見ると、粒も大きく立派な米である。

「蘇州米、常熟米と云ひまして、江南一帯は米の產地なのです。内地の米と比較して、優ることも劣らないと思ひますね」

K中尉も、掌の上に米をのせて見てゐる。

農民達の汗の結晶である米の出來榮の如何が、清郷工作の經濟問題に、大きな影響を與へることは言ふまでもないことだらう。

「今年は豊作でしてね」

さう言ふK中尉の顔も、明るく輝いてゐる。

地味な工作に献身してゐる部隊が、大陸の戰線の各所に、一步一步と東亞建設のために挺身してゐることを、私達は確りと膽に銘じなければならない。この地味な力が、次第に大きな根を張つて、支那の民衆に、新中國建設の熱意を抱かせ、大東亞共榮圈確立への理念をもたせることになるのである。

それ以外に大東亞建設の道はない。——私はそんな風に考へたのだつた。

中華模範青年隊本部

私達は、再び今來た道を引返した。他に道のない一本道なのである。途中まで來ると、K中尉は、高い土壁に囲まれた小さな門に入つて行くのである。

私達もK中尉の後から、その門をくぐつた。門をくぐると、直ぐ正面に、直接、家の内部が見えないやうに、支那家屋のいづれもがさうである如く、壁仕切りがしてあつて、大きな反共和平の青天白日旗が掲げられてゐて、汪精衛氏の肖像が、その上に飾られてあつた。

仕切りの向ふは、小さな前庭になつてゐて、その兩側と奥に房子があるのである。これは、どんな大きな家でも同様であるらしい。

「ここは中華模範青年隊本部で、隊長以下五百名の隊員がゐるのですが、隊員は殆んど各地の農村へ出張してゐて、残つてゐる者は、ほんの僅かしかゐません」

模範青年隊は、新中國建設の精銳分子で、常に各地區へ出かけ、新四軍に對抗して、宣撫工作に挺身してゐるのである。

中國側の清鄉工作に對する諸機關はこればかりでなく、政治工作團、招撫整編委員會、軍事訓練班から和平義勇總隊、清鄉警察總隊等々と全能力を擧げて、日本軍との協力の下に活潑な活動をしてゐるのである。

小さな前庭のある部屋からは、賑やかな笑ひ聲がして、ピンポンの音がしてゐた。

副隊長の盛爾庭君が、陽にやけた精悍な顔を見せる。若い隊員達がピンポンをしてゐる

部屋の入口には、「乒乓室」と書いた紙が貼つてあつた。

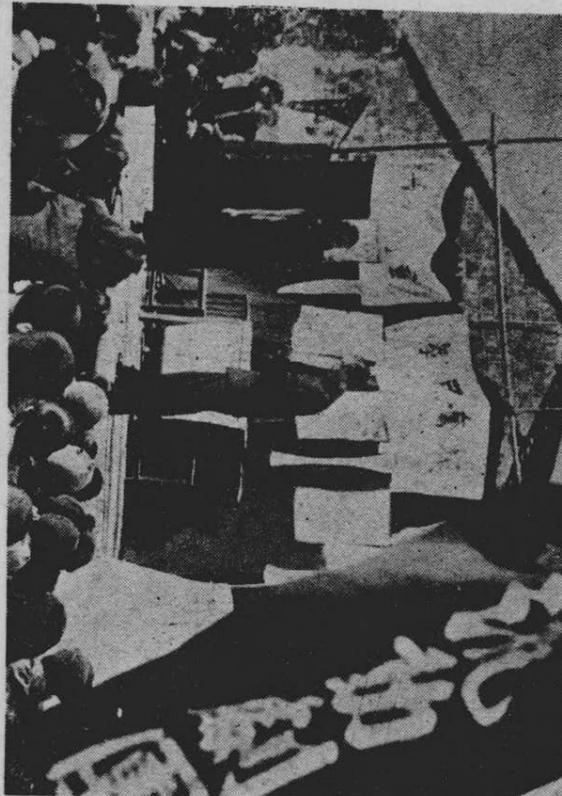
「あれは、どう讀むのですか」

私は宇佐美君に、怪訝な顔をしながら訊かざるを得なかつた。

「讀めないでせう。乒乓室ですよ」

「なるほど!」

さすがに文字の國だけあつて、面白い字を案出したものであると、微笑させられた。



副隊長の盛爾庭君と机を囲んで、K中尉の流暢な通譯で話をするのだが、通譯付の話といふものは、どうしても話と話の間に隙間が生じて、馴れない私などは、その間隙の方に心を奪はれてしまつて、ちぐはぐな氣持にさせられてしまふ。

清鄉工作に關する話、隊員訓練の話などを聞いたのだが、私はそんな話よりも、この青年達の新中國建設への熱意が知りたかつたのである。しかし、明らかに、敗戦の中から如何にして新中國建設の理念を保持し、重慶軍と鬪はんとするに至つたかなどと質問することも、そんな遠慮の必要はなかつたのかもしれないが、この青年達の顔を見てみると、なにか憚られるやうな氣がするのである。

青年達の言葉に、必死の意氣込みであることが、力を籠めて語る語調の中に窺はれるのである。中國の再建は、自分達の双肩にかけられてゐるといふ信念の強さとともに、彼等の汪主席に對する尊敬と愛情とは並々ならぬものがあつた。

盛爾庭君の言葉にも、屢々汪主席の名が語られてゐる。汪主席は、この青年達の魂を確りと強く握つてゐるのであらう。

自國の敗戦といふ事實を、眼前にまざまざと見せられ來た青年達が、思想的に受けた打撃は大きかつたに違ひない。しかも、彼等は苦惱の底から奮起して、新中國建設のために邁進してゐるのである。

私達は間もなく、青年隊吳縣地區工作本部を出た。

「どうです。眞剣なものでせう」

「全く——」

新中國には、南京國民政府の大きなスローガンの「東亞保衛」の理念が、汪主席を中心にして、大きな沿々たる流れとなつて、日支提携を前提とし、反共和平の旗印を高くかゝげて進みつゝある。

政治工作團吳縣特區社運專員の黃敏君にも會つたが、私は彼からも、同様の印象を受けたのだつた。

再びK中尉の部屋へ歸つて話をしてゐると、流暢な日本語を話す支那人が入つて來た。
「署長が晝餐にお呼びしたいと言つてゐます」

私達は、もう歸る支度をしてゐた。

「どうぞ、私達は歸りますから」

「いいえ、貴方達も御一緒にといふのです」

宇佐美君には馴染みのある人達ばかりであるが、私は初対面の人達ばかりなので遠慮したかつたが、

「いや、遠慮はいりません。一緒に参りませう」

と、K中尉に勧められて、私達は吳縣特別公署長謝叔銳氏の家へ行くことになつた。門をくぐつて行くと、正面の大きな部屋で、圓い食卓を圍んで、五六人の人が待つてゐた。

一人一人紹介されたのだが、いづれも吳縣地區の清鄉工作に活動する國民政府の人達ばかりであつた。

署長は、國民政府の陸軍少將の軍服が、びつたり身についた五尺六七寸もある堂々たる偉丈夫だつた。

謝少將も、管つては蔣軍の一方の部隊長だつたのださうである。だが、如何にも中國人

らしい如才ない應待振りで、私達に「乾盃・乾盃」と盃をすゝめるのである。

私はもう別に話を聞くこともなく、暢氣に談笑しながら——もつとも通譯の勞を、K中に煩しながら、晝餐の御馳走になつた。支那料理の御馳走は、満洲や北支で、相當に味はつて來たけれど、謝少將の家の總菜料理ほど、支那らしい味のした料理は食べたことがなかつた。

私がさういふ批評すると、謝少將はますます盃を私達に勧めるのである。そして、自分もこれから蘇州へ行くから、一緒の自動車に乗つて行けと勧めるのである。

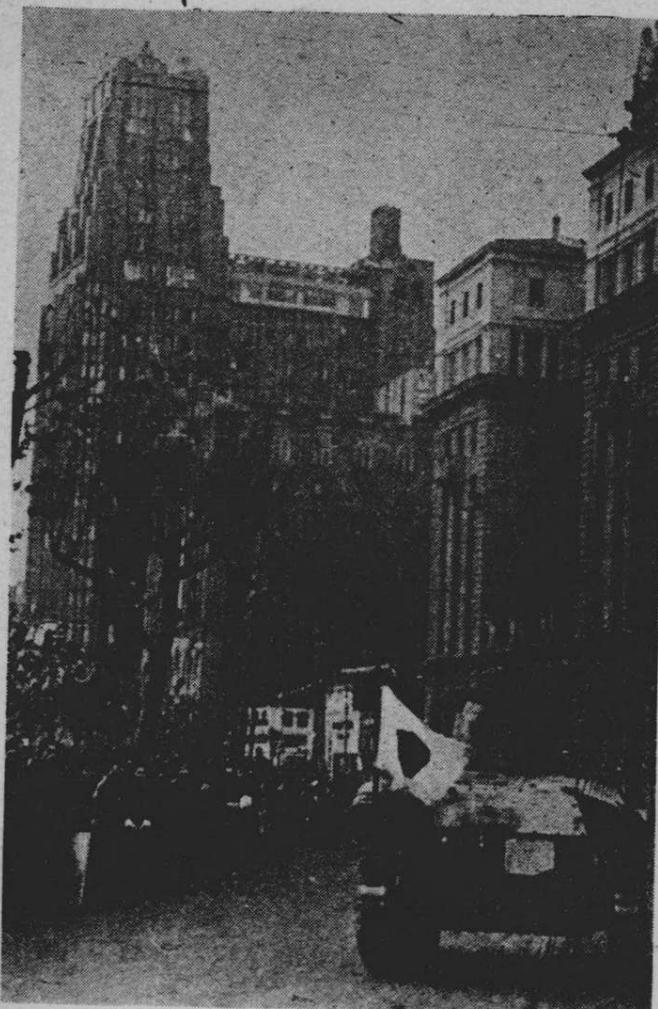
「では、お願ひします」

晝餐を終つてから、私達は自動車の待つてゐるバスの道路まで、田圃路を歩いて行くのである。

K中尉とは、部落の出口で別れた。その出口の附近の廣場で、私は和平義勇總隊の一ヶ小隊ばかりの兵士達が、整然と列を正して、何か隊長から訓示を受けてゐる光景を見た。若い兵隊ばかりである。

ぎつしり私達を詰めこんだ自動車は、再び検問所を通つて、蘇州への道路を砂塵をたてて走つてゐる。

午後の陽を、帆一杯にうけた戎克が、晚秋の色を湛へたクリークの、碧い水面に水鳥のやうな影を落してゐた。



下のルテホクーバの路寺安靜
駿車戰るす駐進に裡和平を

上
海
の
橋

パーク・ホテルにて

「素晴らしい夜景でせう。上海の夜景を見るには、この十四階の『空の舞踏室』が特別観覽席といふ譯なんですよ。僕は上海訪問者で、夜景を見たいといふ人には、必ず此所を紹介するんです」

多田裕計君——小説「長江デルタ」の作者は、さう言つて、上海の夜景を説明してくれる。

群立する摩天樓の頂上に輝く煌々たる電飾は、星の光りを奪ひ、地獄の底のやうな下界の南京路には、無數の夜光蟲が明滅してゐるかのやうに、自動車のヘッド・ライトが光線の尾をひきながら、群衆の雜踏を浮び上らせてゐる。だが、下界の騒音は、流石に十四階の硝子張のキャベリまでは響いて來なかつた。

綺麗に磨かれたフローリアでは、白糸ロシアの娘達のショウダンスが始まつてゐる。周囲

の卓子には、タキシードを着た歐米人が、豪奢なイブニングの婦人達を圍んで、静かに盃を上げてゐる。

淡い薄紫色の照明が、水の底にあるやうな落着きを與へてゐるが、部屋は溫室のやうな温かさである。

硝子窓の外を、夜霧が音もなく流れてゐる。

「こきに坐つてゐる連中を見ると、支那で戦争が行はれてゐることなんか、全然知らないといふ顔をしてゐますね」

私は窓の外の夜景から、室内的光景に眼を移しながら、多田君にさういふ質問を發せざるを得なかつた。

豪華な設備、柔い音樂、上等のウイスキー……。こんなものが、まだ上海にあつたのだらうか。南昌から飛行機で南京へ歸り、その翌朝、なんとなく急たてられる様な氣持で上海へ着いて、休む暇もなく、このパーク・ホテルへ連れられて來たので、私の頭はたしかに困亂を起してゐるらしい。

「いや、これでも、舞踏室などは寂れた方ですよ。この間引揚げた英・國・陸戰隊の居た頃は、士官だの紳士連中が、毎夜のやうに歡樂の限りを盡してゐたんですがね。近頃では、租界の外人連中も何となく秋風落莫といつた様子です」

「これでもねえ——」

「もつとも、この時間では、上海ではまだ宵の口ですよ」

私は自分の腕時計をのぞき込んだ。針は十時を過ぎてゐる。

「その時計は、日本時間でせう。上海時間では、未だ九時過ぎですよ。上海の歡樂の絶頂は、日本時間にしたら三時か、四時でせうね」

「支那人ですか」

「ひよつとしたら、支那人の方が、夜更しが好きなのかも知れません」

こんな話ををしてゐる間に、ショウダンスは終つて、壁ぶやうなブルースが、バンドから響いて來た。

卓子の歐米人達は、同伴の女達とフローラの中央へ滑り出てくる。

「アメリカ映畫を地で見るやうで、變んに錯覚を起しさうですよ」

歐米人達は踊りながら、餘り上等でない背廣服でのさばつてゐる私達の方を、ちらちら見て行くのだが、私達は逆に平然と彼等を見返してゐた。

周圍の雰囲気が、餘りにも私達とは縁遠いものだけに、私達の心に逆の心理作用を起してゐるのかも知れない。それとも、久振りに飲んだハイボールが、馴染みにくい雰囲氣に反撥を起させたのだらう。

「租界内には、依然として抗日重慶政權の鋤奸團などいふテロ團體が暗躍してゐるんですか」

「暗躍してゐると見るべきでせう。米英と重慶政權との間には、常に聯絡があるのですから」

「癪ですね」

私達は顔を見合せて、思はず苦笑した。だが、事實はなんとしても事實なのである。私は大陸の各地を歩いて來て、重慶政權に對するよりも、その背後に匿れて糸を引いてゐる

米英の野望を、現地の軍人を始め、色々な人達から聞かされ、又現實にも見せられて來てゐたので、内地を出發する頃の、慌たゞしい太平洋の風雲が、一層心魂に徹して感じられるのだつた。いつそ一と思ひに、ぐさツと腫れ上がつた個所へ、メスを突き刺してくれたら——と、勝手なことを考へてゐたのだが、現實に上海の米英租界を見て、私は一層さうした感情に捕はれてしまつたらしい。

「何時までゐても限りがなささうですね」

「ちや、そろそろ歸りませうか」

フロア一では、プログラムによると、新歸朝の奇術家と稱する支那人の奇術師が、曲藝の如きものを演じてゐる。妙に氣取つたタキシード姿の、奇術師の無表情な顔が、歐米化した支那人のタイプを、露骨に見せてゐて不愉快だつた。

「さア、出ませう」

私達が卓子を離れようとした時に、五六人の支那人の男女が、賑やかな話聲とともに入つて來ると、私達の卓子の隣に席を占めた。女達の着てゐる朱色の綿子だの、淡緑色の毛

織の支那服の鮮やかな色彩が、今まで白と黒の夜會服ばかりの中に、バツと大輪の花を咲かせたやうな強い印象を、私達にあたへた。

綺麗に揃へて剪つた前髪の漆黒さが、心もち上氣した額に垂れて、綠や赤の耳飾が、小さな耳に、妖しい美しさで光つてゐる。——ボール・モーランの「夜ひらく」といふ小説の題名が、突嗟に私の記憶を甦らせたほど、彼女達は婀娜な美しさを見せてゐた。

「支那映畫の女優たちですよ」

さういへば、彼女達のパートナーの男達は、いづれも極端にアメリカ化した格好をしてゐる。

「彼等の歡樂は、これから始まるといふ譯ですね」

私達はエレベーターで、一気に階下に降りて来て、ホテルの廻轉扉を押した。

十二月の冷たい夜氣が、急に身に沁みた。十四階のホテルの、硝子張の舞踏室から見た南京路は、雜踏の響もなく、夜光蟲の光る海のやうに見えたが、ホテルの扉を境にして、路上には雜踏と喧噪とが、夜霧の中で渦を卷いてゐた。

日本時間では、もう十一時過ぎだといふのに、南京路の雜踏は何時祟てるともしれない混雜さなのである。歩道には、支那の乞食が、冷たいコンクリートの上に寝そべつて、往来の人の袖にすがつてゐる。——支那の乞食を見て、私はいつも不思議に思ふのだが、日本の乞食の如く、決して路傍に坐つてゐないで、長々と寝そべつてゐるか、執拗に追ひかけるかの二種類なのである。

私達は人混みを擦りぬけるやうにして、新世界の附近まで來た。

「上海名物の乞食と野鶏——夜の女ですよ。ここからが難關なのです」

煌々たるネオン・サインが、白晝のやうな輝きを見せてゐる街の一角に、野鶏が、關所の番人のやうに目白押しに立つてゐる。

こんな支那があるかと思へば、パーク・ホテルの硝子張の中にも支那がある。いや、あの高層のホテルの中にるのは、支那ではなくて米英なのだらう。

私達は二階バスに乗つて、雜踏する夜の南京路を車窓から眺めながら、四川路まで歸つて來た。

私は虹口への橋を渡りながら、一種の緊張感が身體から脱けて行くのを、強く感じた。

「橋を渡つたら、理由もなくほツとしましたよ」

虹口側は、米英租界から歸つてみると、人影もなく、ひつそりとしてゐる。街角のユダヤ人經營の喫茶店が一軒だけ起きてゐて、暗い街路に明るい影を見せてゐた

「お茶でも飲んで歸りませう」

喫茶店のストーブの側で、温い紅茶を飲みながら、私は多田君に言つた。

「今日の半日の印象では、はつきりしたことは分りませんが、上海はやはり魔都といった感じがしますよ」

多田君は微笑してゐて、別に答へなかつた。私達は間もなく別れて、宿舎へ歸つたのだが、疲れてゐるくせに、妙に頭ばかり冴えて睡れさうにもなかつたので、晝間、街の本屋で買つた繪入りの上海案内の如き本の頁を繰つてゐるうちに、「^{ラッピング}血の横町」といふ章におつかつた。

「血の横町」——つまり喧嘩小路なのだが、上海の租界らしい挿話だといへるだらう。「血の横町」は、正確にいへば佛蘭西租界の朱葆^{サボ}小路といふ小さな横町なのだが、船員相手の酒場が軒を並べてゐて、船員達の喧嘩の絶え間がないといふ物騒な横町らしい。

世界各国の船が入港するので、喧嘩も從つて派手に、國際的なものになつてくるのである。——そして、この本には、各國人の喧嘩の特徴が書かれてゐる。

喧嘩の常習犯は英國人と米國人で、この兩國の水夫達は、好んで拳闘をやりたがる。だが、彼等の喧嘩は酒場の喧嘩に、型のいいところを見せたがる傾向がある。

伊太利と、佛蘭西の水夫達は、何かといふと、直ぐにナイフを振り舞るので、非常に毛嫌ひされてゐる。

そして、面白いことには、日本の水夫達は、ビール壙投げの名人だが、野球の上手なアメリカの水夫達には、適用しない。

——と、書いてある。だが、柔道にかゝつては、いくら野球の上手なアメリカの水夫達でも、ぐうの音も出ないと書いてないのは、この本の筆者の認識不足だらう。

面白いのは、英國人や米國人は、喧嘩をするにもわいわい囃したてゝ、酒場を拳闘の練習場と心得てゐるらしいが、そこへ第三國の船員が現れると、直ぐに攻守同盟を結んでしまつて、第三國の船員を酒場から追ひ出してしまふといふのである。

前世界大戦でも、今度の歐洲大戦でも、米英は直ぐに攻守同盟を結んで、獨逸に抗戦してゐるのが、この本を読んでゐて、成程といふ氣がした。

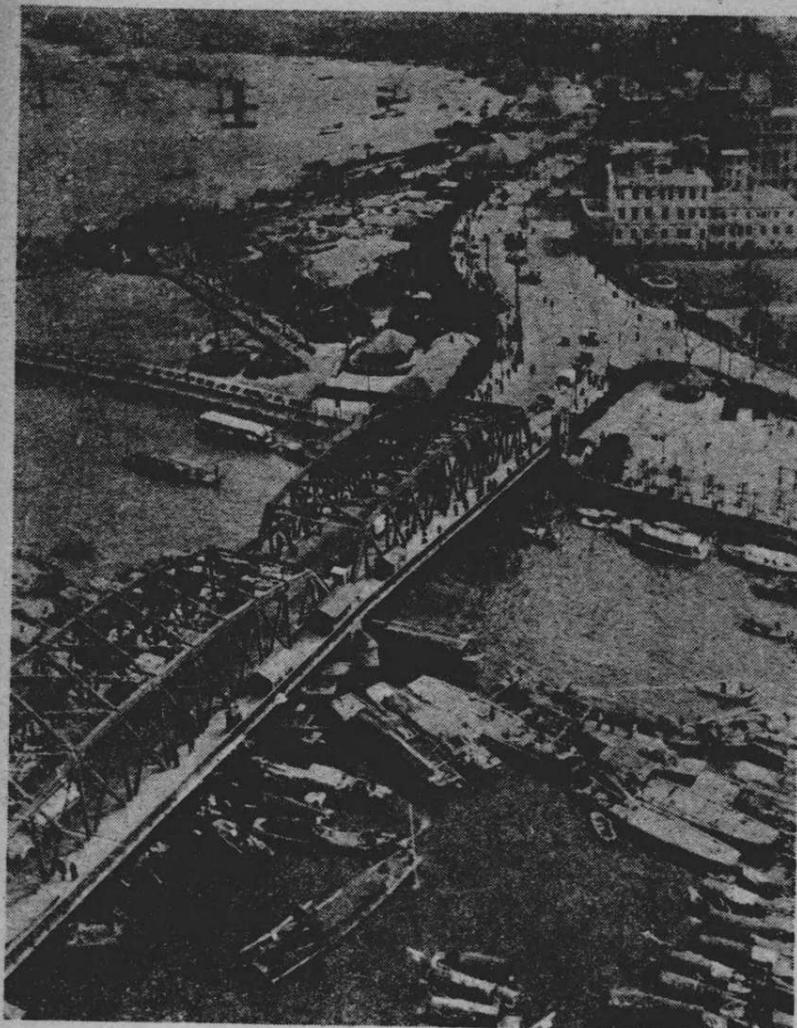
上海でも、米英租界は境界を撤廃して、日本に對抗してゐる。船員達の酒場の喧嘩の話だが、何か奇妙な暗示に富む文章なので、私は曉方近くまで読み耽けつたのだつた。

上海の橋

鐵骨のガーデン・ブリッヂ（外白渡橋）が、プロードウェイ・マンションの赤褐色の巨
大な影に、橋の片側を翳らせ、黃濁した黃浦江岸に停泊せる無數の戎克^{ヨウク}や汽船の檣頭を、
鐵骨の間からのぞかせてゐる。

蘇州河は上流から幾つかの橋の下を流れ、ガーデン・ブリッヂの下をくぐつて、始めて黃浦江にそゝいでゐるのだが、この小さな河を隔てゝ、日本租界の虹口と米・英租界が對峙してゐる。

日本租界と米・英租界との交通は、主としてガーデン・ブリッヂ、白渡橋、四川路橋で通じてゐる。日本租界が蔣介石軍の包囲を受けて、到るところに、未だに弾痕をとどめ、凄惨な事變當初の面影を偲ばせてゐるのに、小さな蘇州河を越へると、米・英租界は依然として豪華な偉容を見せてゐるのである。



た見りよンヨシンマ・イエウドーロブ
■ 蘇浦黃とデクリブ・ンデーガ

黄浦江岸のペブリック・ガーデンの側の景勝の地には、赤練瓦の英國總領事館が、屋上にユニオン・ジャックの旗を靡びかせ、鐵の門扉には、金色燐然たる英國の紋章を光させて建つてゐる。

前世界大戰を記念する平和記念塔の上には、鐵製の平和の女神像が、冷たい表情で、黃浦灘路を往來する自動車や電車や黃包車を眺めてゐる。江岸の堂々たる石造の建築物は、揚子江を遙江して來る汽船から見ると、上海が世界的な港であることを肯づかせるに充分であらう。

——私はなにも、今さらのやうに上海の外觀の説明をする氣はないのだが、支那からの共同租借地たる上海が、支那で最も大きな都會であるといふことに、奇妙な錯覺を感じさせられてゐるのだ。外國風な石造の大建築物は、様々な建築様式を見せて、江岸を壓してゐるが、この土地の住民たる支那人は、堂々たる建築物の持主たる米英人の奴隸の如き地位にあるのが、私には不思議なのである。或は奴隸ではないと抗辯するかも知れないが、奴隸でなければ、米英の操つる手先に踊らせられてゐる傀儡としか思はれないのである。

私は大陸の各地を歩いて来て、最後に上海へ着き、租界を歩けば歩くほど、この感を一層深くするばかりであつた。事實、上海ほど露骨に米英色を見せてゐる場所もないからであらう。

天津、北京にも、まだ米英租界は在つたが、上海ほどの激しい敵意は感じなかつた。中支の九江、漢口などは、既に米英人は引揚げてしまつてゐて、その租界もうらぶれた姿しか残してゐなかつたが、上海には底の知れない敵意が、租界の街角や露路の奥に潜んでゐるやうな雰囲氣を漾はしてゐる。

「……だが、これでも静かになつた方ですよ。英國陸戦隊やアメリカ・マリン（海兵）がゐたころは、支那人どもまで鼻息が荒くて、うつかり租界は歩けなかつたのです」

上海在住の人々の述懐である。

黄浦江には、軍艦出雲が灰色のどつしりした偉容を見せてゐて、鮮やかな旭日旗が川風にはためいてゐる。浦東側に停泊してゐる米英の二隻の砲艦の、眞白に化粧した様子は、出雲の偉容に比較すると、全く玩具の軍艦でしかない。

蘇州河を渡つて、所謂河向ふの米英租界を歩いてると、激しい敵意の如きものを感ずるが、一面には底知れぬ憂鬱な翳のさしてゐるのが感じられる。

米英の領事館はいふまでもなく、彼等の権益といふ権益には、物々しい旗を樹てたり、仰々しくペンキで旗印を描いたりしてゐるが、今では空しい最後の擬態を示してゐるとより他には思へない感じである。

蘇州河の小さな河を隔てて、上海の街の性格はくつきりと區別されてゐる。橋は懸けられてはゐるもの、この橋には生命がないと言へるだらう。米英にとつては、橋などは無用の長物なのだらう。と同時に、彼等はこの橋を、租界を護る唯一の境界としてゐるのだともいへるのである。

米英租界の連中は、上海から、支那全土から、武漢三鎮が攻略され、南京政府が樹立され、蒋介石が奥地へ敗走してしまつた今日になつても、日本の勢力を、上海から驅逐しようとして、醜い悪あがきをしてゐるとしか思へない。

彼等にとつては、一二三枚のボンド紙幣やドル紙幣が、一〇〇〇元に換算される上海から

本國へ歸へるなどといふことは、夢にも想像のできぬことなのだらう。だが、現實の厳しさは、彼等の脚下を搖がし始めてゐる。それだけに植民地としての支那への未練から、尙一層ぬけ切れなくなつて來るのかも知れない。

本國へ歸れば、上海での豪奢な生活などは想像にも及はないといふのが、支那在住の米英人の眞意であらう。支那人の給仕、料理人、阿媽を、安い給料で顎の先で使ひ廻し、チヤイニーズ・ワифを圍つてゐられるのも、支那といふ植民地での、彼等の特權だと考へて、過去百年間を過して來たのである。

——上海 上海は素適たつたわ、どうしてつて、面白い様にお金が儲かつたからよ。 オーラルオーフナッシュン

姑娘が、上海の凋落を悪達者なビジョン・イングリシシで嘆いてゐたが、上海碼頭で、彼女達が戀人——といふと體裁はいゝが、パトロン——の米國陸戦隊や英國陸戦隊の兵士達の前で流した涙は、ボンドやドルへの袂別の泪だつたといふのが、偽らざる告白かもしけ

ない。

とすれば、米英租界の英國風の豪壯な建物や、米國流の摩天樓は、彼等が揚子江の三角洲に築いた砂上の樓閣であつたのである。しかし、尠なくとも支那の文化人ともいふべき男女が、今日、彼等だけの會話に於ても、英語を用ひてゐるといふ事實を看過してはならないと思ふ。もちろん、廣大な支那大陸では、北支、中支、南支では、全然言葉が通じないとはいふものの、英語が彼等の意思を通じさせるといふことは、そこまで米英の勢力が浸透してゐると言へるだらう。

だが、米英が支那の擄取によつて築き上げた桃源郷は、如何に巧妙に隠蔽しようとして
も、所詮は崩壊をまぬがれないのだ。僅か數十年の間に、幾度か支那が、米英の羈絆を脱
しようとして抵抗を試みたことを、支那の歴史が物語つてゐる。だが、米英の謀略は、そ
の都度、鉢先を他へ轉ぜしめて來た。

虹口側——蘇州河の北方の日本租界が、その事實を物語つてゐる。

上海北停車場附近から楊樹浦方面にかけて、われわれは至る處に、我が陸戦隊の猛攻死闘を偲ぶ戰場を見る事ができる。陸軍部隊が敵前上陸した吳淞、江灣鎮、大場鎮、真如などの戰場が、今日でも當時の物凄い彈痕をとどめてゐるのである。

——長崎縣上海市で郵便物が届いたなどといふ笑ひ話が傳へられるほど、上海は日本にとつては至近の距離にありながら、日本人と支那人とは、常に反目してゐるといふのは、なんとも、理解の出來ぬことのやうに思はれる。だが、この理解の出來ぬ謎の、解決の鍵を河向ふの支配者達が、ガツチリ握りしめてゐるからなのである。

河向ふから虹口側へ歸つて來ると、われわれは、ほゞと安堵に似た氣持を味合されるのだが、これは日本提灯をぶら下げる小料理やとか、繩のれんのおでんやが軒をならべてゐて、黃包車の上に藝妓の姿を發見したり、大阪式のカフェーが騒々しい景氣を見せてゐたりするからでは、決してない。たゞ、日本人の居住地區であるといふだけで、一種の安堵を感じるのであらう。これは單に上海に限つたことではなく、大陸の各地で見られる光景かも知れないが、上海ほど、彼我の對象が尖鋭化してゐないだけに、私達の心に

迫つて來ないのかも知れない。だが、上海では、かうした卑俗な日本租界の形相が、私などには、異様に反撥してくるのである。

——なるほど、長崎縣上海市か！

しかし、そんな嘆息を洩したぐらゐではすまされないものを、私などは上海の日本租界から感じさせられる。

我が陸海軍が死を賭して護つた日本租界の河向ふには、支那事變の張本人たる米英が、自畫公然とユニオン・ジャックを、星條旗を、巨人の群像のやうな摩天樓の頂上に翻へしてゐるのである。

蘇州河は、上海に於ては、大きな國境となつてゐる。

河向ふと虹口側とでは、割然と性格を異にしてゐるのである。大東亞建設を目的とする日本と、支那を擰取のための植民地と觀する英米とでは、餘りに性格が異りすぎてゐる。われわれにとつて、蘇州河の橋は、大東亞建設の瘤を芟除するための進撃路でなければならぬのだ。

私は映畫「上海」のフィルムの一駒を、はつきりと記憶してゐる。

上海市街戦で、最も激烈な戦闘だつた四行倉庫の、砲弾に破壊された壁の大きな穴から撮影された場面で、穴の向ふを、英國の警備兵が煙草をふかしながら、呑氣な顔付をして四、五人、行つたり來たりして、警備してゐるのである。

しかも、この四行倉庫を陣地として、日本軍に抵抗した支那兵に、英國兵が糧食を供給してゐた事實を、カメラは屢々と撮影してゐた。その上、支那兵は脱出に際しても、英租界へ脱けて行つたのであるが、それを英國軍は默許したばかりでなく、援助さへしてゐるのである。

私は四川路橋畔に立つて、皇軍の將兵に、幾度か悲憤の涙を流さしたであらう河向ふの米・英租界に翻へる國旗を見ながら、この橋を突破する日が、果して何日来るであらうかと考へたのである。

蘇州河は、日本と米・英とが橋によつて繋がれた國境である。

楊樹浦のユダヤ人

支那街の朝は——正確にいへば、共同租界のA地区（英租界）——夥しい群衆で、溢れてゐた。

朝の爽々しい太陽の下で見る支那街には、晝間の雜踏もなく、夜の喧噪さも、さほど強くは感じられないが、路傍の屋臺店の鍋の中に、温い粥が湯氣を立てゝて、茶碗と長い箸を持つた男や黄包車の車夫が、立つたまゝ食事をしてゐる。その側で、子供が往來の人を見ながら、のんびりと小さなお尻を出して便を足してゐる。

支那人の家屋には廁といふものがないのであらうか。何處へ行つても、こんな光景を目撃するところから見ると、たしかに廁はないらしい。

どの店舗も、店は開いてはゐるが、まだ商賣にはかゝつてゐないらしい。例のゆつくりした調子で、派手な花模様の洗面器で、手の方は動かさずに、顔をタオルの中で動かしな

がら、洗面をしたり、歯を磨いたりしてゐる光景が、どの店先にも見られるのである。

朝の太陽は、この街の片側を明るく照し出している。どの通りを歩いて見ても、全く同様な光景が、路傍に見られるのである。さうした通りの一つで、私の友人はふと足をとめると、私に眼で合図をした。

この通りも、今まで私達が歩いて來た通りと、少しも變つたところのない街だが、私の眼は街の片側に、この街とは縁の遠い人間が、一臺の荷車の側に立つて、盛んに身振り手振りで、何事が喚いてゐる姿に牽きつけられたのである。

荷車の周圍には、粥の茶碗をかゝへたまゝの黃包車曳きや、歯ブラッシを銜へた男や、買物籠を持つた女達が群つてゐた。

「あれだよ。君の質問への答へは」

今朝早く、友人が私を引つぱつて共同租界へ連れて來たのは、支那粥を食はせるのでもなければ、朝の佛蘭西租界の散歩に誘つたのでもない。

昨夜、上海の話を聞いてゐて、

「例の獨逸を追放されて上海へ來たユダヤ人達は、どうして生活してゐるのか」

といふ私の質問に答へて、彼等の生活の實況を見せてやらうといふので、朝早くから租界の支那街へ引つぱつて來たのである。

荷車の側の、薄汚れた皮のジャンパーを着た外人は、色褪せた鳥打帽を阿彌陀にかぶつて、鶩鼻の頭を赤くしながら、盛んに何か喋つてゐる。それは片語の支那語と英語との、不思議な言葉だつた。

荷車の側の外人——ユダヤ人は何をしてゐるのであらうか。

私達は荷車を圍んで群がつてゐる支那人達の間から、荷車の上をのぞき込んだ。荷車の上には、澤山のメリヤスのシャツやタオルが、安價な歯ブラシや石鹼などに混つて、山の様に積み込まれてゐるのである。こんな品物ならば、この支那街の、どの店頭にもごろごろしてゐる品と同じ品である。だが、この荷車の上の品物が、全く文字通りに飛ぶやうに賣れて行のである。

これは何うした事なのであらう。商賣にかけては、天才的な商根をもつてゐる支那人達

が、この不敵な異國の行商人の品物に、眼の色を變へて飛びついて行く光景は、私などには、全く奇妙に映るのである。

「これが、奴等ユダヤ人の生活だよ。恐るべき生活力とでもいふべきだらう」

荷車の側を離れて歩き出しながら、友人はもう一度振り返へつて、私にさう言ふのだ。

「奴等は楊樹浦から荷車を引つぱつて、早朝に出かけて来るんだよ」

楊樹浦のユダヤ人——このふてぶてしい商根を發揮する獨逸系ユダヤ人の、これはほんの一面にしか過ぎないので。

「夜は楊樹浦の酒場をのぞいて見るんだね。晝の間は、荷車を引つぱつて商賣をしてゐる奴等が、夜はどんな商賣をやつてゐるか、興味ある話題だよ」

私達は、いつか南京路の雜踏する鋪道を歩いてゐた。

彷徨へるユダヤ人——だが、國を失つた彼等は、歐米各國に根強い巢を張つて、世界の金融を獨占し、米・英を指嗾し、ソ聯を操つて、戦争を勃發せしめた張本人なのだ。

この上海でも、虹口側の楊樹浦に、獨逸を追はれたユダヤ人が辿りついたのは、ほんの

一、二年前でしかない。

楊樹浦——われわれは、この地名を忘ることはできない。我が海軍特別陸戦隊が、上海を包囲せる百萬の蔣介石軍を相手に、寡兵をもつて猛撃死闘し、敵をして一步も日本租界に近づけなかつた血の戦場として、われわれの記憶に生きしい。

砲撃に碎かれ、戦火に焚れた楊樹浦は、黃浦江沿岸附近の僅かな建物を残して、瓦礫は飛散し、今だに彈痕をとゞめた建物が、灰燼の中にぼつんと残つてゐて、人影もあまり見かけない光景には、鬼哭啾々たるものがある。

その夜、私は虹口クリークの陸戦隊の歩哨所の前を通つて、楊樹浦を見に行つた。廣い道路の兩側には、佗びしい電燈がところどころに點いてゐるだけで、しばらくの間は人家はあるにはあるが、音もなく闇の中に沈んでゐて、人影も見えない。

「これは大變なところだね」

虹口側の賑やかな明るい街から來ると、この暗さは強く心に堪へる。

「暗いだらう。だが……もう直きだよ」

友人は皮肉な微笑を浮べる。

「どうだ、あれは」

廢墟のやうな街並みの端れに、一ところ明るいネオンサインが、煌々として街路を照してゐるところがある。

眩ゆいばかりの明るさが、鋪装道路の上に流れてゐて、片側には倉庫の如き建物が、ぽつんぽつんと建つてゐる。背後は雑草の茂つた空地で、漆黒の暗につゝまれてゐるのだ。

「どうだい。これが奴等ニダヤ人の夜の巣だよ」

私達は、明るいネオンサインの光の流の中に立つた。

黄浦江沿ひの一角に、五、六軒のキャバレーが軒をならべてゐて、扉の前にはマフラーを首に巻いたア・パツシユのやうな男が立つてゐる。

「ハロウ・ミスター」

私達が近づいて行くと、この男達は怪しげな英語で呼びかて、卑屈な微笑を浮べながら

われわれを誘ふのだ。

扉の内部からは、柔い樂の音がもれて來る。

「どうだ、ちよいと入つて見るか。この客引き野郎共が、晝間見たやうに租界へ商賣に出来かけるんだよ」

私達は一軒のキャバレーの扉を押した。

「ウエルカム」

獨逸訛の英語といふものは、耳馴れないでエキゾテックに響く。明るい音樂の旋律が流れる様に聞えてゐたので、キャバレーの内部は賑やかなのであらう、と思つたのに反して、客らしきものの姿はなく、壁側の椅子にかけてゐた四、五人の若い娘達が、私達の姿を見ると、直ぐに立ち上つて、滾れるやうな笑顔を見せて近づいて來るのだ。

「閑古鳥でも啼きさうだな」

私達は一隅のソファに腰を下ろした。このキャバレーは、二十疊ぐらゐの廣さで、中央に舞踏場があつて、奥のスタンドの背後には、すらりと酒瓶が並べられてゐる。

照明も外部の明るさと比較すると、むしろ薄暗い。入口の右隅が少しばかり高くなつてゐて、ピアノとバイオリンとセロとの三重奏を演つてゐる。

その樂師達は、私達の顔を見ると、今まで演奏してゐた獨逸風のタンゴを中止して、日本の流行歌を演奏しはじめた。

「あれが歓迎歌といふ譯だね」

私達はビールを註文した。娘達はいづれも若々しく、綺麗である——獨逸の血が混ぢつてゐるらしい美しさである。

「どうだ相當なメツチエンだらう」

娘達はメツチエンといふ言葉に、ニッコリして見せる。

「だが、この娘達も年が寄ると、あのスクシドにゐる婆さんのやうになるんだからね」友達の言葉に、スタンドの方を見ると、おそらく肥満したビヤ樽のやうな體格の婆さんが、私達の方を見て愛嬌笑ひをしてゐる。

この綺麗な娘たちと、あの醜惡なビヤ樽のやうな婆さんとを結びつけることは、かうで

も對照して見なければ、直ぐには理解できないほどの違ひである。だが、娘達の中にも、そろそろさうした傾向を見せてゐる娘もゐた。

娘達は流暢な英語で、われわれに愛嬌をふり撒いて、ビールを勧める。樂師達は彼等の知つてゐる限りの日本の歌を演奏すると、今度は手段が盡きたといふやうな顔付をして、獨逸の民謡だの、ジャズを演りはじめる。

とにかく、上海へ着いて、一年か二年にしかならないのに、このユダヤ人達は英語を喋るのである。この點から見ても、彼等の生きんがための執着力とでもいふべき、生活力の逞しさが分るのである。

虹口側に生活の根を下ろし、ここを根據として、楊樹浦の戰火に荒れた廢墟の如き一隅にまで、デリヂリと彼等の生活力を浸入させようとしてゐるのである。

昨日まで、虹口側の支那人の店だつた家が、今日はユダヤ人の酒場や割烹店に變化してゐるなどといふことも珍らしくないといふ。事實、北四川路の大通り近くまで、彼等の店が顔を見せはじめてゐる。

彼等にとつては、虹口側などよりも、蘇州河を越へて、米・英の共同租界にまで、彼等の勢力を及ぼさうと考へてゐるのであらう。

「僕なんかは、このまゝの状態をつゞけてゐたら、上海はユダヤ人の世界になりはしないかと思ふことがあるよ。もちろん、そんなことになつたら大變だがね」

國を失つた民族、世界を放浪する民族たるユダヤ人にとっては、彼等の生活する土地そのものが、彼等の祖國なのであらう。彼等はその土地に根を張つて、彼等の樂園を築き、巨大な資本力に物を言はせて、世界制覇を夢見てゐるのでだ。

前世界大戦も、今次の歐洲大戦も、米・英のユダヤ人達が、露骨に彼等の意思を表現したものといへるだらう。

「……このユダヤ人達が上海へ着いて、直ぐにやつたことで面白いことがあるんだ。君は獨逸から追放され、一團となつて纏つた金もなく上海へ着いたとしたら何うするかな。土地不案内な場所で職もなく、所持金もなくなれば、どうして食つて行くかね。先づ乞食をするより他に手段はないと思ふだらう。ところが、このユダヤ人達は——獨逸を追放されたものといへるだらう。」

て來た彼等は、先づ第一に共同炊事にとりかゝつたんだ。材料も澤山に仕入れば格安につくし、時間的にも經濟だと考へたんだ。次には、共同資本によつて商品を仕入れる。彼等は凡ゆる點で合理的なのだ。こんな點から見ると、この獨逸的ユダヤ人は、他の國に住んでゐたユダヤ人よりは、獨逸的だといへるだらう」

そして、彼等は次第に彼等の地盤を擴大し、虹口側の繁華街を蠶喰しつゝあるのである。

——アナク、オドリマス、オドリマセン。

この娘達は、片言ながら日本語まで喋るのである。

「いや、呆れたね」

——ナニ、ワラフ。

このやうに、凡ゆる國々の言葉を、片言であらうが、何んであらうが、自由に驅使する力といふのは、彼等の祖先からの悲しき遺産なのであらう。彼等の祖先達は、國を失つて世界の果てまで、彷彿につぐに彷彿をつゞけ、國々によつて、生きんがために、その國の

言語を習得しなければならなかつた。そして、それが彼等の第一の天性になつてしまつたのだと考へるのは誤りであらうか。

「ドイツ、イイクニダネ」

友人は側の娘に、ゆつくりと日本語で訊いた。娘は笑顔を見せた。

「サウ、イイクニ」

「面白い話があるんだ。ユダヤ人仲間でも、英系だの、米系だの、この連中のやうに獨逸系だのとあるんだが、例へば英系のユダヤ人が獨逸の悪口を言ふとだね。この連中がかんかんになつて怒るといふのだよ。獨逸を追放されたユダヤ人が、獨逸の悪口を言はれると怒るといふのは、ちょっと考へると不思議だが、矢張り生れ故郷といふやつなのだらうね」私は獨逸の悪口を言はれると怒るといふ獨逸系ユダヤ人の顔を、あらためて見直した。

「獨逸の歌でも唄はないか」

娘達はにつこり笑ふと、樂師達に口々に、何ごとか呼びかけた。やがて静かなワルツ風の旋律が流れ出すと、美しい聲で二部合唱を始め出したのである。

十二月の冷たい風が、黃浦江の上を吹いて、廣い鋪道を吹きまくる。そして、バラツク建も同様なキヤベレーの扉を搖すぶつて行く。

扉を押して外へ出ると、周圍は漆黒の闇に呑まれてゐて、遠く北四川路あたりででもあらうか、ほのかに街の燈が、夜空に映えてゐるのが見えた。

——楊樹浦のユダヤ人が、將來どういふ運命の下に置かれるかといふことは、われわれの關知したことではないかもしけぬが、雜草の如き根強さを持つたユダヤ人を、どう處置すべきかは、少くとも上海に於ては、大きな問題となつてくるのではなからうか。

大光明戯院にて

客席の電燈が消えると、スクリーンには極彩色の廣告が、軽快なレコードの音樂につれて、次々に現れてくる。それは租界内の、各種の商店の宣傳廣告なのだが、日本の映畫館で見るやうな幻燈まがひの代物とは違つて、確かにフィルムを使用してゐるらしい。廣告は廣告だが、極彩色ではあるし、いろいろと千變萬化するので楽しい。だが、この廣告映畫の製作は支那人の仕事ではないらしいが、スクリーンに現れる廣告の意匠や文字は、如何にも支那式なのである。

廣告映畫は五分間もつゞいたであらう。だが、私は、この廣告映畫を通じて、租界の形相をちよつびりだが、のぞいたやうな氣がした。

私は中華映畫の長谷川君を無理に案内役として、租界の映畫館を見物にやつて來たのである。



キロ館映畫映力有の系米・日十月二十
をスーエニ駐進的史歷の軍皇はーシ
たし化變は勢情に迄るす映上

パーク・ホテルの近くのグランド（大光明戯院）は、立派な映畫館である。廊下には厚い絨氈が敷かれてゐて、しつとりと落着いてある。開場の五分前ぐらゐだつたが、もう相當の觀客が詰めかけてゐる。だが、日本映畫館のやうに喧噪ではない。

支那人の饒舌と喧噪さに悩まされつゝけてゐたので、私はこの映畫館での静肅さが、いささか不思議だつた。

「割に静肅なものですね」

「——と思ふでせう。ところが、何に原因があると思ひます。この静肅なのは」

長谷川君は不思議なことを言ふのである。私は周囲を見廻したが、別に原因といふべきものも發見できなかつた。

「下駄がないんですよ、下駄が。日本の映畫館の騒々しさの責任は下駄にあるんですよ」——なるほど、と私は感心した。ここでは靴か、柔い支那靴ばかりである。厚い絨氈を敷いてゐても、別に心配はない譯である。

客席も連鎖式の坐席には變りはないが、悠つたりとして氣持ちがよい。

観客の大部分は、支那人の男女であるが、ほとんど若い男女ばかりで、外人の姿もチラホラ見えてゐる。米國の海兵が、派手な軍服姿で、支那の姑娘と腕を組んで入つて來るのが見られた。

極彩色の廣告映畫が終ると、スクリーンに「ネエビイ・ブルウ」が映寫された。ジヤツク・オーキーとマーサ・レイが、素顎狂な顔をして、巫山戯ちらすアメリカ海軍の宣傳用娛樂映畫なのである。極端にレヴュウ化された映畫で、嘔吐を催させられるやうな莫迦々々しさを感じさせられる。

——こんな映畫を、私達は昨日まで面白がつて見てゐたのであらうか。それにしては、何うして、こんな不愉快さを感じるのであらう。大陸の各地で、事毎に米英の露骨な敵性をまざまざと見せつけられて來たために、私の昨日までの考へ方が變化を來したのかもしない。米英の敵性といふことは、雑誌や新聞でも察知してゐたが、現實に眼や身體や心で觸れてみるまでは、實感となつて來なかつたのであらう。

だが、今は違ふ。昨日までの私は、もう今日の私とは、あらゆる點で違つてゐるのである。

る。大陸の現實が、切實に、私にそのことを教へてくれたのである。

映畫は、日本で上映される時のやうなスペー・インボーズもないで、私などにはやうやく記憶にある單語が分る程度なのだが、この觀客席の支那人達は、このトーキーの英語を充分に理解してゐるらしい。笑ふべき個所になれば、彼等は大聲で笑ふし、苦笑するところでは、苦笑を洩してゐる。

これは、上海の支那人だけに見られる現象なのぢらうか。いや、私は漢口でも、南京でも、支那の知識階級といはれる人達が、實に流暢に、英語を自國語の如くに操つるのを知つてゐる。

——アメリカ人は行進が好きだ——この批評には確實性がある。行進の好きなアメリカ人は、従つてレヴュウが好きらしい。アメリカの陸海軍の觀兵式は、確かにレヴュウ化してゐる。

この「ネエヴィ・ブルウ」でも、盛んにレヴュウが——パレードが現れて來る。それにしても、映畫の力は恐ろしい。客席の支那人の男女達は、映畫の戀愛を現實で行つて見せ

るのである。殊に米國海兵などと手を組んで現れた姑娘などは、衆人環視の中で、如何に薄暗い客席とはいへ、平然とスクリーンと歩調を合せて、戀愛行動におよぶのだから、こんなことを見馴れない私などは、逆に赤面するばかりである。

——上海は東洋なのだらうか？　西洋なのだらうか？

映畫のもつ宣傳性の重大さを、われわれは充分に見極めなければならぬ。支那人の肉體を蝕み、精神を傷つけて、遂には支那全土を、米英の植民地化さしめた阿片にかはつて、今日の支那の青年層を蝕みつゝあるのは、アメリカ映畫であるといつても過言ではないだらう。——日本でも昨日までは、こんな状態でなかつたとは言へぬ。

だが、一方では、映畫もまた鋭い近代武器として登場しつゝある。支那全土の皇軍の作戦地區に、支那民衆の宣撫工作の武器として、映畫は前線にまで進出してゐる。

中支方面では中華映畫巡回映畫班が、軍の要望に應へて、前線の皇軍將兵の慰問に、民衆の宣撫工作に、寧日なき活動をつゝけてゐて、既に尊い犠牲者まで出してゐるのである。

私はこゝで巡回映寫班の活動状況を報告する餘裕は持つてゐないが、映畫のほんたうの使命は、こゝにあるのではないかと考へる。

私と席をならべて坐つてゐる長谷川君も、巡回映寫班の一人なのだ。今日、暢氣に私を案内してくれてゐるが、命令があれば重い映寫機やフィルム罐を擔いで、前線の皇軍慰問に出發するのだし、敵地區を突破して宣撫工作へと出動して行くのだ。

私がそんなことを考へてゐる裡に、映畫は最後の字幕を大きく映し出した。私たちは、澤山の觀客にまちつて、グランドの表へ出て來た。

この場合、私達の感想を問はれたら「呆れたものだ」としか答へられなかつたらう。だが「呆れたものだ」とのみではすまされない津が心の底に激んでゐたのも事實である。

「支那の田舎へ行つて、野天にスクリーンを張つて、農民を相手にして映寫してゐる時の方が、上海の豪奢な映畫館で、映畫を見てゐる時より、遙かに楽しい氣がします。一つには、自分達も一種の戦闘員だといふ自負もありますが、映畫といふものは、都會の豪華なサロンで見るものではなく、野外の粗末なスクリーンでも、民衆を心から樂しませるもの

でなければいけないといふ氣がします。どうです。我々と一緒に出かけてみませんか。言葉では説明の出来ないものがありますよ」

「是非行つてみたいなあ。頼みますよ」

今日の映畫見物は、私には確かに無駄ではなかつた。租界に瀰漫するあくどいアメリカニズムとともに、支那人の中に浸透せる英語の普遍性を、われわれは見逃してはならない。

私は北支でも、中支でも、歐米人の作つた中學校、師範學校、大學等が散在してゐるを見て來た。これ等の學校が、支那の教育組織の重要な骨格となつて、動いてゐるのである。

現代の支那に於ける指導者の中で、直接にしろ、間接にしろ、歐米流の教育組織の感化を受けないものは、殆んどないと言つてもいいだらう。

上海にある各大學——震旦、聖約翰、明哲、滬江等の大學があるが、いづれも歐米人の作つた大學か、或は歐米流の教育組織をもつた大學なのである。

これらの學校で、若い支那の青年男女は、數十年に及んで、歐米流の教育を受けられて來たのである。そして、ここを卒業した學生達が、今日の支那の、中権的地位に立つてゐるのだ。

しかも、アメリカなどは、この若い學生達を、アメリカ本國の大學生にまで送つて勉強させてゐるが、その資金がどこから出てゐるかといふと、義和團事件の賠償金等なのである。

歐米人は、かゝる巧妙な手段によつて、支那の神經中権に、彼等の勢力を扶植して行つたのである。従つて、今日の支那の近代的な教育組織といふものの大部分が、歐米流であると云へるのである。

支那全土に浸透してゐる歐米流の中學、師範學校、大學の教育を見て、事變前に日本系の學校が幾つあつたかと考へると、なにかしら愕然としたものを、われわれ感じさせられるのである。在支日本人のための學校はあるが、支那人を教育する日本系の學校は、歐米系の學校が支那全土に設立せられてゐるのに反して、實に寥々たるものであつて、私は寡聞にして支那人のための日本系の大學生、中學生等の教育施設を知らない。漢口で訪れた江漢

中學などが、唯一のものなのではなかろうか。上海にある東亞同文書院大學は、私の知つてゐる範圍では、日本人學生を主としてゐるものである。

こんな状態なればこそ、歐米的な精神が、支那人の骨の髓にまで喰ひ込んで、彼等をして抗日的行動を起させたり、侮日的な態度を執らせるに至つたのではないだらうか。

皇軍の作戦の輔々たる勝利とともに、對支文化工作の問題が切實に考へられる時に、過去に於ける日本の對支工作を、こんな觀點からも充分に研討して見る必要があるやうに、私は思れるのだ。

歐米が對支文化工作の第一歩として、教育組織に着眼し、支那全土に學校を設立したことは、われわれとしても考へなければならぬ問題であらう。

皇軍の占領地では、民衆の宣撫工作として、移動演劇團や巡回映寫班が活潑な活動をしてゐるが、これは勿論、作戦と並行して行はれる宣撫工作であつて、過渡的なものと解釋すべきであらう。

「巡回映寫の時に、支那映畫なども持つて行くのですか」

「勿論、持つて出かけます。しかし、農村には近代式の支那映畫は駄目ですね。古い支那芝居を映畫化したものだと、その喜びやうは大變なものです。文化映畫なんかでも、日本の軍艦や汽車だとか、近代的な小學校などといふものが、彼等の驚嘆の的となるらしいのです」

この話の中から察しられるやうに、われわれが歌舞伎に魅力を感じるやうに、支那の民衆の支那芝居に対する熱狂振りは、われわれの想像以上のものがあるものである。大陸を歩いてゐて、子供でも、女でも、苦力でも、何か歌を唄つてゐるとすると、その歌は必ず支那芝居の一節だと言つても過言ではなかろう。

支那映畫でも、古い支那芝居の中から取材したものだと、いつも壓倒的な人氣だといふのである。移動演劇團などでも、日本の新劇まがひの芝居よりも、支那芝居の一節を利用する方が、はるかに民衆の關心を牽きつけるらしい。

文學、美術、音樂等々と文化工作の面は、廣く大きく、多種多様である。だが、ほんたうに根を下ろした文化工作は、教育の問題なのではなかろうか。日本系の學校をどしどし

開設してゆくことが、十年後に、二十年後に、大きな實を結ぶと考へられるのである。

英語が、今日の支那に瀰漫して、彼等の思想までもが歐米化してしまひ、日本に對して反抗的態度をとらしめるのは、日本に對する理解のないことが大きな一つの原因と考へられる。

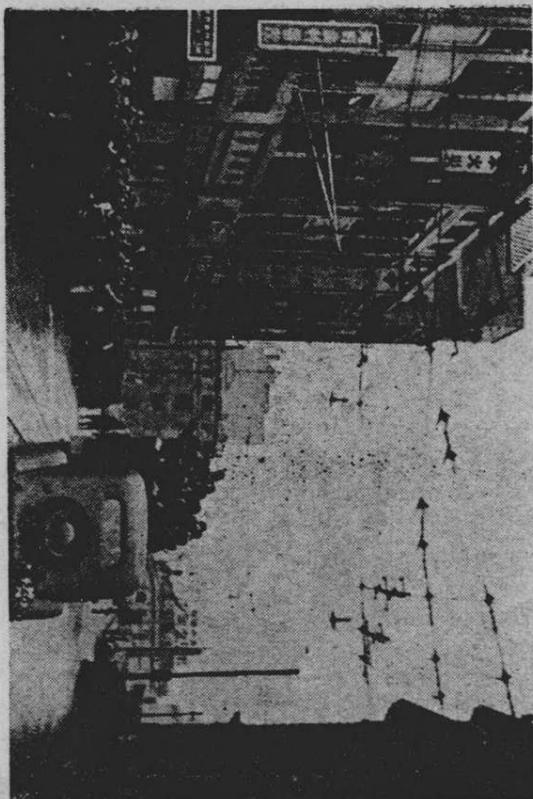
日本の軍艦や飛行機を見て、

「あれは日本で作つたのか」

と、不思議さうに質問する支那人が、今日でも、相當の知識階級に多いといふことは、雄辯に彼等の日本に對する認識の不足を物語つてゐる。

われわれは、儼然たる大東亜建設の事實を、彼等の眼前に突きつけて見せると同時に、支那の若い時代のために、先づ東亜的教育組織を確立する必要があらう。——歐米的思想から解放し、彼等の從來の思想を根本から鍛え直すために。

——昭和十六年十二月七日。私は夜になるまでの時間を、宿舎の一室で、私のメモとして、ノートに、こんなことを書きしるしてゐた。



支那艦艇の夜の飛行機を駆逐する

十二月八日の上海

世紀の砲撃

曉闇の空を、断雲が流れ、黄浦江上の船舶の帆檣に掲げられた赤や青の船燈が、暗い江上に明滅してゐる。

ブロードウェイ・マンションの、蘇州河に面した窓々も、深く帳を下ろし、巨大な影を闇の中に浮かしてゐる。黄包車の車夫が、蹴込みに凭れて、霜の降るのも知らぬげに睡りこけてゐた。

雨氣を含んだ断雲が、上海の夜空を音もなく流れゆくばかりで、江上は小波もなく静まり返つてゐる。モーター・ボートの波を切る音が、微かに傳はつて来る。

……パン、パン

乾いた様な拳銃の音が、江上に響くと、すーと夢のやうに真紅の火花が、江上の闇空に上つて消えた。何だらうと思ふ一瞬もなく、

……グワーン！

物凄い火線と轟音とが、私の耳を裂き、腹の底をぐーんと搖がせて、江上に轟き渡つた。

一發、二發、三發……殷々たる砲聲は、大上海の巨大な建物に反響して凄まじい。續いて唸るやうな重機関銃の炸裂音！ 火花のやうな曳光弾！

（何が！ 何が起つたのか！）

私は眼前に炸裂する銃砲弾の凄まじい轟音に、茫然として眼を瞠はるばかりだつた。江岸から凄まじい勢ひで、奔流のやうに發射される銃砲火は、浦東側に碇泊してゐる船——英砲艦ペトレルへ集中されてゐるらしい。

（確かにペトレルだ！）

物凄い火焰とともに黒煙を噴いてゐるのは、昨日、この江岸から見た英砲艦ペトレルの姿なのである。黒煙は、濛々と曉闇の空に、火焰にあふられて、奇怪な影を投げかける。

火焰は江上を眞紅に染めて、艦影をはつきりと浮び上させてゐる。胸を衝く機関銃の連

射音が、江上を斜めに縫つて、螢火のやうに飛散る。

(米砲艦ウエークがゐた筈だ!)

私の頭はやうやく思考を取り戻したらしい。

ペトレルの猛烈な火焰に照らされて、同じく黃浦江上に浮んでゐるウエークの眞白な船體が、くつきりと焼けつくやうに見える。

(あツ！ 白旗！)

ウエークの檣頭には、一流の白旗が、火勢にあふられるやうに磨いてゐる。今まで熾烈だつた銃聲、砲音は、ぱつたりと絶えて、死のやうな静寂さが、一瞬、江上を鎖してゐるが、私の耳底には、依然としてまだ轟音が断續的に響き渡つてゐる。

(何が起つたのか？)

燃へ上つたペトレルは、断末魔の黒褐色の煙を一筋、江上に漾はして、沈んでしまつたらしい。ウエークの艦影も、もう定かには見分けられない。しかし、曉近い空には、ほのかな曙光が射して來た。

——轟音が夜空を慄はせる。

一機、二機——青い翼燈が流星のやうに、断雲を縫つて旋回してゐる。

又、ひとしきり機銃が、鋭い連射音を響かせる。

私は又しても、自問自答した。

(何事が起つたのだらう)——だが、解答は出て來ない。英砲艦は撃沈され、米砲艦は白旗を掲げてゐる——これは何を物語るのか。

飛行機から、さツと黒い塊りが投げられ、見る見るパツと散つて、上海の街の上へ散つて行く。明けやらぬ夜空にも、傳單らしいと察せられる。

次第に人影が浮び上り、顔の表情が讀まれる。夜が明けて來たのだ。銃剣を構へた陸戦隊の勇士達の姿が、やうやく明瞭になる。緊張した表情の中にも、明るい喜色が、勇士達の顔の色にうかゞへる。

怪訝な顔をして、茫然と立つてゐる私の顔は、どんな表情をしてゐたであらうか。ふと仰ぐと、虹口側のプロドウエイ・マンションの窓々を始め、蘇州河に面した建物の窓々に

は、煌々たる電燈が點けられて、どの窓にも、ちッと黃浦江の邊りを凝視してゐるらしい人影で溢れてゐた。

飛行機は、まだ共同租界の上を、かなりの低空で旋回してゐる。

(再び上海が重慶軍に包囲されたのか。莫迦、莫迦しい。だが、英艦、米艦はどうしたといふのだ)

私の思考は、又しても、どうどう巡りを始める。

ダダダ……。ダダダ……。機關銃の連射音が、最後の止めを刺すやうに、断續して、再び響き渡つたと思ふと、江上は、音もなく静まり返つた。

——さうだ。報道部へ行つてみよう。

私はさう考へると、ふツーと思はず息をついた。

昂奮の醒めやらぬ私は、足早やに日本電信局の横を抜けて、報道部へと急いでゐた。

——正直な話が、昨夜、上海の友人達と共に租界を一巡して、虹口側へ歸つてから、深夜まで語り明かしてゐて、宿へ歸らうと一人で歩いてゐる私の眼に、陸戦隊の勇士達が、

鋪道を共同租界の方へと進んで行く軍靴の音に氣付いて、暫く忙然と立ち止まつてゐたのだつたが、何故ともなく深夜の警備にしては變んだと思つたばかりに、物凄い砲撃を目撃することになつたのである。

虹口側の街は、あの物凄い砲撃を聞いた街とも思はれぬほど、人影もなく静かである。黃包車曳が、ぽかんとした顔で立つてゐる。報道部への途中、ふと思ひ出して、同盟通信社の階段を駆け上つたが、人影もない。私は再び階段を駆け下りて、北四川路を走つてゐた。軍隊の乗用車が、租界の方へ物凄い勢ひで駆り去つた。

さツ——と霧のやうな雨が降り出した。私は走りながら、路の向側の、店頭の飾窓に、人だかりのしてゐるのを見つけた。

驟雨に濡れた鋪道を横切つて、私はその人達の間から覗き込んだ。

(八日午前六時大本營發表) 帝國陸海軍は本日未明西太平洋において米英と戰闘状態に入
れり。

筆蹟は昂奮を物語るかのやうに、勢ひよく、肉太に墨跡をにじませて書いてあるのが、私の眼に喰ひ入つた。

——これだ！

私は、今曉の眼前の砲撃が、何んであつたかと分つて、一切の混沌たる思考が、す一つと開けて行くやうに、何か叫び出したい衝動を感じた。

——畜生ッ！ これだ！ これだ！

一瞬、譯の分らない温い涙のやうなものが頬を傳ひ、ほのぼのとした明るい氣持が、湯のやうに湧いてくる。この發表に読み耽けつてゐる人達の顔には、ぐつと唇を噛みしめた緊張感とともに、どこやら暗雲の晴れたやうな明るさが見られる。

驟雨は晴れ間を見せては、街路を清めるやうに、又してもサツと、霧のやうな細い雨を降らして行く。なにか心温い雨である。

雨の中を、私は又駆け出してゐた。

——すると、軍使の頭の上を、第一發がすゞ飛んだんだね。

——さうなんだ。赤い信號弾がすーと上つたと思ふと途端だよ。

報道部の寫眞班の一人が、いささか頬を紅潮させ、語調に、今曉の凄まじい砲撃の昂奮を見せて語つてゐる。

南京の總軍報道部の高山中尉の姿が見える。

「よオ、今朝の砲撃を見たかね。僕達はたつた今着いたばかりだ。得平中佐殿も來てゐられるよ。だが、君はいゝ時に上海へ來てゐたもんだよ」

さう言ふと、高山中尉は忙しさうに階段を駆け上つて行つた。

窓から見える報道部の門内には、數臺の自動車がずらりと並んで、細雨にたゞかれてゐる。陽光が、時折ちちらりと射してくる。緊迫した空氣が、報道部の建物をつゝんで、人々の往來も遠しい。

——集合！

私はガランとした一室で、辻久一君を摑へて情報を聞いてゐたが、命令の聲に、辻君と一緒に起ち上つた。集合室には、報道部の全員が整然と並んでゐる。私もその末尾に附して並んだ。

——氣をつけッ！

號令一下、全員はさッと姿勢を正す。秋山報道部長の毅然たる聲が、私の耳朶に響いてくる。

——邦家の大事は、既に決せられたのであります。今晩六時、大本營陸海軍部は、帝國が米英兩國と西太平洋に於て戦闘状態に入りたることを發表し、諸子の聞かれた殷々たる上海の砲聲は、米國の砲艦一を降伏せしめ、英國の砲艦一を黃浦江の藻屑と化したものであります。今や上海は第一線となりました。軍は、本午前十一時を期して、共國租界に進駐を行ひます。こゝに命令を傳達します。命令――。

集合室の天窓からは、明けはなれた朝の空が、曇つてはゐるが、人々の顔を明るく浮び出さしてゐる。

租界進駐！ 租界進駐！

今日こそは、あの敵性租界へ進駐するのだ。湧きたつやうな感激が、電光の如く心を擗はせる。

今日の如き偉大な朝が、日本の歴史にあつただらうか。

日本は決然と起つて、米・英と乾坤一擲の戦争を開始したのだ。かゝる偉大なる歴史の轉換を要求するよき日に、私はよくぞ上海に居たものだ。

上海——米・英が東亞侵略の根據地とし、重慶が抗日の最前衛據點とした上海共同租界へ、堂々の進駐をするといふのである。彼等の根據地を一舉に殲滅する絶好の日なのだ。あの敵性を、租界から完全に一掃してしまふのである。

……私の眼には、九江の近くの江岸にあつた米國旗の描かれた數個のタンクが、漢口の碼頭にあつた英・米の國旗を船腹に描いた商船の姿が、大陸の各地の、十字架の尖頭を見せた教會堂の建物が、判つきり焼けつくやうに浮んで來た。

——陸軍報道部は、租界内の新聞社、放送局などの文化的機關を接收する。

——勿論、平和的接收を行ふべきだが、抵抗するものがあれば、断乎たる處置をとる。秋山報道部長の命令が、力強く低い天井の部屋に、一句一句響く。報道部員の部署が、それぞれ傳達される。

——敬禮！

私は我れに返つて腕時計をのぞく。十一時までには、未だ三時間餘りある。

（さうだ。是非とも、この租界進駐に参加させて貰ふのだ。こんな機會は、二度とあるものではない）

私は、直ぐに得平中佐を擱へた。

——お願ひです。進駐に参加させて下さい。

——うん。だが、我々が接收に行くのは、敵性放送局だ。危いかも知れんよ。

——いや、構ひません。

得平中佐は笑ひながら、

——ちや、報道部長に相談して上げよう。

私は得平中佐の後に隨つて、報道部長室への階段を上つた。

租界進駐を目前にして、部長室は多忙を極めてゐる。名刺を差出し、得平中佐を通じて進駐參加を懇願する。

——よし、では階下で待つて！

階下への階段を下りながら、私は心の裡で（萬歳！）を叫んでゐた。

「どうした！」

「よオ！」

南京では、背廣服姿ばかり見てゐた同盟の長谷川仁君が、從軍服も勇ましく聲をかける。

「進駐！ 進駐！」

「参加するのか。よかつたな。だが、危いぞ」

危いも、危くないも、私には問題ではなかつた。北支、中支と戰闘を追ひかけて、戰闘に巡り會はずに、このまゝ内地へ歸るのかと諦めてゐた矢先である。兵隊でない限り、こんな幸福に二度と逢へるものではない。

「嚇かすなよ」

私は冗談を言ひながら、報道部を飛び出すと、黃包車を拾つて、空腹を充すべく宿へ歸つた。

「腹が減つては戦が出来ぬ。腹が減つては戦が出来ぬ」

私は譯の分らんことを呟いてゐた。どうも昂奮してゐるらしい。だが、これは昂奮してもよささうである。いや、昂奮するのが當然であらう。私は宿で朝食をすませてから、荷物の整理をして、部屋の一隅にきちんと置くと、又街路へ飛び出した。

進駐までには、未だ充分に時間がある。

私はもう一度、今曉の砲撃の跡を、よく見て置きたくなつて、蘇州河畔へと、踵をめぐらした。ガーデンブリッヂ萬國橋も、四川路橋も、白渡橋も、陸戰隊と日本憲兵隊とが出動して、群がる中國人を完全に制し、交通遮断をしてゐる。

憲兵隊や、陸戰隊員の表情にも、どこか晴々とした明るさが見える。

黃浦江岸の日本領事館近くの岸壁へ出て見ると、黃潤した江上には、朝靄がうすく罩め

てゐて、あの猛烈な砲撃の名残りなどはどこにもなく、河は静かに流れてゐる。たゞ、昨日と違つてゐるのは、常には右往左往してゐる夥しい戎克ヨウクが、風に吹かれた芥のやうに、江岸に蝋集してゐて、旭日旗を船尾に翻へした海軍のボートが、唸るやうな警笛の音も明るく、濁流を蹴つてゐることだつた。いや、そればかりではない。ウエークの艦橋高く、白旗は既に引き下ろされて、海軍旗が燐として光つてゐる。まだある。昨日まで英國旗を高々と掲げて、江上を我物顔に航行してゐたチャーデン・マデソンの汽船の帆檣に、一隻残らず、日本の旗の翻へつてゐるのも、確かに昨日に變る風景であらう。

パブリック・ガーデンの黄色く色づいた樹々が、江上に影を落してゐるのだが、何か眼にしみて見られるのである。

浦東の工場地帯の上空には、諦め切れぬやうな一團の灰色の雲が、朝陽の逞しい光りを受けて、眞紅色から橙色へと染め上げられながら、静かに流れてゐて、その奥に綠青色の澄んだ空をのぞかせてゐた。

日本時間と上海時間とでは、一時間の差があるので、進駐開始の十一時は、上海時間で

は十時なのである。私の時計は、日本時間の十時を示してゐる。そろそろ報道部へ行かうと、北四川路の通りへ向つた。

街路は、日本人や支那人で一杯に溢れ、街頭に貼られた各新聞社の速報の號外の前は、黒山のやうな人ばかりである。支那文の號外も散見し、支那人の異常に緊張した顔が、速報を凝視してゐる。號外と並んで、大日本陸海軍の支那文の布告が、飾窓や練瓦墀に貼られてゐた。布告には、

——日本軍は今朝より東亞の秩序を脅かす米英勢力と西南太平洋に於て、戦争状態を開した。租界も、今日限り日本軍の管理下に置かれる。日本の望むところは、要するに租界内の中國民衆の安居樂業であり、その生活は充分に保護するものである。中國人は安んじて、その業につけ。但し、日本軍の命に反し、また敵性行爲をなし、武器などを隠蔽する者は、軍律の定むるところに照して、嚴重に處罰するものである。

といふ意味の嚴然たる内容のものだつた。

今こそ、東亞の天地から、米英の勢力を完全に、根こそぎ驅逐して、東亞をして眞の東

亞たらしめるのだ。

(これだ。これでなくては……)

私は自分でもおかしい程、この布告を拾ひ読みしながら、布告の一宇一宇に背づいてゐた。

人波を縫ふやうに、激しい警笛の音をさせて、軍用自動車が疾風のやうに、雨で洗はれた街路を、篭のやうに走つてゐる。太陽は雲を破つて、すがすがしい光りを投げ始めた。

(あツ、虹だ)

私の側を擦れ違はうとした人が、ふと空を見上げて立ち止まると、呟くやうに叫んだ。空を見ると、大きな幅をもつた鮮やかな虹が、敵租界の上に、見事な圓を描いて懸つてる。——皇軍の租界進駐を祝福する歓迎門でもあるかのやうに……。

報道部の門内は、出勤を前にしてびーんと緊張してゐるが、どこかに一脈の賑やかさが漂つてゐる。

「おい、君は武器を持つてゐるのか」

長谷川君が、腰の拳銃のサックを叩いて見せた。

「武器……いや、持つてないよ。そんなもの必要なのかい」

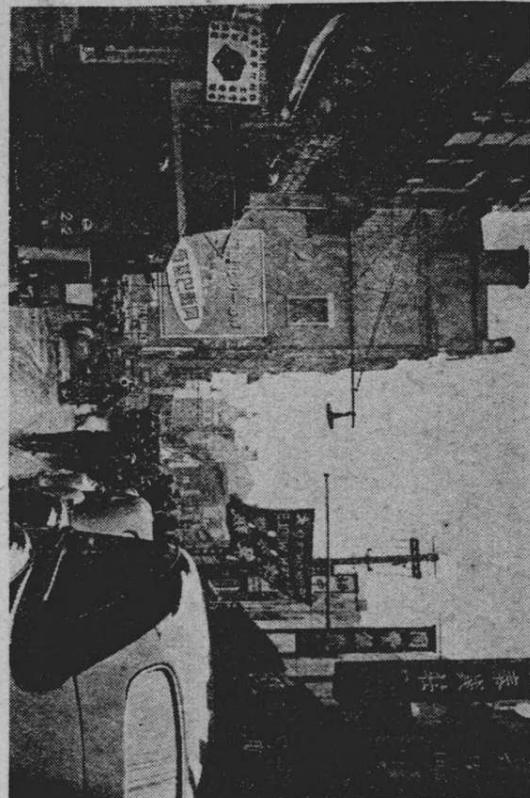
「暢氣な奴だ。もうないかも知れんぞ」

私の頭は、租界進駐といふことばかりで一杯になつてゐて、危険を伴ふかも知れない。

敵性文化機關の接收といふことを、すっかり忘却してゐたのだ。

「仕方がない。何か武器らしきものでも持つて行くか」

結局、私は頑丈な鐵製の捻廻しを探し出して、ジャンパーのポケットに忍ばせた。我ながら珍妙な武器であるとは思つたが、鐵の肌ざわりは、ひんやりと掌に冷たく、氣強さを興へてくれるるのである。



軍皇るナ駐進を路川四界租同共

租界進駐

——集合！

十時三十分、租界進駐に出動する報道部の全員は、報道部の門内に整列する。霧雨が、再びさーつと降つたかと思ふと、燐々たる陽が輝き始めた。

報道部長の訓辭を受けて一班、二班と別れて、自動車に乗り込む。

「おい、確りやれよ」

高山中尉が、緊張した瞳を、眼鏡の奥に光させて、私の肩を叩く。

私は得平中佐の指揮される第一班の自動車の操縦席に、キヤメラの堀野正雄君と並んで腰を下ろした。自動車は豪華な流線型の乗用車だ。

いよいよ進駐である。長谷川君は何班に属するのか、まだ門前に立つて、我々に向つて手を振つてゐる。自動車は雨に濡れた鋪道を、一直線に北四川路に沿つて駆つて行く。我

我的前には、陸戦隊を萬載したトラックが幾臺も續いてゐる。後部にも陸戦隊のトラックが續いてゐる。

兩側の歩道は、日本人や支那人で一杯に溢れ、ホテルの窓から大きな日の丸の旗が、萬歳！ 萬歳！ の聲とともに振られてゐる。歩道の日本人は、両手を高く上げて、萬歳を絶叫してゐる。

トラックの上の陸戦隊の勇士達も、これに應へて高らかに手を振つてゐる。

「……いいなア」

誰からともなく、そんな聲がする。この光景を、私達は他に形容する言葉を知らない。單純なこの言葉に、私達の感情が充ち溢れてゐるのだ。

私達の自動車も、堂々たる租界進駐の行進の隊列の中にあるのだ。鮮やかな日章旗を、車體の先頭に翻へし、報道部の印をつけた自動車にも、萬歳の聲が浴びせかけられる。私の心は、この租界進駐に參加しつゝある感激に慄へ、ぐつと胸に迫るものを感じる。私は腕に巻いた報道部の腕章を、しつかり掴んでゐた。

四川路橋を渡ると、道の兩側は支那人で一杯で、既に橋近くの敵性建築物には、海軍旗が翻へり、陸戦隊の装甲車が、嚴然たる偉容を見せて進んでゐる。この周圍一帯は海軍側の接收地帶らしい。陸續とつゞくトラックからは、銃剣を閃めかして、黒の戰闘帽に水兵服の兵士達が、バラバラと飛び降りると、さつと配置について行く。

支那人達が緊張した顔で、刻々と變化して行く租界内の事態に眼を瞠つて、茫然と立ち竦んでゐる。日頃の喧噪を忘れたかのやうに……。

我々の自動車は、陸戦隊のトラックの横を擦り抜けて、租界第一の繁華街——南京路を目指す敵性放送局へと突進する。繁華街の朝は遅いらしく、人通りもまだ多くはない。今だに、今朝の銃砲聲が何を物語るかを理解してゐないらしい支那人達が、我々の自動車を不思議な顔をして見送つてゐる。黃包車に乗つた支那人が、悠々たる様子で、紫煙を燻らせて擦れ違つて行く。——昨夜の歡樂に疲れて、目の醒めやらぬ街の姿は、白々しくうそ寒い。自動車は、南京路を突きぬけて、靜安寺路の十四階のパーク・ホテルが、覗き込むやうにしてゐる競馬場を、馬霍路へ曲がらうとする角で、ぴたりと停止した。

ここには、轟々たるキヤタビラの音を響かせて、陸軍の戦車隊が進駐してゐて、先頭は既に競馬場に沿つた道跡に、逞しい姿を見せてゐた。滬西方面から進駐して來たのである。この一帯が陸軍側の警備地盤となるのであらう。

競馬場の周囲は、支那人が遠巻きにして、日本軍の偉容に呆然たる様子である。我々は馬道路を真すぐりに、太沽路の角へ進んだ。

「まだ十一時まで十分ある。みんなの時計を合はして置かう」

街角からは、無数のアンテナを屋上に張つた放送局の建物が、眼前に見えてゐる。我々は得平班長の言葉に、各自の時計の針を合はした。携行した武器を調べてゐる。私はボケツトの捻廻しを、ぐつと握りしめた。

「よし、十一時だ」

我々が街角を離れて、放送局の方へ、鋪道を横切らうとした瞬間、後方から來た軍用トラックが、びたりと放送局の前で止まると、三四人の兵士がバラバラと飛び降りた。そして、指揮官の若い將校のキビキビした命令で、直ちに配置につかうとしてゐる。

得平班長を先頭に、我々も駆け出した。得平班長が指揮官と、二言三言話をしたと思ふと、さつと舉手の禮をして、若い將校は、ひらりとトラックに身を翻へすやうにして上ると、警備の兵隊を残して、トラックの兵隊と共に、舊地にいづこへか駆り去つて行つた。
(さア)

得平中佐は、無言のまゝ、放送局の扉の方へ進んで、入口の呼鈴を押した。

一瞬、二瞬……さつと流石に緊張感が、私の體内を流れる。
扉が細目に開けられて、白い顔がのぞいた。間髪を入れず、我々はさつと放送局の内部へ乗り込む。放送局の表も裏も、既に嚴重に固められてゐる。

だが、このアメリカ系の放送局——華美無線電機公司(X M H A)には、たゞ二人の白系ロシアの女と、一人の支那人の雇人があるだけだつた。この放送局の局長のアメリカ人は、まだ姿を見せてゐないのである。

上海の外人達は、まだ徹宵の歡樂の疲れで、睡り果けてゐる時刻なのかもしれない。それとも、今朝の砲撃に狼狽して、上海の街のどこかに、身を潜めてゐるのであらうか。

だが、もう袋の中の鼠と同じことである。

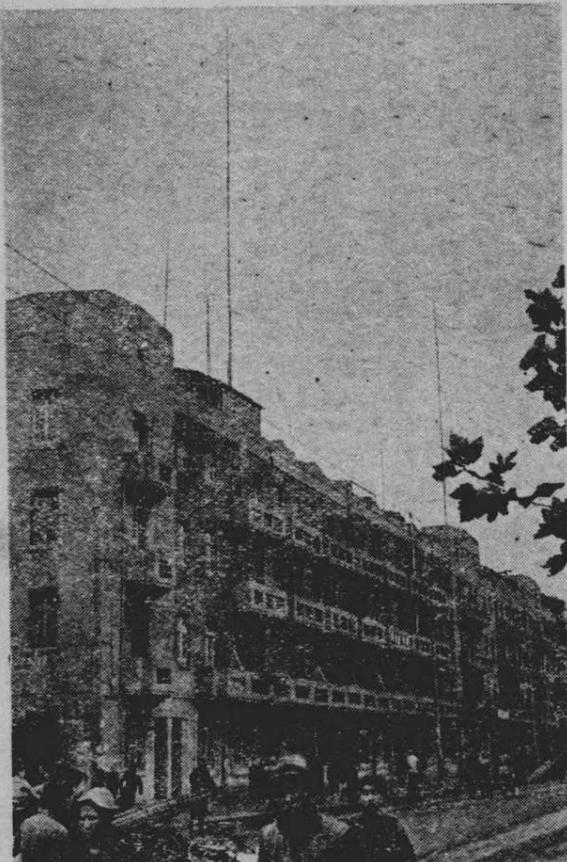
白系ロシアの女達を相手に、接收事務はキビキビと片付けられ、一切の器物には、日本軍接收の封印が貼られる。女達の訊問も、穏やかに進められてゐる。彼女達は別に不安さうな面持ちもなく、諦めに似たやうな表現を見せてゐるだけだ。

「この女の御亭主といふのは、マリンださうだよ」

得平中佐の穏やかな顔に微笑が浮ぶ。私も側で聞くともなく聞いてゐた。流暢な英語なので、断片的にしか分らないが、亭主のアメリカ陸戦隊の兵隊は、アメリカか、マニラ邊へ連れて行かれてしまつたらしい。

私は上海の碼頭でボロボロと涙を流して、アメリカの兵隊達と別れ惜しんでゐる女達――所謂チャイニーズ・ワイフ達の顔を、大寫しに撮つた寫真を見たことがある。この白系ロシアの女達も、その仲間の人だつたのだらう。

張りつめた緊張が弛んで、ポケットの捻廻しにも用がなくなつたので、私の心にも餘裕が出て來た。



街角より敵性放送局 X A R M の全景を望む

警備の兵士の一人が、

「屋上に旗を立てたいのであります。が、よろしいでありますか」と、得平中佐の許可を求めて來た。

「よからう」

私達は兵士の後から、屋上に出る階段を探した。

馬^ホ雀^{カル}路^ルの角から見た放送局は、大きな建物に見えたが、この建物は、三階建のアパートになつてゐて、放送局はアパートの階下の一隅を占めてゐるに過ぎなかつた。だが、この放送局は、昨日までは重慶側と策謀して、反日宣傳に狂奔してゐたのである。放送局は小さくとも、機械類は優秀らしい。

「どうです。機械類は？」

「相當なものですよ」

薄暗い機械室へ潜り込んで調べてゐる技術者の方に訊くと、さうした返事だつたのを見ても分かるのである。

私達はぐるぐると階段を駆け上り、支那人の住んでゐる部屋を通り抜けて、挨拶をしながら屋上へ出た。竹竿の古いのを探し出して、早速屋上高く日章旗をかゝげたのである。

「紀念に寫真を撮りませう」

堀野君のカメラの前に、日章旗を仰いで立つた。

階下へ降りながら、私は何故ともなく兵隊に訊いた。

「君の部隊はなんといふのですか」

「〇〇部隊松本隊です」

「えツ、では〇〇に居たことがありますか」

「はツ、〇〇に居りました」

「ちや、隊長は松本三郎と言はれませんか」

「さうであります」

偶然——正しく偶然なのである。内地を出發する時に、私は牧野英一君——新太陽の編輯長で、蘆山の金輪峰の激戦に有名を轟かし、南昌攻略戦では一番乗りの偉勳を樹てた歸

還中尉——から、中支へ行つたら訪ねるやうにと、松本隊長への紹介状を持つてゐたのだ。

「ちや、先刻の將校の方が隊長ですか」

「さうであります」

私はその兵士に名刺を托して、後日を期して訪れる旨を認めたのだった。

階下の放送局では、張り合ひ抜けして、いささか手持ち無沙汰になつた一同は、ピアノなどを弾いてゐる。

「樂しき接收ですね」

明るい笑聲が、放送室内に朗らかに響く。

「さア、これでよし、我々は引きあげることにしよう」

得平中佐の命令の下に、入口の扉は嚴重に封印され、英支兩文で書かれた（大日本陸軍占領——此の建物を破壊若くは物品を移動する者は嚴罰に處す可し）といふ佈告が貼りつけられた。この附近は静かで、人通りも餘りなく、道路の向ふに二三人の支那人が、屋上の日章旗を仰いでゐるのが見られるくらいだつた。二人の白系ロシアの女も、支那人の傭

人も自由に解放して歸らせしまつた。

「グツ・バイ」

彼女達は、別に豪華さうな様子もなく、別れの言葉を残して、何處へか歸つて行つた。
「さア、街の様子を見ながら歸るか」

自動車は、米・英租界と佛蘭西租界を割する愛多亞路——アベニュ・エドワード七世路を一直線に、黃浦江の江岸へ向つて滑つて行く。佛蘭西租界への入口になる路々には、鐵條網やバリケードが築かれてゐて、佛蘭西の警備兵が、派手な軍服を着て、碧い眼を光らしながら、支那の民衆の前に立つてゐる。

出入を遮断された支那人達は、鐵條網やバリケードを挟んで、躊躇してゐる。

この佛蘭西兵にしても、支那人にしても、日本が決然と起つて、米・英を相手に戰端を開いたことに、どんな感情を抱いてゐるだらうか。——私はふつと、そんなことを考へた。

自動車は江岸に沿つて進んで行く。黃浦江を壓して建ち並んでゐる巨大な建物——四角

な形の上海香港銀行や、白い大きなドームのやうな江海關などの建物にも、今は海軍旗が翻へつてゐて、江岸は日頃の喧噪を忘れたやうに静かで、常に江岸を埋めてゐる苦力の姿もなく、海軍の將兵の姿の外には、人通りもない。

「あツ、イタリーの旗！」

自動車の窓をかすめて、ある建物の入口に、小さいイタリーの旗がぶら下げるゝのが見られた。その旗が、餘りにも小さかつたのが、私達の微笑をさそつた。

江岸の世界大戰平和紀念塔の前には、海軍の警備兵と陸軍の警備兵が、銃を構へて立つてゐる。黃濁した江上には、日本の軍艦の灰色の姿が周圍を壓し、捕獲された英米系の汽船やウエーク號が、冬風に曝らされて浮んでゐた。

英艦ペトレスを、濁流の底に呑み込んだあたりには、水鳥が悠々と輪を描いてゐる。

英國總領事館の金色燐然たる紋章をつけた鐵柵の門前には、海軍部隊の精銳が、嚴然として警備してゐる。葛の絡まつた赤練瓦の建物が、芝生の向ふに空しい姿を見せて、岑寂と音もない。

この建物の奥で、昨日まで如何なる謀議がつゞけられてゐたことか——敵が東亞侵略の根據地とし、又重慶が抗日の前衛據點とした上海に在つて、惡辣な策動をつゞけてゐたのも、この建物だつたのだ。だが、それもこれも、今は傍い野望に過ぎなくなつたのだ。

自動車は英國總領事館の辯にそひ、蘇州河を渡つて北四川路の通りへ出た。日本人商店の飾窓といふ飾窓には、ベタベタと新聞社の速報が貼られて、人々が黒山のやうに集つてゐる。ラヂオが大きな聲を響かせてゐるのが、自動車の中まで響いてくる。

報道部の前庭で自動車を降りて、私は得平中佐に禮を述べると、再び街頭へ飛び出した。一刻も早く飾窓に貼られた速報が読みたかつたのである。

飾窓に貼られた速報の文字は、勢ひ餘つて、跳ねるやうな筆勢を見せてゐる。
——ハワイ、真珠灣、マレー、ミニラ、ウエーク、グアム……西太平洋に於て戦争状態に入つたとは知つてゐながら、これは餘りにも、素晴らしい文字である。

私が上海で、英艦擊沈を目撃してゐた瞬間に、我が海軍航空部隊は、果敢にもハワイの真珠灣に、猛烈な爆撃を喰はしてゐたのだ。いや、西南太平洋一帯に米・英擊滅の必中弾

が、時刻を一つにして火蓋を切つてゐたのだ。

陸軍部隊は潮の殺到するやうに、マレー半島への敵前上陸を敢行してゐたのだ。フリーヴィンにも、香港にも……。私は速報の一字一句を喰ひ入るやうに、食り讀んだ。

店内のラヂオが、壯重な響きに變つた。私は店頭へ近づいた。

それは、長くも對米・英宣戰布告の大詔が捧讀されてゐたのだ。私は、いや、周囲の人人は、さッと姿勢を正し、頭を下げて懸命に耳を澄ました。

御大詔捧讀の聲が、心なしか震へて聞える。いや、私の心が感激に慄へてゐるのであらう。涙が頬を傳ふのを、私はそのままにして聞き入つた。その放送が終るか終らぬかに、肅然として佇んでゐた群衆の一人が叫んだ。

——大日本帝國萬歳！

聲は感激に打ちふるへてゐる。その聲に和して、男も、女も、子供までが、感激に瞳をうるませて、心の底から力一杯に、海を越へて、内地までも響けと、双手を上げて叫んだのだつた。

私も亦、その群衆の一人だつた。

街を行く日本人の顔は、緊張に輝いて美しい。私の足は、又しても蘇州河畔の方へ向いてゐた。河向ふの江岸あたりは、まだひつそりと静まり返つてゐる。空を仰ぐと、何時の間に上げられたのか、競馬場附近と覺しきあたりの、薄曇りした空にアドベルーンが上げられてゐて、

—日軍保確租界治安

の文字が、上海の街を見下ろしてゐた。そのアドベルーンを見ながら、私はなんの聯絡もなく、南京にある草野心平氏の言葉を想ひ出してゐた。

(日本はいいなア、日本はいいなア)

詩人らしい情熱をこめて、讃仰するやうな調子の、草野氏の言葉が、沁々とした實感となつて、私の胸に響いてくるのだ。

(日本はいいなア、いいなア、日本は)

私は低く聲に出して、繰り返し、繰り返し呟きながら、いつか歩き出してゐた。



兵憲軍らるす備警を近附界世大街華繁の海上

變貌する租界

進駐の午後（一日目）

虹口から共同租界へ、共同租界から虹口へと往來する群衆で、四川路橋は滾れるほどの雜踏を見せてゐる。橋の中央部は、車道になつてゐて、人々は兩側の歩道を一列になつて渡つて行くのだが、朝から晩まで織るやうな人の流れである。

今日も、日本軍の堂々たる租界進駐が行はれた午後なのだが、ここばかりは日頃の雜踏と變りはない。いや、昨日にもまして、物凄い雜踏なのである。

私は進駐後の共同租界が見たくなつたので、群衆に混じつて四川路橋を渡つた。

橋を渡ると、昨日まで星條旗のぶら下がつてゐたアメリカン・ネエビイ・クラブの豪奢な建物の前に、迷彩をした日本海軍の戰車が停つてゐて、戰闘帽に鐵兜を背に負つた陸戰隊の勇士達が、盛んに出入してゐる姿が見られ、大きな海軍旗が（〇〇ぶたいほんぶ）と書かれた玄關に、眞紅の色も鮮やかに立てられてゐた。

租界の雜踏は物凄く、肩々相摩すどころではなく、人の流れに押されるしかないので、遅々として進まない。その雜踏の中を搔き分けるやうにして、無軌道電車が駆り、二階付乗合自動車が、巨體を軋しませて疾走するかと思へば、黃包車が小川の目高のやうに、人波を縫つて、宙を飛んで走る。

昨日にもました雜踏である。それに今日は、街の要所、要所に貼られた工部局の對日協同聲明の、華文と英文の布告を讀む群衆や、日本軍の布告に喰ひ入る様に囁りついてゐる群衆で、人の流れは喰ひ止められてゐる。

英文の布告の前には、米英人らしい姿が、いつまでも立ち停つて、動かうともしないのが見られた。

人の流れの中を、新聞賣子が裸足で、何か大聲に叫びながら、新聞を賣りつけてゐる。

賣子の抱へてゐる新聞を見たら、昨日まで租界内では絶対に見られなかつた「新申報」だつた。

「新申報」は汪精衛系だとか、日本系だとか言つて、租界内では滅多に見られない新聞だ

つたのだ。一發の銃聲を響かせることもなく、疾風迅雷的に、平和的無血占領をした皇軍

の周到な機敏さが、この租界に、昨日に變らぬ雜踏を見せてゐるのであらう。

中國銀行にも「日本軍占領」の布告が貼つてあつて、警備の兵士が立つてゐる。街の所

所で、敵性建築物の接收に歩いてゐる部隊の行進するのが見られた。

トラックに食料や毛布を滿載した陸戦隊が、接收した「〇〇ぶたい」の建物の中へ、そ

れらの荷物を運び入れてゐるのが見られる。

租界内の商店は、まだ店の鎧扉を鎖してゐるのが多かつたが、それでも店を開けてゐるのも、ぱつぱつあるにはあつた。だが、錢莊といふ錢莊は、嚴重に扉を下ろしてゐて、一軒も店を開いてはゐない。

——失敗つた。これでは黄包車にも乗れなければ、飯も食へない。

私はこれには、全く當惑してしまつた。何しろ、私の懷中には、日本の軍票があるだけで、一文の法幣も持つてゐなかつたからである。

——さうだ、中華映畫へ行つてみよう。

南京路を横切つて、四馬路の四つ角にあるハミルトン・ハウスへ足を向けた。中華映畫の事務所のあるハミルトン・ハウスも、それに相對するデベロップメント・ハウス、メトロポール・ホテルなどは、何れも十數階のビルで、こゝだけは太陽の温い光線から遠く、下から仰ぐと谷底にゐるやうな感じがする。

もう一つの角には、工部局の薄暗い陰氣な建物が、深い蔭を落してゐる。
これらの巨人の群り立つ様な建物は、いづれも、英系ユダヤ人のサツスーン財閥のビルディングなのだが、もう既に海軍側によつて接收されてゐた。ビルの玄關脇には、憲兵隊が出張して、出入の人々を監視してゐる。

私はつかつかと、三臺並んだエレベーターの、降りて來たばかりの、中央の一臺に乗つた。

——あツ、これは……。と思つて、運轉手の支那人の顔を見たが、彼は素知らぬ顔をしてゐる。
いや、これでいいのだ。何を下らない遠慮をする必要がある。

私が、何故こんな事を思つたかは、説明しなければ分かつて頂けないだらう。

私は「昨日も、昨日も、このビルを訪れて、最初の日に、うつかり中央のエレベーターに乘らうとして、支那人の運転手から劍突くを喰つて憤慨したのである。なぜならば、この中央のエレベーターは、外人専用のエレベーターで、東洋人は左右の二臺に限つて乗ることになつてゐるのださうである。

それが今日は、中央のエレベーターに乗つても、運転手は文句も言はずに、素知らぬ風を裝つてゐるし、同乗の外人達も、碧眼をあらぬ方角へ向けてゐるのである。

四階の中華映畫の事務所は、出社してゐる社員の數も餘りなく、ガランとしてゐて、訪ねる多田裕計君の顔も見えない。

誰か窓から外を見てゐる肩巾の廣い男の後姿を圍んで、一二三人の人が見えるだけである。

「多田君は來てゐませんか」

私の聲に振り返つた窓側の人達の中の一人が、

「よオ、どうしたい」

と、明るい太い聲で、私に呼びかけると、ツカツカと近づいて來た。

「よオ、虎ちやんか」

私達は手を握つた。

「多田君は近づくよ。まあ、掛けろよ」

國木田虎雄——この、文豪國木田獨歩の嗣子——と、相逢はざること幾年だつたらう。外人とも見紛ふ堂々たる體格で、頭髪には少しばかり銀髪を加へてはゐるが、人懐こい微笑を頬のあたりに見せてゐる面影は、昔と少しも違つてゐない。

「白くなつたな」

「ははは……。もう幾年になるかな。だが、氣は青年だよ」

私達は聲を上げて笑つた。

「この記念すべき日に、友あり遠方より來るだ。まづ一獻といふところだが、残念ながら
素寒貧だ」

國木田虎雄は、矢張り國木田虎雄である——と、平然たるものである。

「僕も租界に入つては、今日ばかりは素寒貧なんだよ」

「では、俺に任せろよ」

私は、國木田虎雄氏に兩替を頼んだ。國木田氏は會計のところへ行つたと思ふと、間もなく法幣を攢んで現れた。

「ちや、羊肉シカツでも御馳走しよう——ではねえ——御馳走にならう」

「だが、未だ時間が早やすぎるよ」

私は窓側に椅子をならべて、深い鎗底の様な四馬路の雜踏を眺めながら、租界の性格を語る國木田氏の話に耳を傾けた。

私などには復雜怪奇としか思はれない租界の性格も、上海の住人から見れば、全く日常の茶飯事なのであらう。

例へば、日々に使用する法幣にしても、十數種にも分れてゐて、ある種の紙幣などは、場所によつては全く使用できなかつたり、昨日まで日本軍票十圓に對し、銀ドル四、五元だつたものが、國際情勢のニュース一つで、一舉に三十元に落ちるなどといふこともある。

るといふのである。

金錢——兩替屋——にしても、大別すると三種類もあり、匯割莊といふのが、最も規模の大きなもので、一種の銀行とも言へるほどで、持主は上海金融業組合の會員になつてゐる。元字莊といふのは、金融業組合に加入してゐないが、上海ドルで百萬ドル程度の資本を左右してゐて、預金、當座、保險、貸付から、倉庫業、貿易にまで手を擴げてゐると云はれてゐる。

だが、錢莊の大部分は、上海の街を歩いて見ると、大通りは勿論のこと、狹い路地にも細い横町にも、到るところに仰々しい目印の旗を掲げて、店を開いてゐる。そんな店の中には、純然たる錢莊はなく、煙草や菓子を賣つてゐるのが、普通ださうである。

「なるほどね」

ちよつとしたデマ・ニュース一つで、一舉に十元、二十元と上下する貨幣價值——日本では、夢にも想像できないことが平然と行はれてゐる。

「毛唐の婆さんなどが、薄暗い錢莊に首を突つ込んで、磅のレエトを聞いて、ちよいと眉

をすくめて、隣の店へ聞きに行くなんてのがザラなんだ。又、隣の店へ行くと、高いなんてことがあるんだから、不思議なんだよ」

私にはどれもこれも珍らしい話である。

「だが、アメリカ・マリン（米國海兵）なんて奴等が巾を利かしてゐたのも、一つには米弗が無闇に高かつたからだよ。二三枚の米弗紙幣を投げ出せば、千弗以上になつたんだからね」

「アメリカ兵といふ奴は、物見遊山に支那へ來てゐたんだね。そして、結局は今朝のウエークみたいに、危いと見ると、さツさと白旗を上げる。呆れたもんだ」

「……といふ譯さ。何事も世界第一、負けるのも世界第一。だが、まあ屋上へ出てみないか」

私達はエレベーターで、十七階の屋上へ上つて見た。屋上から見た上海の市街は、ごたごたと無統制に、都市の美觀などを無視して、雑然と長江のデルタ地帶に、異様な姿をし、地平線の彼方にまで擴がり、冬の陽のなかで霞んでゐた。踏み躊躇られ、叩き潰され



『美英倒打』で前の司公義大・地心中の路京南
動活の部道報軍陸るす布撒を單傳の

をすくめて、隣の店へ聞きに行くなんてのがザラなんだ。又、隣の店へ行くと、高いな
てことがあるんだから、不思議なんだよ」

私にはどれもこれも珍らしい話である。

「だが、アメリカ・マリン（米國海兵）なんて奴等が巾を利かしてゐたのも、一つには米
弗が無闇に高かつたからだよ。一二枚の米弗紙幣を投げ出せば、千弗以上になつたんだか
らね」

「アメリカ兵といふ奴は、物見遊山に支那へ來てゐたんだね。そして、結局は今朝のウエ
ークみたいに、危いと見ると、さツさと白旗を上げる。呆れたもんだ」

「……といふ譯さ。何事も世界第一、負けるのも世界第一。だが、まあ屋上へ出てみない
か」

私達はエレベーターで、十七階の屋上へ上つて見た。屋上から見た上海の市街は、ご
たごたと無統制に、都市の美觀などを無視して、雑然と長江のデルタ地帶に、異様な姿を
し、地平線の彼方にまで擴がり、冬の陽のなかで霞んでゐた。踏み躊躇られ、叩き潰され



『美英倒打』で前の司公義大・地心中の路草南
動活の部道報軍陸るす布撒を單傳の

たやうな支那家屋の上に、近代建築の粹を凝らした數十階の、巨大な摩天樓の如きビルディングが、太陽の光を受けて、くつきりと上海の空に、明暗の色も鮮やかにそゝり立て、聳えてゐる。

「あの摩天樓の一つ一つに、昨日まで米國旗が風に磨き、英國旗が翻へつてゐたんだぜ。俺なんかには、ちよいと夢のやうな氣がするよ」

租界に君臨してゐた米・英勢力を、さまざまと見せつけられ、身をもつて闘つて來た人達にとつて、今日のこの光景には、全く感慨無量なものがあるのであらう。

上海の歴史は——東亞の歴史は、日本の大好きな力によつて、劃期的な旋回をしようとしてゐるのだ。

四階へ降りて來ると、多田君が待つてゐた。

「今夜、ちよいと會議がありますので失禮します。國木田さん、頼みますよ」

「あゝ、いいよ」

「それから、明日から租界の映畫館で、進駐ニュースを上映しますよ」

「租界の映畫館で……。ほほう、そいつは素晴らしい」

「何しろ絶対に間に合せるといつて、現場の連中は頑張つてますよ」

多田君は、では又明日、といつて出かけて行つた。

「進駐の時は、僕などは相當緊張したんだが、かう手際よく、堂々と接收が出来るのは思はなかつた」

「それはさうだよ。何しろ重慶系の反日銀行、ガス會社、電話會社、水道會社、米英系の銀行、商社、放送局、デパートからホテルに至るまで接收したんだが、映畫館なんかも、平常通り興行させるといふんだから、租界の治安も立派なものさ。しかし、明日から進駐ニュースを上映させるとは上出来だよ」

「なにか、餘りに平和的すぎてほんやりするくらゐだね」

私達はハミルトン・ハウスを出た。

街頭には、まだ壁に貼られた布告に読みふける群衆が、後から後からと續いて、人の流れを、ところどころ堰きとめてゐる。

今朝、對日協同聲明を發表して、日本への協力を誓つた工部局の支那巡捕たちが、嚴めしい様子で、拳銃などをぶら下げて、所在なげに人波に押されて立つてゐる。

「新申報」の號外の速報が、街の壁や屏に、先刻よりはぐーんと數を層して貼られてゐる。華文なので、私などには充分に意味は分らないが、凡そ推察だけはつく。

(日軍航空部隊は眞珠灣を攻撃して、米國大西洋艦隊を擊滅した)

(日軍陸軍部隊は馬來半島に敵前上陸をし、目下戦果を擴大中なり)

そんな文字が、私達の眼に鋭く刺さつてくるのである。それにしても、上海の、この平和な街の姿は何んといふのだらう。人波の中に、白いターベンを卷いたシーケ族の、あのもちやもちやの漆黒の髪をたくはへた印度人巡警が、巨軀を見せて悠然と街角につゝ立て、交通整理をしてゐるのも平常の通りである。

日本軍の警備兵が行進して來ると、支那巡捕も、印度人巡警も道を譲り、このシーケ族の巨人巡警などは、早くも舉手の禮をしたりなぞしてゐる。

新世界の邊りへ來た時に、黃褐色の軍用トラックが駛つて來た。見ると車上に大きなス

ピーカーがつけられてゐて、支那語で何か喚めいてゐる。何處から出て來たのか、見る見るうちに、支那の民衆がわツと、トラックを取囲んでしまつた。

宣傳の傳單が、パツと花瓣の様に投げられると、民衆は先を争つて拾ひ上げてゐる。自動車は傳單を撒き、放送を終ると、群衆を搔き分けるやうにして疾驅して行く。鋪装された路上には、色とりどりの傳單が、ばらばらに散つてゐた。

私はその一枚を拾つて、泥を拂つた。

——廢除英美勢力、建設新東亞

美國といふのは、アメリカのことなのだ。どこから美などといふ文字を使ふのか分らないが、私達には、アメリカを指して美國などといふ文字を用ひるのは分らない氣がする。競馬場の堀が見えた。その入口のところに（〇〇ぶたい、まつもとたい）と書いた字が見えた。

華美電臺の前で、兵士の一人に、名刺を托した松本隊長はここにゐるのだらう。

「僕はちょっと知人を訪ねて來るよ」

國木田氏は、外で待つてゐるといふので、私は入口の歩哨に断つて、競馬場へ入つて行つた。衛兵控所で訊ねると、

「只今外出中ですが、直ぐに戻られると思ひます」

残念だつたが、國木田氏に外で何時までも待つてもらふこともできないので、私は外へ出た。

「佛蘭西租界の方へ行つて見るか」

「佛蘭西租界へ入れるかな。今朝は鐵條網だの、バリケードを構へて、交通を遮斷してゐたけれど」

「なに、大丈夫だよ」

競馬場の横から、佛蘭西租界の方へ抜けて行つた、佛蘭西租界は、今朝ほどの物々しい警戒も解かれたのか。歩哨の姿もなく、どこが境界線なのか分らなかつた。

だが、この租界は米・英租界とは違つて、支那人の往來する姿も餘りなく、靜かで穏やかだつた。それは、全く別世界へ來たやうな感じを、われわれに與へる。

「ここがアベニュ・ジョツフルだよ」

マロニエの街路樹が、今はもう葉を落しかけてゐて、物さびた姿になつてゐるが、明るい陽の下を、ステッキをついた白髪の老人が、散歩をしてゐたり、犬を連れた女がハイヒールの音を、鋪道に響かせて歩いてゐたりしてゐて、上海名物の黃包車の姿なども、この通りへ來ると、殆んど見掛けないのも不思議である。

霞飛路——このマロニエの街路樹の並んだ通りを、佛蘭西人達はアベニュ・ジョツフルと呼んでゐるのである。

佛蘭西流にアベニュ・ジョツフルと呼ぶのは、佛蘭西人達の望郷の所産であらう。だが、霞飛路といふ支那流の文字も、なにかこの街らしい性格を現はしてゐさうである。私達ものんびりと、店々の飾窓をのぞき込んだりしながら漫歩した。この街は、せかせかと歩いたり、大聲を出したり出來ないやうな、しつとりとした落着きを見せてゐる。

「さア、羊肉でも喰べるとしようか」

國木田氏の案内で、佛蘭西租界近くの、薄汚い料理店の、狭い階段を私達は上つて行

つた。

料理と白酒が、頭をてかてかに剃つた支那人のボーイに運ばれて來た。

私達は、白酒の盃を上げて、米・英撃滅戦の必勝のために祈つたのである。

歴史の轉期（二日目）

中華映畫の事務所には、活氣が溢れてゐた。川喜多副社長の部屋へは、支那映畫界の人達が頻繁に出入りしてゐる。

「張善根がやつて來たぜ」

振り向くと、茶褐色の洋服を着た六尺豊かな大男が、印度人のやうな銀黒い顔に、大きな眼を光らせて、副社長室へ忙ぎ足に入つて行つた。

多田裕計君の説明によると、

「上海の映畫製作會社は、昨日中にすつかり整備され、今後は絶対に南京國民政府の命令で和平映畫を製作させ、資金なんかも、必要に應じて中華映畫から融通し、機械や俳優達も中華映畫の傘下に統括することになつたんですよ。映畫館なんかは、從來通り經營させて置きますが、上映する映畫の検閲は、我々の手に握つてゐるんですから、これからは

日本系のニュースや文化映畫なんかも、どしどし上映することになるでせう」

そんな話をしながら、私は窓から聞えてくるざわめきに気がついて、谿底の様な四馬路を見下ろした。

「ほう、毛唐の行列だ」

私がここを訪れて來た時には、まだそんな光景は見られなかつたが、今、多田君の聲に誘はれて見下ろすと、このビルディング——ハミルトン・ハウスを取囲んで、外人の男や女が、ずらりと行儀よく一列に並んで、先頭はビルディングの入口に消えてゐるのである。

それは珍らしい光景だつた。

私にしても、生れてからこの方、こんなに澤山の外人を、一ヶ所に集めて見るのは始めてだつた。かうやつて見ると、外人の一人一人が、皆それぞれ違つた顔付をしてゐるのが、奇妙に見えてくる。

「驚いたね。こんなに敵國人がゐたんだね」

「こつちも感慨無量だが、奴等も感慨無量だらうな」

褐色、褐青色、茶色、金色、白銀色……と、彼等の頭を、上から見下ろしてゐると、頭髪だけでも、相當の種類に區別出来る。

「そりや眼色だつて、碧色、蔚色、灰色などと區別が出来るからね。奴等には日本人のやうな純粹性がないんだよ」

「容貌にしたつて相當な代物があるよ」

私達は勝手なことを話ながら、何時までも飽かず眺めてゐた。外人の行列は、いつ果てるともなく、續々その數を加へて来る。それと共に氣付いたことだが、この外人の行列を、道路の向ふ側に立つて、呆然と見守つてゐる群衆がある。

支那人の一團なのである。ここからは、判つきり彼等の表情は分らないが、一ヶ所に立つたまゝ、凝つと動かない彼等の様子には、言ふべからざる零圍氣が漾つてゐるのである。

「出かけませんか」

暫近かい時間だつたので、多田君を誘つた。多田君も時計をのぞいて、身支度をした。

「出かませう」

エレベーターで一階へ下りて見ると、玄關横の一室が、我が憲兵隊の事務所になつてゐて、在上海の米・英人を出頭させて、登録の事務を執つてゐるのであつた。

「敵國人を登録させるぐらゐで、一ヶ所に集めて監視なんかしないんですかね」

「全く……奴等はアメリカなり、英國にある我々の同胞を、こんな風に扱ふか、僕は大いに疑問だと思ふ。自由だの、平等だのといふのは口先きばかりで、從來の支那、その他の植民地に對する侵略なんかから考へると、彼等の人道主義などといふものは、立派な假面なんだからね」

私達は、日本の堂々たる寛大な態度に、彼等を自由させて置いてもいいのかと、この外人に憤慨せられたのである。

ビルディングの表口へ出ると、私は先刻から氣になつてゐた道路の向ふ側に在つて、外人の行列を見てゐる一團の支那人達の方へ進んで行つた。

いつ見ても、青黃色い支那人の顔は、際涯もなく廣い大陸のやうに、無表情だが、この

一團の支那人の顔には、微かながら奇妙な表情が浮んでゐた。的確に、これが彼等の心であるとは言へないが、彼等の心の奥にある表情は、かうとでも言ひ現はせるのではないとかと、私には思はれる。

——これは果して本當なのだらうか。この行列をしてゐる外人達は、一昨日まで豪然と構へて、われわれを願使してゐた外人達と同じ人種なのだらうか。いや、信じられない。だが、これは、確かにわれわれの上に君臨してゐた外人達に相違ない。全く奇妙なことになつたものだ。外人達は日本などには負けない。勿論、租界には絶対に手を觸れさせはないと言つてゐたが……。

私は彼等の表情から、彼等の心をかう解釋したのだが、この大陸的な國民の心は、私などの日本的な思考力とは違つてゐるのかも知れない。だが、人の世の中の興亡盛衰などには、太古の昔から馴らされてゐて、この外人の行列なども、ちよいとした見世物だとしか考へてゐないのかも知れないのだ。

「何を感心して見てゐるんです」

「いや……」

「トリコロールへでも行きますか」

私達は南京路のレストラン・トリコロールへ行くことに一決した。トリコロールは日本系だけに、昨日も、今日も店を開けてゐて、その階上で、画家の高橋忠彌君が個展をやつてゐた。私などには繪のことは分らないが、上海のスケッチばかりを描いた色彩感の豊かな繪は、溢れるやうな美しい詩情を感じさせて、心を穏やかにしてくれる。

レストラン・トリコロールは日支人で一杯で、腰をかける隙間もなかつたから、私達は畫廊への階段を上つた。

畫廊は閑散としてゐて、高橋君は一人で、窓側のソファで煙草をくゆらせてゐた。

「やあ、どうしました」

多田君は長身を屈めるやうにして、近づいて行つた。

「慌てず騒がずですよ。昨日も個展をやつてたんですね。勿論、誰一人として訪れる人もありませんでしたよ。ところが、ひょっこりと、黒絹の支那服を着て、支那靴をはい

た老人が見物に来ましてね

「あの騒ぎの最中に……」

「さうなんですか』と流暢な日本語で云ふと、静かに一枚一枚見て廻つてゐたんですが、最後に『これを一枚買ひませう』と云つて、二百圓の繪を買つて行きました。あの少女の顔の繪なんです

私は、その話を聞いてゐるうちに、色彩感の豊かな油繪ばかりあこ部屋が、急に墨一色の南畫でも見るやうな閑寂な、潤ひのある静けさに感じられたのだつた。

「いい話ですね。如何にも支那ですよ」

私達は異口同音に、さう言つた。——何か静かな風景でも見るやうな感じがしたのである。

だが、硝子窓一重の外は、上海隨一の繁華街で、永安、先施、大新、新進公司などの各百貨店が、狭い道路の上にのしかゝるやうに建つてゐて、原色の色彩も生々しい廣告用の旗だの、幟だのが、秩序もなく下げられ、自動車、バス、電車、黃包車に、無軌道電車な

どが難然たる音響を發して、都會の噪音を奏でてゐるのである。

その騒音に、私達の幻想は、一瞬にして見事に破壊されてしまふ。

「さあ、食事にしますか。高橋君、食事はどうです」

「僕はもうすませました」

「ちやあ……」

私は腰を浮かしかけて、窓の外を見た。私の眼に、窓の下の南京路の、車道の兩側に沿つて、陸戰隊の兵士達が、銃剣を肩に、四、五尺位の間隔を置いて、周囲の雜踏などには目もくれずに、整然と巡邏してゐるのが、力強く寫つた。

一昨日（七日）の夜などは、この附近などをぼんやり漫歩などしてゐられなかつた。それが今日は、あの妖しい雰圍氣などは、少しも感じられないのである。
私達が暢氣に話をしてゐる間にも、日本の逞しい力は、刻一刻と敵性租界を急速に變貌させつゝあるのだ。

それは誰人も拒むことの出来ない、日本の大きな力なのだ。大東亞建設の記念すべき無

血進駐が、上海租界に大きな歴史の變貌をもたらしたのだ。

數日後、私は長崎丸の甲板に立つてゐた。この長崎丸は、開戦の八日の朝、東支那海の朝靄を衝いて、天津に向ふ米國のブレスデン・ハリソン號を發見した海鷺に協力し、同船を監視中、突如脱走を企てたハリソン號を猛追し、吳淞沖の淺瀬に乗り上げさせて、我が海軍に拿捕させた殊勳の船だつた。

この船の船長菅源三郎氏のことが、船客の話題になつてゐた。

「菅船長の長崎丸に乗れるとは光榮ですよ。何しろ殊勳の船ですからね」

黄浦江には、十二月の冷雨がしとしと降つてゐた。甲板の上から見る上海には、又別の趣があつた。沿岸に並んだ巨大な建物、茶褐色のブロードウェイ・マンション、遠くにパーク・ホテルの尖塔のやうな建物が霞んで見える。

米・英色を奇麗に拂拭した上海は、新しい世紀の息吹きを受けて、大東亞の上海として甦らうとしてゐるのだ。

私はカール・クローの「花園の洋鬼」「オーチェンジビル・ス・イン・ザ・ウォーリングドーム」の最後の一節を、ふと想ひ出した。

——だが、私達の家であつた上海はもうないといふことを、私達は知つてゐる。色々な國から來た澤山の良い友人達は、仕事が滅茶苦茶になつたり、破産したりして、世界の隅隅へ散りぢりになつてしまつた。再び歸へつて來ない者も澤山あるだらう。

私達が避難者として、後に殘して來た上海は、たゞ私達の追憶においてのみ生きることであらう。

洋鬼「洋キ」の時代は終つたのである。

その通りである。東亞に於ける西洋の惡魔どもの時代は、過去のものとなつてしまつたのだ。歐米人の上海はもうなくなつた。

東亞には新しい世紀への、逞しい進軍が開始されてゐる。そして、上海にも、世紀の曙が、強く明るく射してゐるのだ。

長崎丸は、船脚を速めて、黄浦江の濁流を蹴つて行く――。

私は甲板に立つて遠去かつて行く大陸を見つめてゐた。

——洋鬼の時代は終つたのである。だが、彼等の播いた惡魔の種は、さう簡単には一掃されさうにもない。しかし、われわれは飽くまでも、惡魔の種を一掃するために闘はねばならぬのだ。

私の脳裡には、いろんな支那人の顔が浮んで来る。

重慶を脱出して來たといふターキストの顔。

香港へ逃避してゐる兄の安否を氣づかつて、その憂愁を青白い額に見せた陳素蘭の顔。

我々も東洋平和のために、日本の實力を認めねばならぬのだが——と、流暢な英語で語

づた李の顔……。

だが、彼等の苦惱も、彼等の懷疑も、煩悶も、一切は歐米的なものから脱却して、東洋への復歸の一時的な心の戦ひなのである。

船は、黄濁した揚子江の濁流の中を進んでゐる。

雨はまだ降りつゝいてゐる。

私の貧しい報告はこれで止めよう。だが、私は長崎丸の菅船長のことを、最後に附記しなければならぬ。

長崎丸は、昭和十七年五月十三日、長崎港外で不幸にも觸雷のために沈没した。

菅船長は、長崎丸沈没の責任を負つて、後始末の一段落した五月二十日に、東亞海運長崎支店の樓上で、日本の海員魂の烈しさを見せ、立派に自決を遂げられたのだつた。

それは、眞一文字に割腹し、頸動脈を搔切るといふ、古武士の切腹の作法にのみ見られる潔よさであつたと、檢死官は語つてゐる。

私は長崎丸の一乗客として、謹んで菅船長の靈に哀悼の意を表させて頂く。

十二月八日の上海（終）

あとがき

この一篇の現地報告は、私の大陸への、いまだに消えやらぬ憧れの表現に過ぎません。機會あらば、もう一度、大陸へ渡りたいといふ希望を、私は今だにもつてゐます。何がそんなに、私の心を牽きつけるのかは、歴然とした形では、私にも分つてゐませんが、五千年の古い歴史と新しい世紀の曙光とが、揚子江の黄濁せる奔流のやうに、逆巻き、渦巻きしてゐる大陸の形相が、不思議な魅力を、私に感じさせるのだと、私はひそかに自問自答してゐます。

『十二月八日の上海』——といふ仰々しい表題で、この現地報告を発表するのは、私としましても、誠に意に添はず、いさか氣恥しさず感するのですが、大東亜戦争勃發といふ歴史的な瞬間に、敵、米英の東亜侵略の根據地たる上海にて、全世界を震撼させた世纪の砲撃の一場面を目撃し、又、軍報道部の一員として、租界進駐に参加を許されたことが、私をして、敢へて此の文章を書かせることになつたのです。

昭和十六年九月に、文藝春秋社特派員兼從軍記者として、満洲から北支、北支から中支へと歩いて來ました。この現地報告は、その中支の分のみを纏めたものです。中支での私の行程は、南京、蘇州、漢口、上海といふ順序だつたのですが、この本では、揚子江を南京から漢口へ遡江し、漢口から南京へ歸へり、蘇州を経て上海へといふやうに、揚子江を上流から下流へといふ風に編纂しました。従つて、時日の關係その他のことが前後してゐますが、その點はお断りいたします。

もちろん、僅かな日數を、たゞ漠然と大陸を歩いて來たに過ぎないのですから、私の大陸に對する觀察などは、全く取るに足らないものであることは、私自身も充分に承知してゐます。しかし、私は、私の見たまゝ、感じたまゝを、正直に誇張するところなく、こゝに書きしるしました。しかし、ここに書かれてある支那は、どこまでも、大東亜戦争勃發直前の支那であることを、御承知願ひたいと思ひます。

その後の支那大陸は、どう變化してゐるだらうか——私の心の中に去來するものは、大東亜戰勃發後の支那のことです。政治的にも、經濟的にも、大きな變動を受けてはゐるも

の、依然として蟠踞する重慶的思想との抗争は、いよいよ激しさを加へて行くのではな
いだらうか、と私は考へるのです。

不遜な言ひ方ですが、大東亜戦争を勝ち抜くことが、支那事變を處理することであり、
支那事變を處理することが、大東亜戦争を勝ち抜くことであらうと思はれるのです。

最後に、この一篇の中に、今も東亜建設のために奮闘しつつある友人達の姓名を、その
まゝ記しましたことを深くお詫びいたしますとともに、出版に際しまして、多大の激励鞭
撻を頂きました知友諸君に、厚く感謝の意を表します。

昭和十八年二月

著者

昭和十八年三月二十日初版印刷
昭和十八年三月廿五日初版發行
(五、〇〇〇部)

十二月八日の上海

停定價壹圓八拾錢

著作者

西

川

光

発行者

鈴

木

吉

印刷所

三

光

社

印刷所

東京市下谷區御徒町三ノ八二
會員番號一一六〇三四四
振替口座東京六〇一六四四
電話下谷(83)六二二四番

發行所

泰

光

堂

東京市下谷區御徒町三ノ八二
會員番號一一六〇三四四
振替口座東京六〇一六四四
電話下谷(83)六二二四番

配給元

日本

出版

株式會社

東京市神田區濱路町二ノ九

(出文協承認
あ370396號)

新銳皇民文藝叢書

岩下俊作著

長篇 小説 秋廊

B 6 版二六二頁
定價一圓八十錢・テ十五錢

大正九年頃から滿洲事變迄の、放恣なる自由主義と安易なる享樂主義の中につつて而も尚それ等の風潮に禍ひされない清純な戀愛と、犠牲の精神を高潮した書下し長篇小説。

大庭さち子著

長篇 小説 激浪をつく

B 6 版二七八頁
定價一圓八十錢・テ十五錢

大東亞共榮圈建設のため邁進せんとする祖國と歩みを共にして、立ち上る一群の人々の生活を通して新しい日本的性格を創造せんとする作者會心の書下し長篇小説。

浅野武男著

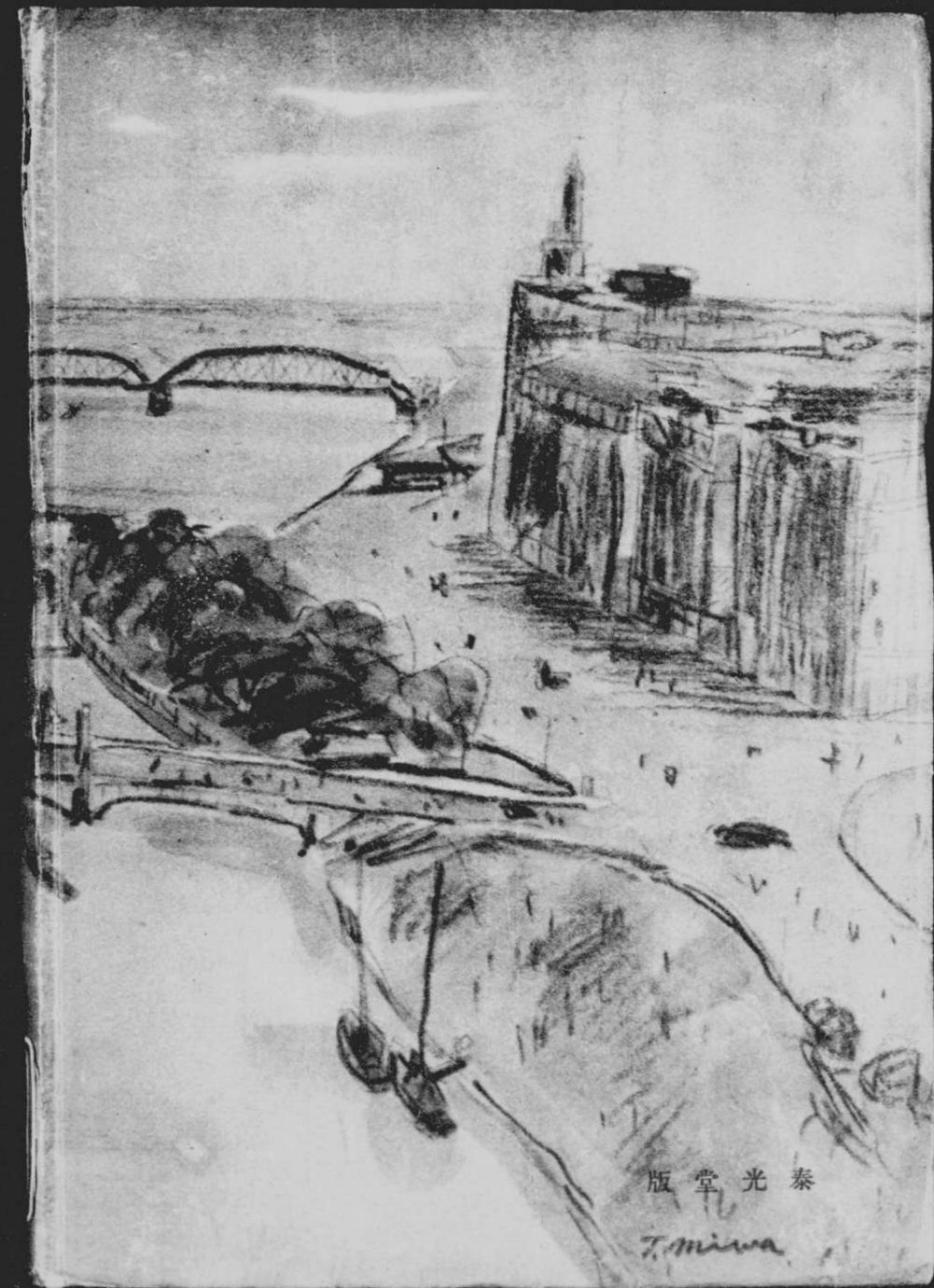
長篇 小説 朝靄

B 6 版二七二頁
定價一圓八十錢・テ十五錢

不幸な環境に生ひ立つた一人の人間が、個人的な愛情を追ひ求めてゐた小さい巡禮の姿をかなぐり捨て國家への大いなる愛情に眼醒めるまでの人間記録を描く書下し長篇小説

964

159



泰光堂版

T. minwa